

910.26-Ki396ㄗ



1200500754464

910.26  
Ki396

×  
複  
写



始





27-94

910.26  
KI396



少年文學史  
明治篇

下卷

童話春秋社版





## 序

私が木村小舟君の名を知つたのは、今より四十三四年前、君が博文館に入り、盛んに少年の讀物を出された頃であつたと思ふ。その頃巖谷小波君の宅に於て、君にお目にかゝり、その號の示す如く、舟とすれば小舟であり、人とすれば紅顔の少年であつたことを思ひ出す。

爾來私の身上にも、幾變遷があり、木村君の事も聞かぬ様になり、又書かれた物も殆んど目に觸れぬやうになり、全く忘れて了つて居たのであつた。

然るに、今春四月五日、巖谷榮二君の結婚披露宴に於て、同君と同席したのであるが、私は、君の來て居られる事には、氣も付かずに居たが、同君から名乗られて、その巨身老體に驚き、「これでは、小舟ではなく、大舟であり老舟である」と、笑つた事であつた。人は誰でもさうであらうが、自分の年寄つた事は分らず、久しく會はぬ人を見て、その變化に驚くのが常であるが、木村君の場合には、特にそれを著しく感じ



た。

その際、私は「此頃、新聞雑誌などにも、君の御書きになつた物を見ぬやうですが何かにお書きになつて居ますか」と尋ねたら、「今少年文學史の編纂に従事して居ますが、不目その初篇が出版されます故、その節は、贈呈させますから、御覽下さい」との、好意ある返事であつたので、私も之を謝して、互に昔を偲んだのであつた。

然るに、七月に入り、曾約の如く、少年文學史の明治篇卷上が贈られ、それには、八十一歳の坪谷水哉翁が、序文を物せられて居る。私は、之を讀んだ丈けでも、昔の事が、あとから／＼、胸中に浮び來り、その中には、亡き人も多く、眞に今昔の感に堪へぬものがあつた。更に進んで、本文を概觀し、拾ひ讀みした丈けでも、穎才新誌にせよ少年園にせよ、私の書きし物の掲載せられたもので、その當時の懐しさは、唯經驗ある人のみの、同感し得る所であらう。

木村君は、卷下に、私の序文を求められた故、私は「少年文學史の序文には、私よりももつと恰適の人があるでせう。併し、若し外に無ければ、私が書いてもよい」と回答して置いたら、君は、折返して、左の如き真情の籠れる書を寄せられた。

(前略)何方と申さうより、是非共、先生の御筆勞を煩はし、永く記念にいたし度き存念に有之、曲げて御聽許被下度、折入つて御願申上候。其はじめ、小生巖谷小波の門に入り、お伽嘶創作の見習をいたし候頃、(明治三十二三年の頃)、先生の高著兒童心理學の新刊を承り、大早に雲霓を望むが如く、直に購入耽讀いたし、大いに得る所有之、即ち間接に御教導をいたゞき候關係に有之候(中略)

兎に角、右様の次第なれば、四十餘年前の教へ子の意味にて、是非々々御書き被下度、日本に於ける兒童心理學が、先生によりて端を發したることは、或意味に於て小波のお伽嘶と同様と愚考仕候。(下略)

此の如き熱心なる手紙に依つて懇望されては、辭するに由なく、初よりの關係を叙述して、序文に換へた次第である。

最後に、特に一般讀者に告げて置きたいのは、此の書が嘗に私どもの如き、老齡にして、過去を體驗して居る者に興味があるのみでなく、現在少年文學に興味を有する



人々は勿論、青少年にして、將來此の種文學を研究せんとする人にも、必讀の書たることを勸告する。何事をなすにも、過去の歴史を疎にしては、大成を期し難い。日本の少年文學も、先人が如何に苦心して今日に到らしめたかを、十分認識せねばならぬ。私はこの書の昭和の今日に至るまでの全篇の續出を待つ者である。

昭和十七年八月初五

七十八翁 高島平三郎識

## 緒言

本卷は、上篇の後を享けて、明治三十二年度に筆を起し、進んで明治四十五年より、大正の初頭Xにまで及ぼし、前後約十五年間に於ける、少年文學上の主なる事項、就中書籍雜誌類の刊行を、略々年序を逐うて解説せるものであります。即ち上下兩冊を通じて、明治少年文學の變遷經過を概説し得たものと信じます。

先づ搖籃時代に始まり、爾來幾多の隆替消長を経て、時に波瀾萬丈を極め、漸く完成の域に達するや、已にして其の末期頃より、大正初年にかけて、漸く沈滯時代に入ると共に、早くも一方にありては、革新の胎動さへ聴取し得られるやに想はれました。されば本卷に於ては、特に明治末期より大正期に移る時代相をば、能ふ限り明確に把握し、讀者をして其の認識を深からしめんことを期したのであります。

勿論、其のこゝに至るまでには、明治三十七八年戦役といふ我國空前の大戦争に直面し、舉國戦時體制の下に、非常なる決意を以て終始しましたので、此の期間は、嘗に少年文學といはず、すべての平和的出版事業も、亦一時全く埒外に置かれ、爲に未曾有の苦境に立たざるを得なかつたので



あります。顧るに、當時に於ける人心の自肅緊張は、到底既往の日清戦役、若しくは北清事變の比ではなかつたやに想はれます。

洵や、皇國の興廢を賭して起てる此の一戦は、過去十年間、六千萬同胞が、臥薪嘗膽忍苦戮力、一途に推進したることゝて、眞に烈々たる必勝の信念に燃えたつたのも、亦固より其の筈であります。されば兒童の娛樂、或は趣味を本位とする出版方面に、時間的に相當の緊縮を見たるも、實に已むを得ざるところにて、而もそれが専ら自發的の顯れであつたことは、敢ていふまでもなく、即ち明治の少年文學界は、かゝる受難時代に當面するも、毅然としてこれに耐へしのみならず、寧ろ十年の忍苦の玆に漸くにして酬いられしことに、大いなる矜持と希望とを感じたのは、疑なき事實といはねばなりません。

かくて戦後に至り、勝利の餘光に乗じて、再び輝しき時代を迎へましたものゝ、やがて十年間不斷の緊張力の、こゝに至つて幾分減退せるものゝ如く感ぜられ、加ふるに浮薄皮想なる外力の禍するところにや、漸を追うて舊時の眞面目の廢れ去らんとする傾向さへほの見ゆるあり、延いては其の趨勢が大正時代にまで持ち越されて、やがてかの歐洲戦争の餘波を蒙り、甚だしき弛緩の情勢を馴致する因となりました。

さて、本卷に於ては、この三十七八年戦役を中心として、前後數年間に亘れる幾多の變轉を記述し、當時の人心の趨向、少年の動靜、及び社會一般の施設等に至るまで、具さに説破したい所存でありましたが、何分にも、私の寡聞管見に加ふるに、老來記憶力耗衰の致すところ、遺憾ながら其の眞相の十分の一をも表現し得なかつたことは、自ら省みて慚愧に堪へぬ所であるのみならず、特別にお詫び申上げなければならぬと存じます。

殊に明治少年文學の裏面史ともいふべき、當時の文筆業者の生活様式とか、或は少年の趣味教養とか、乃至は少年雑誌記者、少年作家、及び畫家等の創作揮毫に對する態度、熱意、更には此の間に於ける幾多の秘められし事實逸話等をも、凡そ事情の容す限度に於て、力めて詳細にこれを述記し、以て後者の参考たらしめたき心構で有りましたが、それ等は紙數制限の關係と、且は本書の性質上、やゝ不適當の感あるやにも認めましたので、一先づこれを割愛し、他日本書の續篇として追加執筆し、以て首尾一貫を期したい所存であります。

蓋し、眞に時代の様相を闡明し、其の因つて來る所を極め、且認識を深めんとするには、只單に表面に發顯せる事實のみに俟てばとて、到底これが萬全を期し得られません。即ち要は其の裏面に伏在するところの、而も殆ど世間に知られざる事實、若しくは既に全く閑却せられて、空しく暗の裡に葬り去られたる事柄をも、悉く明るみに露出して、何等の遍するところ無く、仔細に再検討を試み、かくして表裏照應、明敏透徹せる觀察を下すにあらざば、時代の眞實を體得することは出來



なからうと存じます。

本書明治篇上下二卷は、主として表面に現れたる事實を掻い摘み、而も其の一小部分、乃至一面を羅列したるに過ぎません。随つてこれが記述にも、甚だしき不徹底を感じるのも亦已むを得ないことであります。されば私が、本書の外篇を編むことに決意しましたのも亦これが爲に外ならぬのであります。幸に當期間に於きましては、其の一局部とはいへ實地事に當りし關係にて、其の見聞體驗にも、表裏共通して、稍實情を記し得るに庶幾からんかと存じます。即ち此の意味に於て、外篇をも併せて御高覽下されますやう、豫めお願い申し上げます。

却説、この下卷の叙述は、これを前卷に較べますと、私自身實地其の局に當れる時代に屬しますから、筆を進める上にも、相當の確信を以て斷定を下すと共に、自由なる批評をも加へることが出来ました。それだけに、あらうを少くして、である、と云ひ切つた點が多いのであります。尤も本卷の後半部は、種々の事情に依つて、可なり多くの出來事を省略せざるを得ませんでした。何れにしても、眞に完璧の明治少年文學史を編まんとするには、少くとも二三千頁の紙面を以てしなければなりません、それは到底微力の者の能く成し得る所ならねば、後の識者の檢討努力に俟つて、大成せられることゝ存じます。

兎もあれ、以上明治二十二年頃の搖籃時代より、徐々に發達の歩を進めつゝ、明治末期に至る

まで、これに精進したる作家の意圖、畫家の巧思、編輯者の熱意、出版者の考慮等、一々觀じ來れば、亦相當に大いなる犠牲の拂はれしことは否み難く、又それだけに、何等かの示唆を受くることも少くなからうと信じます。而して私の此の書を編める主たる目的も、又こゝに在ることは申すまでもありません。

勿論、それは時代の雰囲気の然らしめし所ではありませうが、よしや物質に恵まるゝこと薄かりしにせよ、原稿を書く者と、書物を作る者とが、常に唇齒輔車の誼を以て兩々相授け、各自節操を重んじ、堅忍不拔の意氣の下に、共存共榮の實を發揮したる一事は、今日より追想するだに、洵に麗しい時代であつたと云はねばなりません。假令其の作品は、今日より見て、甚だ低級幼稚なりしにせよ、眞摯にして熱心な態度に於ては、寧ろ後者の倣ふべき點の、多々あることは争ひ難いところと思はれます。

摺筆に臨みて申添へます。本卷に序文を賜りました高島平三郎先生は、我國に於ける兒童心理學の新部門を開かれたる、教育界の大先覺であります。されば或意味より申せば、高島先生が前人未墾の新境地を拓かれたことは、其の先見の明と、功績の著しさに於て、正に巖谷小波先生のお伽嘶と同架して、永く後世に傳ふべきであります。

なほ下卷の編纂に當りまして、例の如く大橋圖書館、巖谷榮二、新井弘城、村木綠葉、尾張穂草



の諸氏が、其の御所藏の圖書を貸與せられ、且數々の教示と注意とを下されし御厚意に對し、特に感謝の意を表したいと存じます。

昭和十七年初秋

著者識

# 少年文學史 明治篇

## 下卷目次

### 第五編 最盛時代

第一節 「少年讀本」の創刊……………	三
第二節 「世界お伽噺」の創刊……………	一四
第三節 「世界歴史譚」の創刊……………	二六
第四節 「少年世界」第五卷……………	三四
第五節 主筆と編輯者……………	五
第六節 「初航海」と其の他……………	五七
第七節 「修身童話」の發行……………	六三
第八節 「幼年讀本」の出版……………	六九



第九節 主なる少年雑誌……………七三

第十節 「幼年世界」の誕生……………八三

第十一節 「少年世界」第六卷……………九三

第十二節 童謡に就て……………一〇〇

第十三節 漣山人の外遊……………一〇四

第十四節 文祿堂の出版物……………一一一

第十五節 研堂の理科書類……………一二五

第十六節 「少年商業文庫」其他……………一三六

第十七節 「少年世界」七・八卷……………一三三

第十八節 當時の投書家……………一三九

第十九節 「少年界」其他……………一五三

### 第六編 一新時代

第一節 「少年世界」第九卷……………一五九

第二節 「お伽芝居」に就て……………一六六

第三節 「明治お伽噺」の出版……………一七〇

第四節 「教訓繪噺」の出版……………一七八

第五節 「日本昔噺」の英譯……………一八四

第六節 「明治少年節用」の出版……………一八九

第七節 時事新報社の「少年」……………一九四

第八節 富山房の少年書類……………二〇一

第九節 繪葉書の流行……………二〇六

第十節 戦時の「少年世界」……………二一〇

第十一節 「護國幼年會」其他……………二三八

第十二節 戦争と少年書類……………二三三

第十三節 「少年少女智識畫報」……………二三九

第十四節 少年文の傾向……………二四四

第十五節 挿畫々家の變遷……………二四八



第七編 邁進時代

第一節 「幼年畫報」の創刊……………三五六

第二節 「少女世界」の誕生……………三六八

第三節 「日本少年」と「少女の友」……………三七五

第四節 「兄弟」「姉妹」其他……………三八四

第五節 三雜誌の特色……………三八八

第六節 少年文學の作家……………三九六

第七節 お伽噺に就て……………三〇三

第八節 「お伽花籠」其他……………三二六

第九節 「少年世界」第十二卷……………三三三

第十節 「お伽共進會」の發行……………三三〇

第十一節 教訓假作物語……………三四四

第十二節 「家庭お伽噺」に就て……………三五四

第八編 完成時代

第十三節 お伽噺に對する意見……………三六〇

第十四節 「世界お伽文庫」……………三八二

第十五節 「お伽畫帖」の出版……………三九〇

第一節 「幼年世界」の再刊……………三九六

第二節 玩具に就いて……………四〇〇

第三節 後の「少年世界」……………四〇四

第四節 投稿文の推移……………四一〇

第五節 「歴史讀本」の創刊……………四一六

第六節 「少年日本地理」……………四二三

第七節 小波お伽百話……………四三八

第八節 「少年少女文學」……………四三三

第九節 其の他の少年書類……………四三五



# 少年文學史

明治篇  
下卷

## 目次

六

第十節 お伽噺の變遷……………	四四三
第十一節 少年雜誌の變貌……………	四五〇
第十二節 摺筆に臨みて……………	四五八

目次終



## 第五編 最盛時代

### 第一節 「少年讀本」の創刊

明治二十四年一月より、同二十七年十一月まで、前後四ヶ年に亘つて、都合三十二冊の出版を完了せる「少年文學」は、他の幼少年用叢書類が、悉く絶版に付されて、其の影を消し去れる後も、依然として命脈を存し、而も讀者の要求益々多く、毎年幾回となく版を重ねる間に、逐次木版の磨減缺損を來したので、或はこれを改刻したり、又は着色版の度數を減じたり、更に挿畫の全部を改作したり、あらゆる工作を施して、辛くも其の需要に應ずるといふ状態であつた。

かの「こがね丸」や「寶の山」や、其の他の挿畫が、後年重版のものに、著しく生彩を失つたのは、凡手の畫工をして、原畫の引寫をなさしめ、以て一時を糊塗するといふ姑息手段を用ゐた爲である。

かくばかり評判を得たる「少年文學」は、既に記せる所の如く、殆ど其の全部が、「少年小説」と、「少年史傳」とに依つて構成せられ、兩種の篇數は、略相半してゐる。こは因より最初より豫定



したる事ではなく、只偶然にも、かゝる結果を將來せるものと想はれる。

そこで「少年文學」中の、史傳の部分では、今一層推し廣めて、新しく一叢書の出版を企てしなれば、必ずや讀者の歓迎を受くるであらうことは、實際出版の局に當る者の、當然考慮に入るべき

問題でなければならぬ。

こゝにいふ「少年讀本」

の企畫は、「少年文學」に於ける史傳の延長に外ならなかつた。されば亦、其の發行の趣旨にも、明瞭に此の旨を陳べてゐる。

弊館往年「少年文學」を發行して、江湖の喝采を博したりき。今や



(筆方年) 紙表の本讀年少

更に「少年讀本」を發行して、曩日の志を繼ぎ、以て新たに江湖諸君に見えんとす。

「少年讀本」は一冊讀切にして、毎月一回之を發行す。其記する所は、本邦近世の英雄、豪傑、

高僧、烈婦、文人、學者等の傳記にして、一冊一人を限り、筆者は皆當代の文章家なり、行文平易流暢、眞に少年讀本の名に負かざるべく、讀みもてゆくうち、人をして志氣を振興し、心胸を開拓し、拍案快を呼び、擊壺妙を叫ばしむべきものあらむ。

其筆下風雨を起こし、紙底鬼神を泣かしむるの概、未だ必ずしも贅せず、當年の「少年文學」を愛讀したる諸君は勿論、苟くも有爲の志を懷抱せる少年諸君は、毎編購讀して、海濶天空の氣象を養ひ、轉乾旋坤の事業を爲すの端緒とせよ云々。

即ち「少年讀本」は、主として本邦近世の偉人英傑に材を求め、時代の趨勢を諒解し、極めて周到の用意を以てせるが如く、最初より一定の方針を立て、且これが執筆者には、當該人物に因縁を有するか、若しくは多年其の研究に没頭せる人々を物色して、これを依頼せるものと想はれ、かの「少年文學」の史傳の、甚だしく人物混淆したるに比して、一段の進歩を示したるや亦云ふまでもない。

さて、新企畫の「少年讀本」は、表紙にのみ、多色刷の石版畫を用ひ、本文は菊判約百頁、全部四號活字に依り、巻中には數個の大形木版挿畫を加へて其の趣味を豊かならしめ、而もこれが筆者には、從來版畫の方面に筆を執ること稀なる横山大觀、下村觀山、菱田春草等の新進を起用し、思ひ思ひに得意の快筆を揮はしめたるは、頗る偉觀といふべく、而もこは、大橋乙羽の奔走盡力の結果



なるやに見られる。

殊に第一編として、先づ發行したる福地櫻痴の「高島秋帆」の完成までには、幾度となく乙羽自ら足を運び、特に懇望したる旨が、同書の序文として掲ぐる櫻痴の書簡に明記せられるに徴すれば、「少年讀本」の創案が、主として乙羽の胸中に描ける希望を實現せるものと想はれる。蓋し乙羽は、曾て「少年文學」の一冊に、「上杉鷹山公」を編みて、多大の好評を博した人である。

「少年讀本」は、かくの如くにして、明治卅一年十月創刊、毎月一回若しくは隔月一回づつ發行して、連續數年に及び、遂に五十冊もて結了を見た。即ち其の最初の豫定の如く、これに依りて、近世偉人の大部分をば、ほゞ網羅し盡し、少年をして英雄偉傑の面孝に親炙せしめ、大に英氣を振作すると共に、自己玉成の基礎たらしめんとする目的は、殆ど達成せられし者と認むべきである。次に其の全部の題目と執筆者とを掲げよう。

- |     |        |        |      |        |        |
|-----|--------|--------|------|--------|--------|
| (一) | 高島 秋帆。 | 福地 櫻痴。 | (二)  | 白河樂翁公。 | 中村 秋香。 |
| (三) | 河井繼之助。 | 戸川 殘花。 | (四)  | 三條實美公。 | 依田 學海。 |
| (五) | 曲亭 馬琴。 | 饗庭 篁村。 | (六)  | 井伊掃部頭。 | 巖谷 小波。 |
| (七) | 山田 長政。 | 暹塚 麗水。 | (八)  | 錢屋五兵衛。 | 桐生 悠々。 |
| (九) | 春日 局。  | 岸上 質軒。 | (一〇) | 水戸 烈公。 | 野口 珂北。 |

- |      |        |         |      |        |        |
|------|--------|---------|------|--------|--------|
| (一一) | 桐野 利秋。 | 春山 鶴峯。  | (一二) | 藤田 東湖。 | 大和田建樹。 |
| (一三) | 伊能 忠敬。 | 幸田 露伴。  | (一四) | 新井 白石。 | 武島 羽衣。 |
| (一五) | 水野 越州。 | 中村 二葉。  | (一六) | 池 大雅。  | 田山 花袋。 |
| (一七) | 木内 宗吾。 | 松原廿三階堂。 | (一八) | 西郷 隆盛。 | 川崎 紫山。 |
| (一九) | 坂本 龍馬。 | 坂崎 紫瀾。  | (二〇) | 横井 小楠。 | 大野 洒竹。 |
| (二一) | 貝原 益軒。 | 石原 笠堂。  | (二二) | 渡邊 崙山。 | 渡邊 霞亭。 |
| (二三) | 中濱萬次郎。 | 石井 研堂。  | (二四) | 近衛忠熙公。 | 勢多 章之。 |
| (二五) | 間宮 倫宗。 | 笹川 臨風。  | (二六) | 周布政之助。 | 堺 枯川。  |
| (二七) | 荻生 徂徠。 | 内田不知菴。  | (二八) | 松平 伊豆。 | 森山 吐虹。 |
| (二九) | 中江 藤樹。 | 國府 犀東。  | (三〇) | 島津齊彬公。 | 春山 鶴峰。 |
| (三一) | 高野 長英。 | 于河岸櫻所。  | (三二) | 橋本 左内。 | 桐生 悠々。 |
| (三三) | 釋 月性。  | 于河岸櫻所。  | (三四) | 平野 國臣。 | 白河 鯉洋。 |
| (三五) | 熊澤 蕃山。 | 幸田 成友。  | (三六) | 雲井 龍雄。 | 玉木 椿園。 |
| (三七) | 野中 兼山。 | 北村 香陽。  | (三八) | 大鹽平八郎。 | 堀 紫山。  |
| (三九) | 佐久間象山。 | 塚原 澁柿。  | (四〇) | 小栗上野介。 | 勢多 章之。 |

「少年讀本」の創刊



- (四一) 阿部伊勢守。 熊田 葦城。 (四二) 松尾 芭蕉。 國府 犀東。
- (四三) 石川 丈山。 田岡 嶺雲。 (四四) 徳川 吉宗。 草野 正義。
- (四五) 烈女お藤。 藤本 藤陰。 (四六) 林 子平。 松居 松葉。
- (四七) 塙 檢校。 長谷川天溪。 (四八) 本居 宣長。 落合 直文。
- (四九) 高田屋嘉兵衛。 中村冷露。 (五〇) 大槻 磐水。 大槻 如電。

以上列挙するところの如く、此の叢書の執筆者が、其の題名の偉人に對して、何等かの縁故あるか、又は出身地の先輩なるか、但は平生崇拜する人物なるか、何れかに因る所多く、随つて亦これが記述にも、非常なる慎重と感銘との加へられしことは、確かに本叢書の特徴と認むべきである。併しながら、これを幾年の「少年文學」に比すれば、正確なる史實に依れること、其の執筆者が、必ずしも文學方面の人々のみでは無く、爲めに幾分趣味に缺くるものゝ多かつたのは、否み難い所とはいへ、兎も角もこれだけの偉人傳叢書を、遅滞なく完成したる努力は、蓋し並々ならぬものである。

猶ほ、これと相前後して、裳華房にても略同様の企畫の下に、主として長田偶得の手に編纂せられし偉人史叢があり、次で文武堂にては、源平以降の英雄を選び、「少年史傳」の題下に、先づ十二冊を出版することゝした。

即ち、これが第一編として現れたるは、高山樗牛の「平相國」にて、さすがに流麗典雅の筆致を以て描かれ、美文的要素を含める點は「少年讀本」の何れの巻をも凌駕するの感があつた。次に同書中、「平家興隆の由來」の一節を掲げて、内容の一部を推知せしめよう。



(筆峰年) 紙表の傳史年少

一期の榮耀、浮かべる雲の如くにして、没蔭の恥、はやく後昆の踵につぐ。まことや祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色、彼れに諸行無常の響あり、此れに盛者必衰の理あり、奢れるもの久しからず、猛き心も遂には滅びぬる世の習ひなるに、

平相國太政入道清盛が一生こそ、なか／＼に心も詞も及ばれぬ。

そも／＼事の次第を按ずるに、平家の興れる、一日のことに非ず、世運の推移、由つて來ると



ころ甚だ遠し。清盛武弁の家に生れ、殿上の交りをだに嫌はれし身を以て、忽ち樵籬の家を凌ぎ、位人臣を極め、權勢上下に並びなきを得たる、一身の材器に依るもの素より多かるべきもそも／＼亦時勢也。

それを如何といふに、昌泰延喜のそのかみ、寛平帝の宿志を受けて、藤原氏抑制の地位にありし菅公の流竄せられし頃より、天下の大權全く藤原氏の手落ち、皇威はより永く陵替し、藤氏の一門廊廟に充ち満ちぬ。彼等胸に何等の經綸の策あるに非ず、花晨月夕、たゞ宴遊の樂みに耽り、畫眉涅槃、徒に巾幗の姿を弄ぶ、あるは風騷これ喜びて、梅が香に春を痛み、蟲の音に秋を哀しみ、あるは優柔これ尙びて、檐近き山の端の月を愛で、前栽に匂ふ撫子花の麗しきを偲ぶ。衣冠束帯の威儀なきに非ざれども、文恬武黜の弊やう／＼極まりぬ。たゞ夢の世に夢の如き榮華を追ひ、櫻かさして暮らしつる百數の大官人こそいとまありけれ。華山一條以降に及びて是の腐敗は更に甚しかりき。かゝれば朝綱いつしか地に墜ちて、四方の政漸く振はず、地方には豪族跋扈して良民塗炭の苦を受け、國司亦私門を張つて朝命を奉ぜず、政府力無くして是を如何ともする能はざるに及びては、藤氏の權柄漸く空名に近づきたるを見る。源平武士の時代は、是の間に於て、默々の中に轉移しつゝありき。

源平の武士、亦その由て來るところ頗る遠し。史を按ずるに、承平天慶以前にありては、特に弓馬の家を稱するもの無かりき。將門純友の亂あるや、朝廷勇悍の士を募りて、是を討ぜしめ、許すに官爵を以てせり。弓馬の家としての平家、源氏の祖先とも見るべき、平貞盛源經基の名は、是に於て初めて史上に現れぬ。

貞盛の子維衡は、武名乃父に劣らず、其の子孫伊勢に住して、所謂伊勢平氏と稱す。清盛は實に維衡五世の孫なり。維衡の弟繁盛、その孫維茂は、奥羽、信濃、越後に著はれ、城、仁科の族あり、勢力漸く地方に布けるを見るべし。經基の子に、多田新發意といへりし滿仲あり、滿仲の子に賴光、賴信あり、武名共に當代を歴せり。殊に賴信、平忠常を上總に誅してより、東國は永く源氏勢力の根據となれり。賴信の長子賴義は、前九年の役に驍名を轟かし、其の孫義家は、後三年の戰に武威を輝かしぬ、賴朝は實に義家の曾孫也。(中略)

藤原氏衣冠束帯を以て、天下の權柄を秉れること二百年、まゝ東國北邊の禍無きに非ざれども天下幸に大事無かりしかば、累代の積勢尙ほ多分の力あり、攝籙の名目依然として重きを朝廷に稱しぬ。されど勢は終に極まりぬ。天下の事、最早や虚名の爲し難きものあり、是に於て武家の實力は時代の要求に應じて喚び起されぬ。事是に到れば、世は官階の上下にあらずして、弓矢の強弱なり、畫眉涅槃の大官人は、禁色の素袍美はしからざるに非ざれども、軍律の前には用なき人となりぬ。かくて世は武人のものとなりて、源平兩家の榮ふべき時は來りぬ。而し



てこの機運を速やめたるものは、即ち保元平治の亂に外ならざりき。

保元平治の亂の精しきは暫らく説かじ、唯保元の際、兩帝位を争ふに當りて、杖柱とも頼み給ひたるは、源平の武士なりき、彼等の向背は、直ちに天下の大事を左右するの力ありき。清盛義朝こゝに兩家の勢力を代表して、威望當代を壓しぬ、世は既に武人の手に落ちては、こゝにおのづから武人の間に權力の争ひ起らざるを得ず、平治の亂は是の如くにして興りき。源氏の勢力は、其の頭領たる義朝と共に没落して、一世の武力は全く平家の手に落ちぬ。かくて平清盛が前代未聞の榮華を輝かすべき時代は來りぬ。是を平家興隆の由來とす。

と、縦横無碍の才筆を呵して、一卷の清盛傳を草してゐる。惟ふに前記「少年讀本」五十篇を通じて、其の文章の風格に於ては、これと比肩し得る程の雄編は、只の一冊だも求むることは出來まい。勿論好き嫌ひはあれど、大體を通じて見る時は、「少年讀本」の記述は穩健平凡にして、只其の事實の正確を期したるところに、これが價値を認むべきであらう。

然るに「少年史傳」は、聊かこれと趣を異にし、寧ろ迫力あり、熱意に富める絢爛たる文章に依りて、讀者の興味を牽引するに努めたるが如く、随つてこれが題目に徴するも、

- 第一編 平 相 國 文學士 高山樗牛。
- 第二編 鬼 吉 川 文學士 大町桂月。

- 第三編 旭 將 軍 文學士 中内蝶二。
- 第四編 鎮 西 八 郎 國府犀東。
- 第五編 常盤・靜・小萬 大町・中内・國府。
- 第六編 俠 僧 文 覺 文學士 高山樗牛。
- 第七編 北 條 時 宗 國府犀東。
- 第八編 小 楠 公 文學士 大町桂月。
- 第九編 眞 田 幸 村 文學士 中内蝶二。
- 第十編 上 杉 謙 信 國府犀東。
- 第十一編 俠 骨 利 兵 衛 文學士 大町桂月。
- 第十二編 北 條 早 雲 文學士 中内蝶二。

を豫定し、或は天下無双の勇將、又は一代の英傑、若しくは武人としての最好標本、又は絶世の飛將軍、俠者、美姬等、苟くも少年が舊相識の時代人物を選び、新進氣鋭の四文人が靈活なる筆に託し、逐次出版すべく多大の期待をかけられた。

然るに此の意義ある新計畫は、其の第四編を上梓すると共に、何故か早くも一頓挫を招來し、遂に中絶の外なきに至れるは甚だ惜むべきことであつた。——猶ほ「少年史傳」は、其の外装、及び



内容の形式とも、全く「少年讀本」と軌を一にし、たゞ其の差は、彼の定價拾三錢なるに對し、これの拾五錢を唱へるのみであつた。

### 第二節 「世界お伽噺」の創刊

巖谷漣山人は、明治廿七年以來、三十一年まで、前後五星霜を費し、本昔噺二十四冊、及び「日本お伽噺」二十四冊を完成させた。蓋し漣山人は、毎月二回發行の「少年世界」を主宰しつつ、猶ほ且毎月一冊平均の割合を以て、此の煩勞多き兩叢書を、首尾滞りなく結了せしめた。其の精力、其の根氣、よしそれが片々たる小冊子にはあれ、健闘努力、到底凡人の倣ひ難きものがあつた。

而も、亦當然の順序として、日本の後に來るべきものは、世界である。「日本お伽噺」の完成に次いで、「世界お伽噺」の創められることに、何の不思議があらう。漣山人は、茲に百尺の竿頭一步を進めて、遂に「世界お伽噺」の大成を企て、身を以て此の至難の業に當らんと期したのである。さりながら、苟くも世界といへば、其の範圍頗る廣汎にして、且各國固有の昔噺、口碑傳説、若しくは創作お伽噺の類も亦少しとせぬ。これに對して、編者は、如何なる用意を以て臨まんとするか、前人未到の境地を拓くは、快は即ち快なりと雖も、前路に横はる困難も、亦尋常ならぬものがあつた。

ある。嗚呼果して編者は、如何なる態度を以て、能く盤根錯節を切らんとするか。

試みに、これが第一編「世界の始」に序したる緒言に就いて、窺ひ見ることにする。——猶ほ



(筆折不) 紙表の噺お界世

「世界お伽噺」は、「日本お伽噺」の完成直後、即ち明治三十一年一月下旬を以て、華々しく創始せられた。回顧すれば、「こがね丸」著述以來、既に八年を経過し、編者の思想、筆意は、正に圓熟の境地に達してゐる。

#### 世界お伽噺緒言

諸君！ 新年お目出度う

存じます。さて長々御最眞になりました「日本お伽噺」も、昨三十一年の暮を以て、全部廿四編、滞りなく完結致し、當三十三年の新春からは、若水に筆硯を清めて、更に「世界お伽噺」の編纂に着手する事になりました。是全く諸君の御愛顧の致すところと、厚く感謝致します。



殊に此度の「世界お伽噺」は、従来の昔噺、お伽噺と違ひ、總て材料を世界各國から取らねばなりません、而も此種の著述書は、日本にまだ類が無いのですから、自然原書に付いて取調べなければ成らず、是吾々淺學の者には、頗る困難な事業で、所謂荷の勝つた仕事ですが、幸に先輩諸君の御助力を得て、此本邦未發の編著に着手することになりましたのは、寔に過分の光榮に存じます。

されば私も、今度は一層の奮發を以て、已に一年ほど前から、材料收拾に掛つて居りましたが、何分世界全國を相手の、廣い仕事でありますから、勿々私如き疲腕には、十分集めきれません。で仕方がありませんから、まづ神話とか經文とか、太古史とか、風俗史とか、乃至は口碑、傳説の全集類を、及ぶべきだけ收拾し、又時には、其道に精道せる先輩諸氏の教を乞うて漸く取り掛かることが出来たのです。

それで先づ材料の手に入つた順から、段々に書き初めて、全世界の重な地方から、其特色の話柄を集めて、例の二十四編を以て完成させる考案にしました。

一體お伽噺には、種々な種類がありまして、獨逸話で云ひますと、メエルヘン（奇異な話を小説的に書いた物）、フアーベル（教訓の意を寓した比喩談）、ザアゲ（古來の言ひ傳へ）、エルツエールング（歴史的物語）の四種に成り、そして其中のザアゲが、フォルクスザアゲ（民間の口碑）、へ

ルデンザアゲ（勇士の口碑）と、かう二つに別れて居ります。

日本には、まだ適當の譯語がありませんから、通例には只お伽噺と云つて居りますが、其中に自ら種類があります。彼の少年世界の巻頭に、私の始終書いて居りますが、まづメエルヘンに屬するもの、又それに教訓の意味を含ませた「新伊蘇普物語」のやうなものが、即ちフアーベル、又「日本昔噺」は、大抵ザアゲを集めたもので、「舌切雀」「桃太郎」の類を、所謂フォルクスザアゲといひ、「八頭の大蛇」「羅生門」などは、立派なヘルデンザアゲです。それから「日本お伽噺」になると、ヘルデンザアゲ四分に、エルツエールング六分で、たゞ「姨捨」と「羽衣」とが、フォルクスザアゲになつて居ります。

さて今度の世界お伽噺、これは何に屬するかといひますと、今一概には云へませんが、主としてザアゲを取り、それにメエルヘンの有名なものを補つて、全部を完成させる心算です。尤もその中には、エルツエールングの混る事もあります。けれどもそれは必ずしも正史には依りません、只成るべく愉快な、成るべく活潑な、そして成るべく大きな噺を選んで見ようと思ふのです。

この大きな噺とは、只話の長いのを云ふではありません、其事柄の壯大な、其意味の積極的なのを云ふので、これは讀者の精神を、之によつて引立たせ、少年諸君の氣性をば、これに依



つて鼓舞しようと思ふ、いはゞ編者の用意であるのです。

尤も神の名、人の名、所の名などは、必ずしも原名に據りません。只記憶の便利を計つて、成るべく読み易いやうにしました。これは然しながら一二先輩家の注告に従つたのです。

處で世間には、此のお伽噺の眞價を解せず、あゝいふ根無し事を教へるのは、子供の爲によろしくないとか、妖怪話や不思議話は、少年教育に害があるなどと、窮屈なことを云ふ人があります。而も教育家を以て自任してゐる人達の中にも、随分此の説が行はれてゐるので、かういふ人は、僅かにフアーベル丈は解りませう、けれども他のメエルヘンや、ザアゲには、少しも眼識を備へてゐないので、實にお氣の毒な次第ですが、共にお伽噺を語るに足りません。

此の事に就いては、まだ云ひ度いこともありますが、新年早々理窟を云ふのは、あまり感心したことはありませんから、此處では只、お伽噺の種類をば、さつと説明した丈にして置きます。

諸君！ 我親愛なる諸君よ、若し此の點に意を注いで、よくお伽噺の性質を腹の中に入れてから、さて其本文を味つて御覽なさい、さうすれば定めし一層の愉快を覚えませう。

終りに臨んで、一言諸君に御吹聴することがあります。それは他でもない、私が此の編纂に着手するに當つて、大に賛成の意を表され、又材料收拾の便を與へて下された先輩諸君のお名前

です。

即ち、文部省専門學務局長文學士上田萬年君、農科大學教授理學博士北尾次郎君、陸軍々醫監醫學博士森林太郎君、早稻田中學校教頭文學士坪内雄藏君、外國語學校教授鈴木於菟平君、學海居士依田百川君、露伴幸田成行君、文學士高山林次郎君、秋濤長田忠一君などは、大いに助力を與へられたので、其他某々の外國に留學して居る友人間にも、それ〴〵照會して少なからぬ便宜を得ました。此等は今此處に記して、聊か謝意を表して置きます。

三十二年正月吉日。

巖谷小波。

右の如き長篇の序文が三號活字紅刷を以て、第一編の巻頭に、堂々と掲げられ、「世界お伽噺」編纂に對する著者の用意と抱負の一端を漏らして居る。これを彼の「日本昔噺」の宣言の洒落澤山の辭句に比すれば、洵に天地霄壤の差ありといふべく、今や編者は、眞率着實なる見識を持って、此の意義ある新しき事業の爲めに精根の限を盡し、金剛不動の信念を以て其の貫徹を期して起つた。正にこれ我國のお伽文學界に、一大烽火を揚げしものと見るべきであらう。

「世界お伽噺」は、如何なる筆致を以て編まれたか、先づ第一編の巻端を披いて、編者の存意を窺はねばならぬ。

世界は一體如何して出來たものでしょうか、さうして又人間といふものは、全體どうして出來



ましたらう？ それは、今から何萬年前とも算へきれない、昔の昔のすつと大むかし、造物主といつて物を造<sup>つく</sup>へる主、則ち天にいらつしやる神様が、丁度六日の間かゝつて、この世界を拵へたのであります。

まづ一番最初の日には、大きな水の塊を置いて、それに明るい光と、暗い闇とを拵へ、明るい方を晝、暗い方を夜と、かう二つに別けました。これが初日の仕事でありました。

次の日には、その水の塊を、上と下とに別けまして、上の方を蒼空<sup>あそら</sup>、則ち天と名付けました。これが二日目の仕事でした。

三日目には、又其下の水の塊を、乾いた處と、濡れた處とに別けまして、乾いた處を陸と云ひ濡れた處を海と云ひました。それから又陸の上には、種々の木や草を生やしました。これが三日目の仕事でした。

四日目には、年や月や日や時を、ちゃんと見別けることの出来るやうに、日と月と星とを拵へ日には晝を守らせ、月には夜を照らさせ、又月の居ない時には、澤山の星で照らすやうにしました。

五日目になりますと、今度は魚だの、鳥だの、虫だの、獸だのといふ、種々の生き物を拵へまして、魚は水の中に泳がせ、鳥は空に飛ばせ、又虫や獸には、地上を匂はせるやうにしました。これが五日目の仕事でした。

さて、かういふ鹽梅<sup>えんばい</sup>に、世界も大方出来まして、草や木や、魚や鳥や、虫や獸などが、澤山に出来上りましたが、かうなつてみますと、其草や木や生き物の頭にたつて、世界を巧く治めて行く者が、どうしても無ければなりません。そこで造物主は、いよいよ人間を拵へることになりました。まづ地上の土を取つて、自分と同じやうな形を拵へ、其鼻の穴から、フツと息を吹き込みますと、自然に動き出しましたから、これをアダムと名づけまして、萬物の靈、即ち世界の頭としました。

かういふ筆法を用ひてゐる。即ちこれを從來の諸作に較ぶれば、特殊の讀み癖ある文字も少くない、且其の書き振にも、何所となく眞面目の態度が窺はれ、一字一句、相當慎重なる注意の拂はれたることが看取せられる。

また、此の叢書の各篇には、其の性質上、序文に代ふるに、一々解題を附して、國別、出典を明かにしたが、それに依れば、此の第一編の内容は、「舊約全書創世記の中から、専ら材料を取り、或は太古のザアゲかも知れないが、普通の太古史にも傳へられ、世界に最も多く信ぜられてゐる話ゆゑ、故らに「世界お伽噺」の第一編として採用した」旨を記してゐる。猶ほ本編の附録には、別に「人間の始」といふ短篇が添へられてあつた。



かくして「世界お伽噺」は、編者の異常なる精勵によりて、何等の故障もなく、何等の蹉跌も起らず、順次其の編数を重ねて行つたが、何分にも既刊の「日本昔噺」や「日本お伽噺」とは趣を異にし、世間未知の珍話奇譚を集めしことゝて、果然豫期以上の好成績を挙げ、はじめ廿四冊を以て完成せしむべきものを、都合百冊に延長し、連続數年に亘る大事業にまで推進するに至つた。

尤も此の間、編者の外遊もあり、彼の地より遙々稿を郵送し來るなど、非常なる努力の下に、不斷の進行を怠らなかつた。今左にこれが總目錄を掲げて、編者精進の跡を追懐しよう。

- (一) 世界の始。 (二) 五色の石。 (三) 珊瑚島。
- (四) 魔法博士。 (五) 無人島大王。 (六) 鬼婆と少女。
- (七) 法螺先生。 (八) 二人王子。 (九) 小人國。
- (一〇) 孫悟空。 (一一) 驢馬姫。 (一二) 大人國。
- (一三) 豫言書。 (一四) 王城乗取。 (一五) 續法螺先生。
- (一六) 猿智慧小僧。 (一七) 酋長征伐。 (一八) 夢の三郎。
- (一九) 鷲の踊。 (二〇) 光明姫。 (二一) 鶏の使。
- (二二) 日の車。 (二三) 三人片輪。 (二四) 白い鳥。
- (二五) 消炭太郎。 (二六) 十二王妃。 (二七) 狐の裁判(上)。

- (二八) 狐の裁判(下)。
- (二九) 奇體の洋燈。
- (三〇) 獵師大臣。
- (三一) 九重の塔。 (三二) 虹の橋。 (三三) 魔法の卵。
- (三四) 岩の船。 (三五) 鐵の王子。 (三六) 鐵の狼。
- (三七) 浮かれ胡弓。 (三八) 鳥の王。 (三九) 三つの難題。
- (四〇) 德利長者。 (四一) 梨の殿様。 (四二) 黒足小僧。
- (四三) 黄金の船。 (四四) 幸福の花。 (四五) 大洪水。
- (四六) 刀三本。 (四七) 石の行方。 (四八) 手無し姫。
- (四九) 啞の女王。 (五〇) 骸骨島。 (五一) 三筋の金髮。
- (五二) 鬼大名。 (五三) 魔法學校。 (五四) 鴛王子。
- (五五) 朝星夕星。 (五六) 法螺競べ。 (五七) 指輪の魔力。
- (五八) 二子草紙。 (五九) 鬼だまし。 (六〇) 二人半助。
- (六一) 病魔降伏。 (六二) 金馬將軍。 (六三) 熊狼。
- (六四) 龍宮の使。 (六五) 森の女。 (六六) 日の罰。
- (六七) 浮かれ笛。 (六八) 活水死水。 (六九) 光の劍。
- (七〇) 木兎太郎。 (七一) 少年國。 (七二) 小人鼻助。



- |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
| (七三) 龜の智慧。  | (七四) 世は情。   | (七五) 變身術。   |
| (七六) 豆の手蔓。  | (七七) 薔薇姫。   | (七八) 地獄廻。   |
| (七九) 九番人形。  | (八〇) 金髮王女。  | (八一) 新塞翁。   |
| (八二) 木馬物語。  | (八三) 馬の首。   | (八四) 三つの王冠。 |
| (八五) 馬尾裁判。  | (八六) 甲良武者。  | (八七) 樽の七郎。  |
| (八八) 極樂草。   | (八九) 犬の王子。  | (九〇) 馬鹿利口。  |
| (九一) 人魚の約束。 | (九二) 乞食の豫言。 | (九三) 運探し。   |
| (九四) 奇牛の角。  | (九五) 九羽鳥。   | (九六) 三度の願。  |
| (九七) 魔王ア、。  | (九八) 鬼妻。    | (九九) 正直正吉。  |
| (一〇〇) 南犬北犬。 |             |             |

右に掲ぐる題目の中、第廿四編「白い鳥」以下は、外遊中の執筆にかゝり、また第四十一編「梨の殿様」は、外遊を終りて歸朝の途上、神奈川丸の船室に於て執筆したるもの、随つて着京早々其の挿畫の速成を期する必要により、達筆を以て知らるゝ尾形月耕に依頼してこれを描かせたことを記憶する。

兎もあれ「世界お伽噺」は、幼少年の讀み物として最も評判高く、これにつれて東京にても大阪

方面にても、何々お伽と題する類書の出版頗る多く、中にも日本橋の某赤本店にては、大波瀾、某畫として、表紙の意匠より、内容組版に至るまで、殆ど瓜二つとも見らるゝ紛はしき叢書の現はるる情勢となり、あまりにも不徳義のものに對しては、特に考慮すべきやう交渉せることもある。

また、前にも記したる如く、多くの無名畫家が、自己宣傳の手段として、挿畫執筆の依頼を受け度き旨、極力運動を試みたるも、要するに「世界お伽噺」が、都鄙の別なく、到る處に行き亘り、恰も今日の繪本類と同様、専ら兒童家庭の好友として迎へられし證左と見られよう。

而して「世界お伽噺」は、明治四十一年六月を以て、全部百編滞りなく完成を告げ、同時に和田英作の装幀によりて、クロス製十冊の合本を作り、主として良家の机上に飾られしこともあり、次でまた内容に多少の修訂を施し、袖珍型の美本仕立として、再び世に問うたこともあつた。

かくて年を経るまゝに、發行所の營業方針變更の爲めかこれが増刷を敢へてせず、空しく絶版に附したるを以て、既に市場に其の影を絶つこと十餘年、今日これが経過を知る者少しと雖も、我國の兒童社會に對して、世界的趣味の普及に貢献せる一事は、斷じて没却すべきではあるまい。猶ほ此の叢書の後半部に於て、さながら影の形に添ふ如くに、其の資料の探查提供に盡したる、高階經靈(柳蔭)の存在を明かにして置く。



### 第三節 「世界歴史譚」の創刊

前記「世界お伽噺」の誕生と、殆ど其の時を同じうして、博文館は更に、「世界歴史譚」三十六冊の出版企畫を發表した。曾て「日本お伽噺」の出づるや、一方には、大和田建樹の「日本歴史譚」を併行出版して、相當の効果を収めた。そこで今また「世界お伽噺」と同時に、「世界歴史譚」を發行するは、蓋し當然の順序と見なければならぬ。

「世界歴史譚」は、大體に於て、かの「少年讀本」と同形式の書冊にて、これが執筆者は、帝大文科出の新進學士を主とし、加ふるに法科出の秀才を選び、すべて専門學士の手腕に俟てるだけに、其の世間的信用も亦高かつた。

されば發行の主旨にも、

「世界歴史譚」は、世界歴史の各時代と、各國民を代表するに足るべき偉人豪傑の傳記なり、著者は何れも知名能文の學士なれば、事實的的確にして、評論の妥當なるは、言ふまでもなし。文章また簡明雅馴なれば、何人も興味を以て解し得べし。全部凡そ二十四冊、その近刊下の如し。

と記して、高山林次郎の「釋迦」、吉國藤吉の「孔子」、上田敏の「基督」を先づ發表し、これが

裝幀挿畫には、下村觀山、横山大觀、菱田春草、小坂象堂等の新進と、北蓮三、中村不折、渡部審也等の洋畫家を以てした。

序ながら、兼に出版したる大和田建樹の「日本歴史譚」は、署名者の實際執筆せるは只第一編の

みにて、其の第二編以後は悉く大和田門下の福島四郎（春浦、婦女新聞社長）の代作に成れるものである。

然るに「世界歴史譚」にありては、何れも新進氣鋭の文法學士等が、雄健の史筆を揮ひ、各自其の最も得意とする一人物を選び、正確なる參考文獻を基礎とし



(筆山觀) 紙表の譚史歴界世

て、英雄豪傑を解剖し、時代の様相を品臨したるものにて、各編それらの妙趣を發揮せるが中に高山樗牛の「釋迦」の如きは、朗々として誦すべき瑰麗高渾の文字を以て綴られ、發刊早々著しく



世評の高きものがあつた。

釋迦。(緒言の一節)

三千里外道相距り、三千年前時相隔つ。靈鷲の山、月長へに明に、恒河の水、昔ながらに流る



(畫挿迦釋) 意筆の山觀

れども、人は生死の巷に迷ひ、世は盛衰の道を離れず、然れば祇園精舎の花何時しか色あせて、佛陀伽耶の塔石に苔あり、今や蕭々たる菩提樹の影、羈人杖を停めて低回するも、誰か大聖釋迦の靈蹟を告げ得べき。

然れど人死して道残れり、法流一たび東を指すや、四百餘州風の如くに靡きて、十三宗蔚然として起り、更に三韓を経て日本に入るや、傳教弘法是が爲に立ち、法然道元是に縁りて起

り、親鸞日蓮是を奉じて動き、堂塔一國に洽ねく、圓頂都鄙に充つ、又盛ならずとせむや。今や世界を通じて、佛教徒と稱せらるゝもの、無慮六億萬人と稱せらる。素より世道渝り、人心移りたれば、其實既に失せて、其名空しく残れるも多からんめれど、尙ほ儼然として世界文明の一大努力たるを失はず、抑も是の一大宗教、三千年の流傳を五十年の説法に收めたる宗祖佛陀は、是れ什麼の人なりしぞ。

凡そ一宗の開祖と呼ぶるゝ人の傳記程、世に知り難きは無かるべし。そは後世の信者、其教を向仰するの餘り、知らず知らず種々神怪不測の譚話を襯付して、成るべく其祖師を神聖非凡の靈體ならしめむと務むればなり、佛陀傳に於て殊に然りとなす。

されば今日に於て、其正確なる實傳を考覈せむは、何人も能くする所にあらじ。已むを得ずんば、暫く古來の傳説に憑據して、印度佛教者が其宗祖に對する觀想如何を知るを以て足れりとせむか。こは獨り佛陀に於て然るのみならず、基督にまれ、馬哈にまれ、其奇蹟と豫言とを外にして、誰か其傳記を吾人に語り得るものぞ。且それ奇蹟と謂ひ豫言と謂ふも、事實の表裏に因みて、比喩寓言に出づるもの多かるべし、されば若し事を捨て、意を取らば、其人の性格行狀を知るに於て、必ずしも累を爲さざるべきか。

讀者よ、佛陀が其教を擴めたる印度人は、世にも想像に富める人種なるを記せよ。其神話は飄



逸にして奇異多く、其哲學は幽玄にして詩趣饒なり、彼等は詩歌として佛陀の事蹟を讚唱せしのみ、傳記として記述せしにはならざるなり。若し三十佛傳の語る所、直に取て以て佛陀の云爲となすあらば、あはれいみじき誤りなるべし。吾人亦暫く是の傳説に従ふと雖も、有識なる讀者は、箇中おのづから大聖釋迦の眞傳記を領會するなるべし。

以上は即ち此の書の緒言に記述する所にして、著者の態度、用意、及び抱負を明かにし、次で其の時代の趨勢を觀じ、進んで佛陀の誕生、宮中の生活、三苦、佛陀の決心、その出城、車匿及び乾陟との別離を描き、更に佛陀の學道、並に阿羅邏仙人にめぐり會ひて苦業の數々を聽き、成道の曉より布教を説き、或は王舍城に於ける佛陀の行業、跋提河畔の入滅の光景、附言等、すべて十五章より成り、各章悉く莊重瑰麗の珠玉の文字を列ぬるが中にも、其の入滅の光景を描ける一段は、恐らく著者會心の筆なるべく、正に壓巻と稱すべきである。

佛陀は、終焉の期近きを察し、弟子を帥ひて跋提河の岸なる沙羅双樹の間に憩ひ、阿難陀をして、北を枕にして臥床を設けしむ。阿難陀は佛陀が高弟の一人なり。是より先目犍連子は外王に殺され、舍利弗と三迦葉とは、亦已に歿したるなり。

佛陀は臥床に横はり、諸弟子を集めて、終焉の期近づけるを告ぐ、諸弟子皆悲泣して曰く、「佛陀百歳の後、我等又誰をか師とすべき」と、佛陀是に告げて曰く、「我親愛なる諸弟子よ、泣

き悲しむを已めよ、我の是世に來れるは、眞理を傳へて是世を救はんが爲なり、今や眞理の王國は建てられぬ、我は我が救世の大使命を終りたるなり、何れの時、是世を去るも、誰かそを悲しむべき理あらむや。諸弟子よ、形ある一切の物は、必ず壞るゝ時あるべし、集り成れる一切の物は、遂に散ぜざるを得ず、生ある者は、遂に死せざるを得ず、唯世に眞理のみ、永久渝ること無かるべきなり。然れば伽毘羅國の王子悉達多是死すべし、佛陀は永く滅ぶこと無かるべし、そは佛陀は眞理なればなり。汝諸弟子よ、我が教をだに守らば、我れ永く汝の傍に在るべきなり。

諸弟子よ、我の命は我が教なり、病める者は醫師を見ざるも、藥によりて癒されむ、我れ吳々も汝等に告げむ、我が道を守る者は、即ち我が側に侍せるなり。我に相見ざるを以て足れりとす勿れ。若し我が道にだに従はざらむには、我と終日相接するも、又何の益かあらむ。

弟子よ、若し汝等のうち、我が死せるを見て、「主の教は終れり」と謂ふものあらば、そは我徒に非るなり、我今肉體を離れて、三界の苦境を脱れむとす、我は我が教の爲に、一切輪廻の作業を滅盡したり、然れど諸弟子よ、佛陀は永存すべし、我が五十年の説法と、我が教會の法規とは、即ち汝等の師たるべし。

我重ねて汝等に告げむ。集り成れるものは、遂に壞るゝの時あるべし。只眞理のみ、永遠渝る



こと無し。汝等が不退轉の向上心を以て精進希求すべきものは、唯是眞理のみ。

嗚呼是の如きは、佛陀が最後の說法なりき、人天三界の大救主は、八十歳の老軀を残して、沙羅双樹の下に、大涅槃に入りぬ。諸弟子は齊しく泣き叫びて曰く、「嗚呼佛陀の來る何ぞ遅かりし、佛陀の去る何ぞ速かりし、世界の光は遂に滅したる乎、是時天轟き地震ひ、跋提河上の秋風は、六合の悲哀を吹き度して、蕭々として沙羅双樹の枝を鳴らしぬ。



(筆観大) 紙表の譚史歴界世

りし、佛陀の去る何ぞ速かりし、世界の光は遂に滅したる乎、是時天轟き地震ひ、跋提河上の秋風は、六合の悲哀を吹き度して、蕭々として沙羅双樹の枝を鳴らしぬ。

佛弟子と共に、佛陀の遺骸を焼きぬ。茶毘の煙、日月の光を掩ひ、跋提河一帯の地は、天花の爲に埋もれぬ。

翌日末羅國の人々、

と、大聖釋迦の涅槃に對して、絶太無限の美を添へてゐる。その他上田敏の「基督」、大町桂月の

「ハンニバル」等も、亦優麗典雅の文章を以て飾られ、讀者をして其の妙句に陶醉せしめた。

次に「世界歴史譚」の總目錄を掲げて、當年に於ける赤門派文士が、少年の修學上に寄與したる效果の跡を偲ぶとしよう。

第一編 釋迦	高山樗牛	第二編 孔子	吉國 藤吉
第三編 耶蘇	上田 敏	第四編 ビスマーク	笹川 潔
第五編 ハンニバル	大町 桂月	第六編 マホメツト	坂本 健一
第七編 漢高祖	三浦菊太郎	第八編 ネルソン	島田文之助
第九編 岳飛	笹川 臨風	第十編 コロンブス	桐生 政次
第十一編 ガリバルヂー	岸崎 昌	第十二編 彼得大帝	佐藤 信安
第十三編 ワシントン	福山 義春	第十四編 孔明	安藤 俊明
第十五編 ソクラテス	久保 天隨	第十六編 グラットストン	近松宇太郎
第十七編 歴山大王	幸田 成友	第十八編 王陽明	白河 鯉洋
第十九編 ガーフキルド	酒井小太郎	第二十編 デモスセネス	十時 彌
第二十一編 セキスピイヤ	中村 可雄	第二十二編 ナボレオン	土井 晩翠

「世界歴史譚」の創刊



第二十三編	孟 子	永井 石峰	第二十四編	成 吉思 汗	大田 三郎
第二十五編	クロンウエル	松岡 國男	第二十六編	ゴルドン 將軍	赤松 紫川
第二十七編	グラント 將軍	布施謙太郎	第二十八編	ウエリントン	高木 尙介
第二十九編	クリスビー	名尾 良辰	第三十編	メテルニツヒ	森山 守次
第三十一編	カピテンクーク	谷野 格	第三十二編	ジャンダーク	中内 義一
第三十三編	シーザア	柿山 清	第三十四編	チャールス大王	中大路正雄
第三十五編	フランクリン	熊谷 五郎	第三十六編	ニユートン	三好 愛吉

### 第四節 「少年世界」第五卷

戌の年(卅一年)を送りて、亥の年(卅二年)を迎へし「少年世界」は、茲に第五齡に入り、先づ其の表紙圖案には、首の太き猪が、犬の手を假りて、服装の整頓をするといふ寓意的のものに改められ、また新年附録は、「少年四季」と題して、十六頁の純白厚手洋紙に、両面紫色刷の切抜式寫眞版を掲げ、永洗、玉桂、年方、不折、年峰、華村の六畫家が、各自二ヶ月分を擔當し、一月より十二月までの少年行事を、一頁一種の割合を以て表現し、これが餘白面には、日曜祭日、並に各月の主要なる行事を掲げて、これを巻首に綴込みたるは、正しく一種の趣向には相違なきも、昨年度の

「明治少年双六」に較ぶれば、やゝ生彩を缺けるやに想はれた。

また巻首口繪の折込大判には、渡部審也の謄寫せる「富士艦上の皇太子殿下」を奉掲し、昨年来連続掲載中の生巧館彫刻動物標本畫は、新春の日出度き意味を採りて先づ「龜」を掲げた。猶ほ此



少年世界第五卷表紙

の標本畫解説は、最初より寺崎七艸(留吉)の擔當する所であつた。此の寺崎なる人は、稱好塾の出身にて、當時理科大學に職を奉じ、専ら植物學の研究に没頭せる者、其の行く途こそ異なるれ、主筆小波とは同門の間柄である。

最も目新しく感ぜられしものは、陸軍中尉多賀宗之が、「家庭軍事談」なる題下に、軍隊内に於ける一切を、最も詳密正確に記述せる一事で、曩の尾上新兵衛の「兵營生活」とは、自ら異なる觀點に



よつて、着實なる筆を進めたものである。若し夫れ尾上の記述を裏面觀とすれば、多賀の軍事談は正面よりの觀察といふべく、假令其の行文に妙味少しと雖も、將來軍籍に入らんとする讀者を裨益せる點は、亦頗る多かつたと想はれる。序ながら、多賀中尉は、後年支那に渡り、累進して少將に昇つたが、功成り十數年前物故した。

一方尾上新兵衛は、「戰塵」と題して、かの日清戰爭時代に、近衛師團の一兵として臺灣に出征したる當時の思ひ出話を、一流の快筆に託して、或は面白く、或は勇しく、或は凄しく、間々滑稽をすら混へて記述したが、其の實歴談なると、文章の妙味とによつて、異常なる喝采を博し、後に一書に纏めて、文武堂より出版した。以上を別にして、奥村不染の「新魯敏遜」と長谷川天溪の「鏡世界」とは、何れも數號に亘る長篇にて、彼は曩の「北極探検」と共に、讀者の期待多く、是は翻譯お伽噺として、從來世に知られぬ可憐の好少女小説であつた。

また、主筆大江小波編の「諸國お伽噺」は、本年度に於ける新しき試みといふばかりでなく、最も意義ある事業であつた。こは全国各地の讀者に要求して、其の土地固有の傳説、口碑、昔噺等の梗概を記させ、多くの應募原稿の中より、特に珍稀の話、趣味多き話を選び、其の説話の要點を失ふことなく、適宜加除して地方色豊かなる一篇のお伽噺とし、每號の誌上に紹介したのである。

當時この募に應じて、諸方より寄せたる原稿は、無慮數百篇の多きに達し、これが完成の曉には鬱然たる國民傳説の完成を見るべく期待されたが、偶々連山人外遊の爲め、折角の「諸國お伽噺」も、不幸中絶の外なきに至つた。

恰も前年十一月、戰艦富士八島の廻航を機とし、横須賀港外に於て、我國最初の雄大なる艦隊運動の壯舉が催され、畏くも皇太子殿下の台覽を忝うした。即ち本年度第一號の大版口繪として、富士艦上の東宮殿下を掲げ奉つたのも、亦此の盛儀を記念せんが爲めであつた。而も主筆小波が特に陪觀を許されて、當日の模様を謹記し、これを新年號の呼び物とせるに徴しても、如何に軍事的記事の要望せられたるかを知るに足るであらう。

東京灣の艦隊運動。東洋隨一と知られた、一萬二千噸の大戦闘艦、富士八島をはじめとして、支那から分捕の鎮遠號、續いては松島、嚴島、浪速、秋津洲といふ、何れも日清戰爭の時拔群の功勞を現した名うての軍艦、これに新造の高砂號を加へて、都合八隻の大艦が、東京灣の咽喉なる横須賀軍港の沖合に於て、一大運動を試み、而も我聰明英武なる皇太子殿下の御臨御を迎へたのは、實に明治三十一年十一月廿六日のことであつた。

是より先畏くも我が大元帥陛下には、陸軍大演習を、攝河泉の間にみそなはせられ、其御序を以て、此八艦の大運動を、神戸港に於て行はせられたのである。されば此運動は、實に第二回目であつたが、その動作に於ては、第一回よりも更に大に、更に巧に、又更に愉快であつた



とは、實に當時の海軍士官が、大に誇り又大に榮とする所であつた。此日皇太子殿下には、海軍少佐の御正服を召させられ、有栖川少將官、同若宮、中山東宮太夫、黒田同武官長、大山元帥、山本海軍大臣を召連れ給ふて、午前九時には、はや横須賀に御着になつた。

此と同時に艦隊からは、司令長官柴山中將をはじめとして、野村河原の兩司令官等、謹んで御出迎へ奉り、又港内の各艦からは一時に大砲の火蓋を切つて、奉祝の號砲を打ち、其間に殿下には、御機嫌いと麗しく、御出迎の將校士卒に、一々御答禮を遊ばしながら、御徒歩で逸見の波止場へ出御に成り、旗艦富士へと向かはせられた。

小蒸汽はやがて波止場を離れて、沖合遙かに進んで行くと、左右に居並んでゐた軍艦からは、又奉祝の號砲を放つ、又乗組の水兵は、帆桁と欄干とに居並んで、士官の號令を合圖に、ホーガア／＼／＼(奉賀)と、異口同音に叫ぶのである。これは軍艦の最敬禮で、帆桁に並ぶのを登桁禮式といひ、欄干に列ぶのを登舷禮式といふ云々。

と、流石に熟れたもので、すらく／＼と其の見聞を記してゐる。惟ふに此の記事は大軍醫隱岐敬次郎の指導に俟つ所多かつたであらう。隱岐大軍醫は、此の年米國にて建造したる巡洋艦笠置の廻航員として、近く歸朝したる人にて、小波主筆の親戚に當る。

また一方此の前年、隅田川にて舉行せられたる海軍の端艇競漕に關して、「少國民」九年一號には、次の如き記事を掲げて、大に海國少年の志氣を鼓舞した。

海軍端艇競漕の天覽。近頃ありし様々の事の中に、盛大にして殊に面白かりしは、客月十八日(三十年十二月)、隅田川に於ける海軍端艇競漕會ほどのものはなかりき。

これより曩數日此會を催す爲め、我が軍艦數隻品川灣に集り、水雷艇は隅田川に遡りて、それ／＼の準備をなし、殊に當日は 天皇陛下御臨幸ましく／＼て、御天覽あらせらるゝ由かねて仰せ出だされたりしかば、當日川の兩岸は拜觀の人を以て埋め、特に吾妻橋の如きは立錫の地なく、流石の鐵橋も動き出でんばかりの有様なりき。

天覽の御場所は、水戸徳川の門前にて、檜木建の御假屋を設け、赤地の純子に白の大菊花を描けるをば緩く引絞つて幕と爲し、其左側は賞品授與所に充て、又其右側は親任官、各國公使、勅任官、公侯爵、奏任官、貴衆兩院議員、新聞記者等の陪覽席を設け、玉座の後方には十丈の大竿を建て、之に海軍信號旗を三方に吊下げ、川面には水雷艇第一、第二、第三、第四、第五、第六、第十五、第十八、第二十の九艇滿艇飾を加へて屹然として浮城を築き、又上流には、船上に疊を乗せ、之に青毛布を着せて砲壘を築き、三門の重砲は皆下流に向つて其勢ひを示し、其下流二百米突の處には、擬設軍艦延長二間餘なるが三隻、小艦隊を作つて嚴然之に對し、光



景の雄壯なる、墨陀川あつて以來の大觀なり。

聽て八時三十分を報するや、高千穂(赤)、龍田(白)、扶桑(黄)、筑紫(青)の機關兵競漕を始め、龍田先づ勝を制し、第二回は高千穂(赤)、横須賀水雷團(白)、磐城(黄)、金剛(青)にて高千穂の先着に歸し、第三回は砲術練習所(赤)、龍田(白)、磐城(黄)、武藏(青)にて、砲術練習所第一着を占め、第四回は松島(赤)、和泉(白)、扶桑(黄)、武藏(青)にて、和泉勝を制す。第五回は天城(赤)、和泉(白)、扶桑(黄)、武藏(青)にて天城最も鋭く進み、終に第一着を占め、第六回松島(赤)、筑波(白)、八重山(黄)、横須賀海兵團(青)の四艇、一發の砲聲と共に啣腕たる樂聲に送られ競漕を始むるや、陛下には此時徳川邸に御着あらせられ、暫時御休憩の後、水雷艇上の水兵士官が奉賀々々の敬禮と、上流に沈設せる廿一發の水雷は、轟然爆發して皇禮砲に擬せるをば、笑ましく受けさせられ、河岸の御假屋に入らせ給ふ。是より各水兵の意氣頗みに昂り、漕ぐ手の一際勇ましく見えたるぞ愉快なる。

聽て四艇は負けず劣らず、揉みに揉んで漕ぎ回りたるが、筑波の力優りけん、終に白艇の勝利に歸せり。かくて第七回濟遠(赤)、橋立(白)、嚴島(黄)、横須賀海兵團(青)は嚴島、第八回松島(赤)、橋立(白)、須磨(黄)、横須賀海兵團(青)は須磨、第九回天城(赤)、平遠(白)、浪速(黄)、八重山(青)は天城、第十回濟遠(赤)、横須賀海兵團(白)、扶桑(黄)、筑紫(青)は

濟遠、第十一回須磨(赤)、水雷練習所(白)、千代田(黄)は千代田、第十二回鎮遠(赤)、平遠(白)、高千穂(黄)、浪速(青)は、浪速の勝利となり、午前の番組を了るや、小蒸汽に外装水雷を載せたるが下流より駛走し來り、玉座の正面に至つて東側の白長竿を一打すれば、物あり飛んで水心に入り、爆然として水を十丈の上に翹へす、岸上の喝采潮の如く湧いて、陛下には御晝餐の爲め徳川邸へと向はせらる。

午後一時三十分再び出御、今回は特別士官競漕にて、特に赤艇には華頂宮殿下、黄艇には小松若宮殿下、白艇には山階宮殿下の艇長として御乗組あらせらるゝ事にて、萬目皆之に注ぎ、勝敗如何と見てあれば、孰れも若士官の晴業なれば夫と見分ん筈もなく、中途迄は三艇舳を並べ些の劣もなし、艇長の三宮殿下は、畏れ多くも左の御手に舵を把らせ、右の御手には整調の櫂を把らせて力を添へさせ玉ひ、此處を先途と競はせ玉ひけるが、黄艇の力決勝點の附近に來つて一倍し、終に小松若宮殿下の御乗艇勝を制し玉ひけり。

斯くて殿下には、御假屋前の棧橋にて賞品を受けさせ給ひ、御座近く進ませ玉ふや、殿下に續いて上陸せる水兵は、殿下を捧げて胴上を爲し參らせたるに、陛下にはいとも御満足に御覽あらせられたり。此の時十二發の沈設水雷は、一齊に轟發して、萬雷の響くが如く、中空に奔騰せる濁浪は、雨を捲いて凄壯いふ許りなし。



次に二回の優勝競漕あり、第一回は濟遠先着にて優勝旗を得、第二回は和泉之を得、喝采の間に河を一回航して退場せり。次に水雷艇の防材飛越え、魚形水雷の發射、擬設砲臺の攻撃、軍艦の沈没、第六以下水雷艇の運動等、孰れも勇壯なる餘興あり。右了つて 陛下には、龍顏いとも麗しく還御あらせられたり。

而して次號には更にこれを敷衍して記者の意のある所を陳べてゐる。

本邦の海軍は、今後大に擴張せられ、第一期第二期の計畫を完成するは、十年の後にありて、其際には、凡そ二萬内外の乗組員を要すといふ。されば今後、極めて多數なる海軍の士官、又は水兵の志願者を要するや明なり。

十二月(三十年)中旬、墨田川に於て舉行されたる、海軍短艇競漕會は、皆征清役に名譽を博したる軍人の競技とて、數日前より、其評判は噴々都下を震動し、當日には、觀る者雲霞の如く死傷人を生ぜし程の盛況なりし。特に當日の競漕者中には、貴顯の三王殿下も在せしが上、至尊の御臨幸ありしことなれば、觀者皆大御心を奉戴し、感涙に咽ぼざるはなかりし。

僅々一日の會なれども、我國人の海事思想を刺戟したること幾何なるやを知らず、かゝる有益の遊戯は、年々定期に舉行されたく、十年後の我海軍をして、猛虎嶋を負ふ的勢あらしめむこと希望に堪へざるなり。

と、短文の中に、能く急所を道破したる所、流石に「少國民」の記者である。兎にも角にも、軍備擴張の熱心に叫ばるゝ時代に、各種の少年雑誌が、筆を揃へて海陸軍の行事を具さに記述したるは、如何に讀者の要望の強かりしかを物語るものであらう。



(筆舟註) 紙表光の軍陸

さればこそ本年度「少年世界」の臨時増刊は、一月三日に「陸軍の光」を出し、七月廿五日に「海軍の光」を發行して、こゝに海陸双璧の偉觀を露呈したるは、亦時宜を得たる賢明の策と見るべきである。

春季臨時増刊「陸軍の光」は、其の口繪寫真版に、小

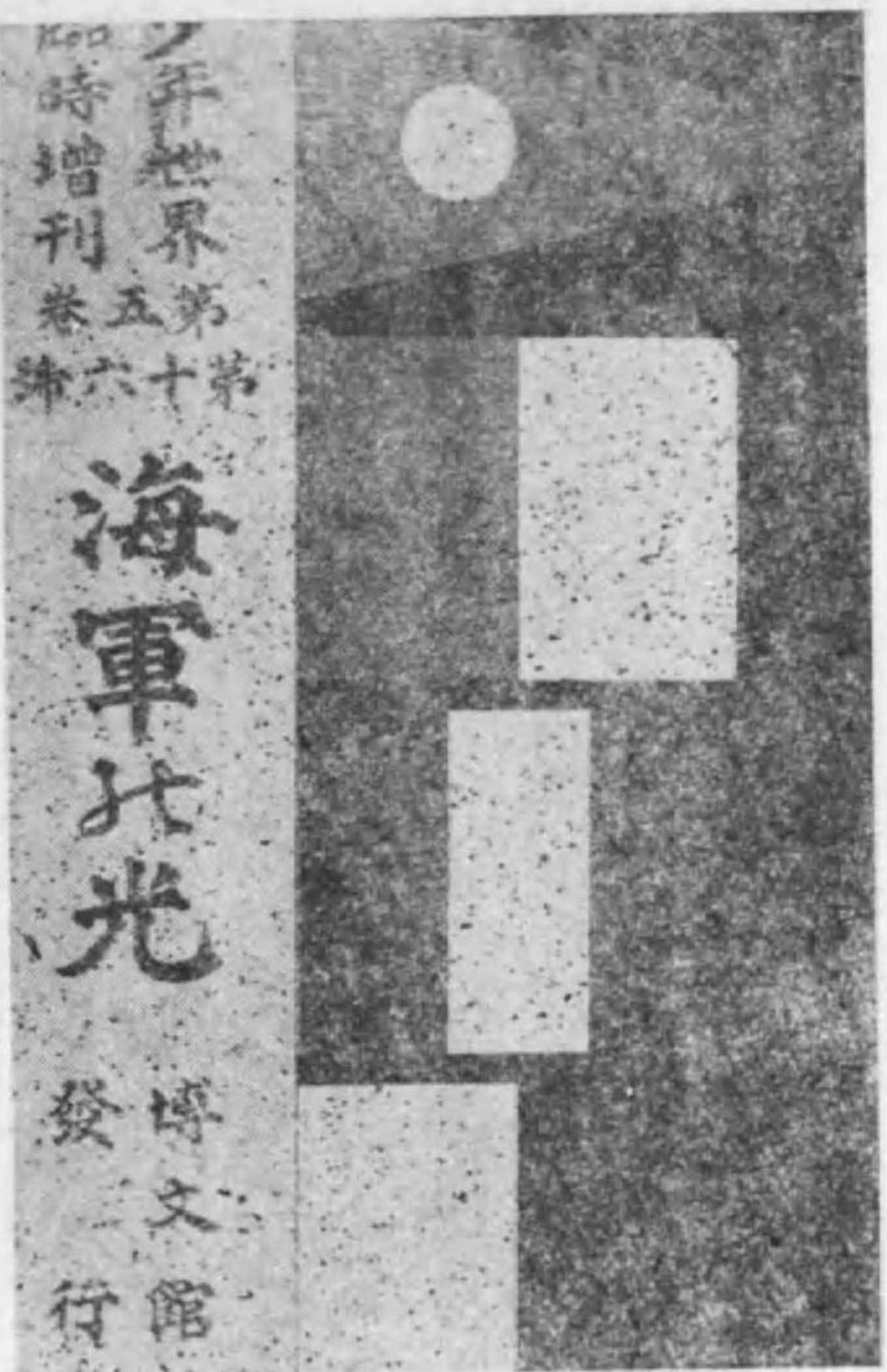
松宮、閑院宮兩殿下の御肖像をはじめ、山縣、大山兩元帥、桂陸軍大臣、福島大佐の近影を掲げ、他に日本の觀兵式、埃太利の觀兵式、獨逸の勝捷記念碑、クリミヤ英軍記念柱、加州義勇軍の出發



等、すべて内外陸軍に關する寫眞を網羅し、記事には、僕の觀兵式（小波）、戰鬪遊戯記（江見水藤）、内地兵營と屯田兵營（多賀中尉）、山縣大將陣中逸話（松井前軒）、吉野の遺跡（田山花袋）、若武者（西

村天四）、大同江邊の露宿（瀧塚野木）、騎兵新兵（鐵騎生）、軍事探偵（竹貫直人）、約束の戰死（齋木及堂）等、約十二篇の長篇を收録した。

また「海軍の光」は、口繪に小松宮依仁親王、山階宮菊麿王兩殿下の御尊影を初め、西郷從道、山本權兵衛、齋藤實、伊東軍令部長、鮫島常備艦隊



（筆舟桂）紙表光の軍海

司令長官、近藤眞琴、獨逸東洋艦隊司令長官ハインリッヒ親王、及び新造軍艦笠置八吋速射砲、同艦長室、常備艦隊大運動（二枚折）等、都合十二丁を掲げ、記事には、僕の觀艦式（小波）、各國軍艦しらべ（長谷川天溪）、海軍々事談（若林欽）、英國海軍兵學校生活（武田櫻桃）、近藤眞琴（竹貫直人）、

愉快なる航海（野村少校園士）、紅白合戰（柳川春葉）、海上の明月（猪波曉花）、無人島奇談（松原廿三階堂）、夜半の端艇競争（磯萍水）、新コロンプス（木村扶桑）、黃龍旗の下（松居松葉）、洋犬の番太（江口岳東）、など、一二の海軍々人を除く外は、殆ど常連の寄稿家が顔を並べてゐる。

然るに本年度の「少年世界」は、其の第三號より、從來の白地赤刷表紙を廢し、柿色の漉色洋紙を用ゐることとなり、爲めに著しく品位を低下させた。尤も此の柿色表紙は、獨り「少年世界」のみならず、博文館發行の諸雜誌全部にまで及ぼし、且本文の用紙印刷も一兩年前に較ぶれば、自家印刷工場に依る故か——これを總體より見る時は、必ずしも進歩の跡を認め難かつたが、幸にも他に殆ど競争雜誌の見るべきものなく、依然として少年雜誌界の王座も保ち得たのである。

聞く所によれば、此の柿漉色の表紙は、外國の製紙會社に特約して、夥しき數量を輸入し、少くとも向ふ兩三年間は、各雜誌に使用して優に餘りあるものとせられた。然るに讀者よりは、頻々としてこれが廢止を要求し來る有様にて、營業者としても、急速なる利用手段を講ずるの必要に迫られ、遂には各種新刊書類の袋にまで應用するに至つた——此の當時は未だ今日の如き箱の利用なく總て表紙の上に別に袋を用ふること猶ほ今のセロファンを以て被ふに等しかつた。——かうして此の不評判の漉色を消費しようとしたのである。

なほ、本年度の「少年世界」は、讀者の投稿文を掲載することなく、僅に二三頁の「ハガキ便」



を設けて、意見の發表機關とし、同時に下半年よりは、小波日記の「一筆啓上」なる一欄を新設し其の身邊の出來事を、巧妙平易の書簡文により、毎號二三頁づゝ掲ぐることにした。

讀者として、記者の動向を窺ひ知るは、亦無上の樂みである。随つて此の新しき計畫は、大なる興味を以て迎へられ、記者と讀者との連鎖を、著しく密接にした。そしてこれが後の「記者便り」となり、或は「編輯便り」と變じて、各雜誌に永く其の面影を存した。

恰もこの頃、伊國羅馬の作家オフマンなる人が、「十二支物語」と題して、自作のお伽噺を寄せ來つたのは、甚だ珍しいことゝせられた。これより曩オフマンは、漣山人のお伽噺「菊の紋」(第一卷後期)の一篇を、伊太利語に翻譯して、片々たる小冊子を作り、日本のお伽噺として紹介したことがある。

然るに此の「十二支物語」は、當時羅馬に滞在中なる一笑尊者(田中松太郎、後の半七製版所主)の手によつて、日本語に翻譯せるものにて、オフマンの名は、漸く少年世界の一花形となつた。

一方、小波お伽噺は、昨年度の最長篇とは異なり、これを春夏秋冬に區分して、六冊續きの新作を掲載した。即ち「猪熊入道」、「金鵝太郎」、「榮螺三郎」、「木菌太夫」がそれである。次に示すは木菌太夫の一節と、これが挿畫の一部である。

如何だ鱈降参か? (第四回目)

木之助はじつと見て、「成る程これは恐しい鱈だ、こんな奴に暴れられた日には、地震がはじまるのも無理は無い——」と、思ひながら又側へ寄つて、「まア何と云ふ大きな口だ、この口で咬まれようものなら、木の根も草の根も、たまつたもんぢや無い……どうだい、まアこの髯は! この髯を振り廻せば、大抵の土地は龜裂が入つてしまふぜ……何しろ憎い大鱈だ……どうかして退治てやり度いものだなア」と、云ふ中に木之助は、何も知らないで寝込んでゐる、鱈の背中に馬乗に跨がり、丁度二本出てゐる髯を、其まゝ手綱の代りに握つて、「さア、もうかうすりやア大丈夫だ」と、突然鱈の横腹を、ドンと踵で蹴付けました。不意に横腹を蹴られまして、流石の大鱈も寝ては居られません。

(鱈) ウーン……。

と、一つ迂鳴りまして、目をパツチリ明けて見ましたが、傍には誰もゐる様子がありません。

(鱈) はアてな……誰か今乃公の横腹を、厭ツて云ふ程撲りやがつたが、全體何奴が爲やがつたんだ?……どうも今の撲ち様ぢやア、土龍や蛙でも無い様だ……

と、四邊をキョロ／＼見廻しましたが、元より頸の短い奴ですから、思ふ様に廻らないで、まだ見付けることが出来ません。其中に鱈は、少し斗り起き直つて、

(鱈) ほんとに馬鹿なことをしやがる、折角乃公がいゝ心地に寝てる處を、餘計な事をして起こ



しやがつた……だが、迂濶してゐる中に、乃公も大分寝たと見えるワ……あッあア……と、云ひながら鰭を伸ばして、大欠伸を一つしようと思いました。すると木之助は、その欠伸で背中の上から、後へ倒れようと思いましたから、振り落されてはたまらないと、周章て、手綱にした髯を、力一杯にメめました。髯は鯰の灸所です。ですから、かうぐめられては溜りません。

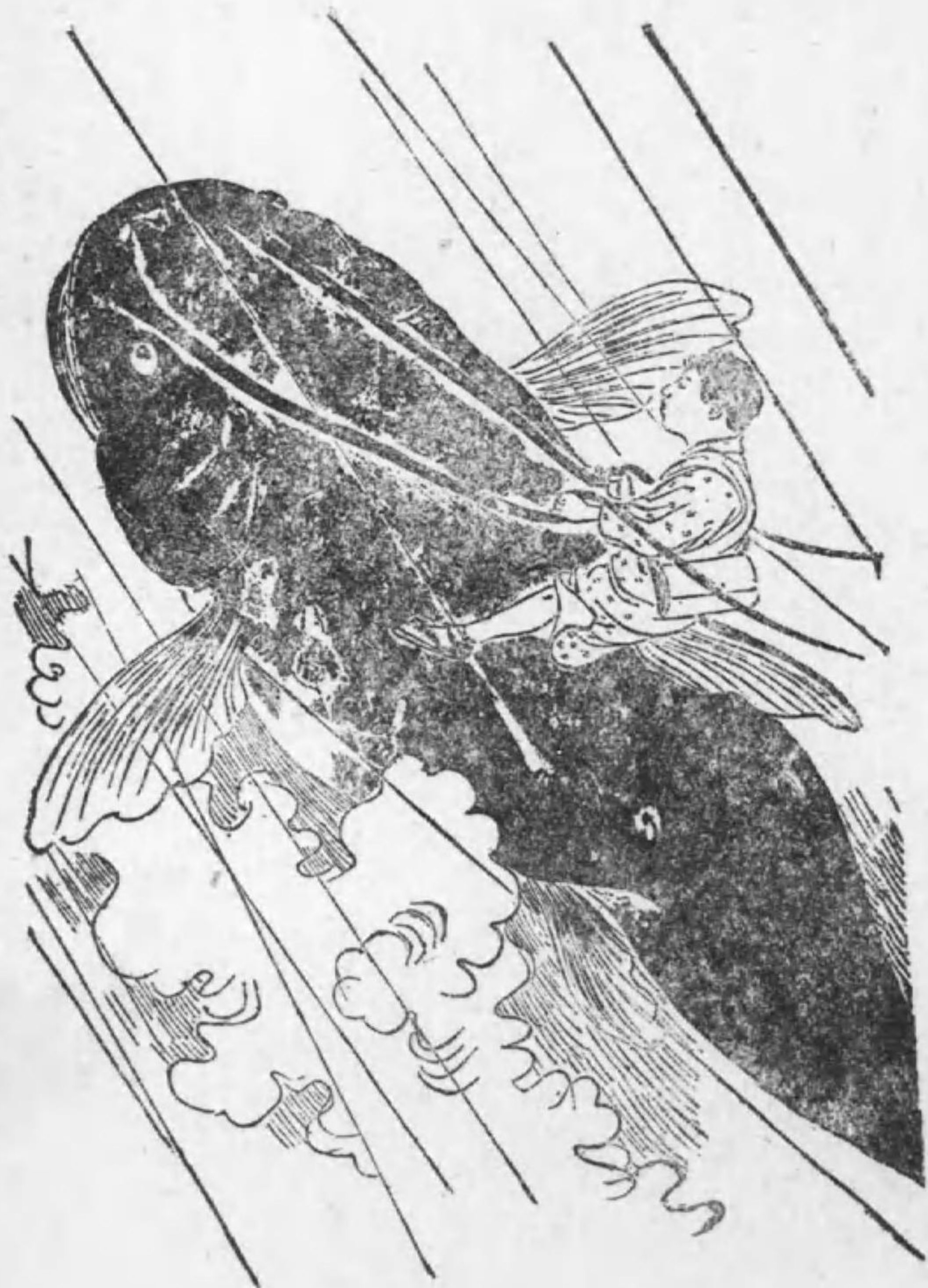
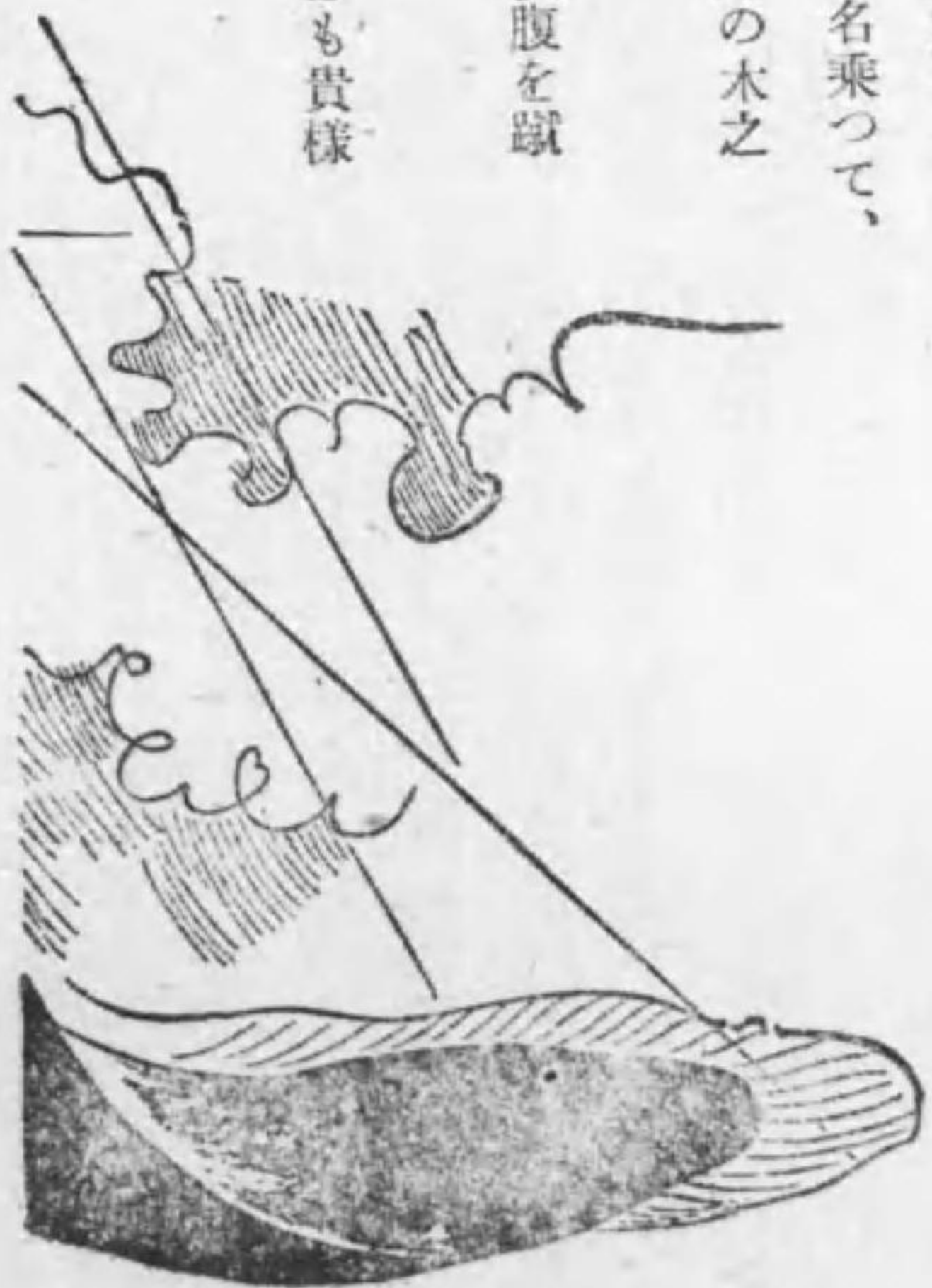
雁七

(鯰)アツ痛た、た、た！ だ、だ、誰だ々々！  
と、云ひましたから、木之助は初めて名乗つて、  
(木)誰でもない乃公様だ、木曾の木好の木之助様だ。

と、上から聲をかけながら、又一つ横腹を蹴りました。

(鯰)おや、又撲つたな、さては先刻のも貴様だな。

(木)それを今初めて知つたか。  
(鯰)さつきから探してゐるんだが、





全體貴様は何處に居るんだ。

(木)こゝに居るのが解らないのか。

(鯨)此處とは何處だ？

(木)何處でもない、貴様の背中だ。

(鯨)ナニ、乃公の背中だと？

と、云ひながら見ようとしたが、矢張り頸が廻はらないで、思ふやうに見えませんが。只目斗りキヨロつかせて居ますから、木之助は失笑して、

(木)ハ、、、そんなにしても見えないのか、見えなけりや見せてやらう。

と、木之助はまた鯨の髯を、グツと引き詰めましたから、其力で頸が廻はつて、少しは見るこゝが出来ましたが、其代り痛くてたまりません。

(鯨)ア、居た、居た！ 痛た、痛た！ 居たのは解つたが、痛くつてたまらない……もうそんなに引張つてくれるな、大切な髯が抜けてしまふワ。

(木)面白い〜、痛けりやもつと引張つてやれ！

(鯨)おい〜、さう引いちやいけない〜！

(木)ナニ關ふもんか、引いてやれ〜。

(鯨)あゝ、痛い、あゝ痛い！

(木)引くのが厭なら蹴つてやれ、蹴つてやれ！

(鯨)せいもたまらぬ、痛い〜。

上では木の助、面白半分に、髯をグン〜引張りながら、横腹をドン〜蹴付けます、下では大鯨、苦し紛れに、ウン〜ガアガア呻りながら、身體中を悶もよほいて居ります。

これ等は、いはゆる冒險的お伽噺の部類に屬するもので、本年度發表の四長篇は、大體かゝる傾向が明かに認められた。

猶ほ、本文記事の大部分は、毎號長篇を多くし、收載の項目も一冊十五六種に止めたるを以て、幾分か誌面單調に墮し、且生彩に缺くる所あつた。

また昨年一月以降、連續三十六回に及べる北運藏の動物標本畫は、本年度下半年期よりこれを中止し、代ふるに武内桂舟の實地臨摹に依る「帝室博物館」を以てして、著しく面目を改め、更に年四回の定期大形畫附録には、「雪中の猪」、「炎天の獅子」、「月下の虎」、「風前の熊」を選び、猛獸固有の生態を活寫して巧みにこれを躍動させた。而して其の筆者は、四種共に武内桂舟の快腕に俟つたのである。



## 第五節 主筆と編輯者

はじめ博文館が、「少年世界」の發刊を企つるに際して、現代少年文學界の第一人者たる、巖谷澗山人を迎へて、これが主筆たらしめし一事は、いかに該雜誌を價值づけたか、實に量り知り難いものがあつた。

顧るに、「少年世界」の前身なる「幼年雜誌」は、其の創刊幾程もなく、専ら坂下愛柳子の手に編輯せられ、勤勉前後四年間に亘つたが、もと愛柳子は、編輯の技術にこそ巧みなれ、只一雜誌の記者といふに過ぎず、其の社會上の地位は、敢て高しと云ひ難く、忠實に、懇切に、これが使命を遂行して、遺憾なきを期したるのみ、因より眞の意味の主筆の器なりとは認められなかつた。

更に少しく溯つてこれを觀るに、かの「少年園」に於ける山縣仙郷學人といひ、或は「少年文武」に於ける中川霞城山人といひ、共に一雜誌の經營者として、且は其の主筆として、一人二役を負擔し、三面六臂といはんか、縱横無碍の才能を揮へるものゝ、かゝる兩天秤の手段は、雜誌の發行者若しくは圖書の出版者として、物質的に偉大なる成果を收むるが如きは、因より不可能と云はざるを得ない。

併しながら、山縣、中川の兩者は、世にいふ屑々たる商賈に非ず、即ち雜誌屋として、又は出版

屋として、營利貨殖を念とする者とは其の選を異にし、寧ろ雜誌圖書の刊行出版を以て、自己の天職なりと觀じ、これをして社會教育の補助機關たらしめ、平生抱懷するところの主義を、敷衍貫達せしめんとし、頗る高遠の理想を第一義とし、非常なる重大責任を感受しつゝ、良心的出版に向つて、其の全力を傾盡せしやに想はれる。

また「小國民」にありては、これが經營者と、編輯主筆と、其の人を異にしたがら、兩者よく心力を協せ、渾然一體となりて、極めて圓滑に、極めて忠實に、各與へられたる職域を固守し、猶ほ且及ばざらんことを恐れし點に、其の發展の要素を求め得られた。

蓋し「小國民」の體制は、「少年園」及び「少年文武」の組織に比して、更に一步を進めし者と見るべく、若し夫れ雜誌報國なる語を用ふとせば、以上の三誌の如きは、正しくこれに恰當せる者ではあるまいか。

次に博文館が、明治廿二年以降、相次で各種各様の雜誌發行に向つて驀地進出するや、必ずしも著名の主筆を置くことなく、其の社會上の地位高からず、且比較的編輯上の經驗淺き専門學校出の無名新人を迎へて事務を擔當させ、東奔西馳、これぞと思はるゝ知名の大家に交渉して、其の寄稿を仰ぎ、集るに隨つて適宜相排列し、誌面に光彩を添へしことは、如何にも偉觀壯觀とはいへ、甚だしく統一を缺きて、又何となく寄せ集めの感もあり、そこに一貫せる主義も主張も認められず、



眞の精神の那邊に在るやを疑はれしは否み難からう。

即ちこれを惟ふに、苟くも一雑誌を發行せんとする者は、先づ第一に、編輯主筆を選ぶの要があり、而して一雑誌を擔當し、其の主筆の任に居る程の人物は、人格識見共に高邁にして、能く讀者を指導し、これを啓發するに足るべき、博識能才を有する人物ならねばならぬ。此の意味よりして「少年園」の太華山人、「少年文武」の霞城山人、及び「小國民」の研堂散史等は、最も理想的の主筆といふべく、且亦稀に見るところの優秀なる編輯記者と稱すべきであらう。

蓋しこれ等の人々は、一雑誌の主筆として、全誌面の統轄に注意を傾くるのみならず、常に自ら想を凝らし、案を練り、且自ら筆を執り、自ら東西に奔馳して、社會百般の事物現象を觀察し、若しくは大家の所説に聴き、斷々乎として自己の職分を完遂するに吝ならぬ者があつた。かくして初めて雑誌の生命は存し、亦其の精神は十二分に發揚せられしものと想はれる。

諺つて説く「少年世界」の主筆としての漣山人は、お伽噺及び一般少年讀み物の作者として當代何人も追隨し且模倣し得ざる奇想と才筆とを有する人である。されば此の點に關しては、眞に無双唯一の大器といふに憚らぬも、猶ほ此の人をして多岐多端なる編輯事務に没頭せしむるが如きは、人物經濟の見地よりして、果して得策なるか、果して適材適所の理に叶へりや否や。恐らくは遽に判定し難いものであらう。

「少年世界」が、其の創刊以來、實に二十數年の久しきに及び、よし時には、多少の盛衰隆替は免れ得ざりしにせよ、居然として少年雜誌界の重鎮を以て自任し、能く其の光譽を保ち得たる理由は偏に主筆漣山人の人格、並に其の聲望の高かりしに因ること亦疑ふの要なく、且これに加ふるに、實際編輯上の雜務に當れる助筆記者が、甘んじて陰の人となり、専ら主筆の存意を諒解して、いはゆる犬馬の勞に服し、かくして表裏相應じ、彼此相扶け、名實一致して、圓滿和樂の裡に、理想的雑誌の完成に向つて、努力邁進したる結果に外ならぬのである。

これを事實に見るに、「少年世界」は、其のはじめ「幼年雜誌」の編輯者坂下龜太郎（愛柳子）が、助筆として専ら力を揮ひ、次で武田櫻桃四郎（櫻桃）に引繼がれ、三轉して茅原茂（小松蘭雪）を聘し更に奥村信太郎（不染）、長谷川誠也（天溪）等を経て、再び武田櫻桃四郎となり、前後五ヶ年にして實に五人の助筆を交代したるに拘らず、年所を経るにつれて、磐石不動の基礎を鞏固ならしめたるは、正しく主筆の徳望と名聲の致す所といはねばならぬ。

蓋し如何なる種類の雑誌たるを問はず、主筆其の人の理想と主義、趣味と嗜好とは、立どころにも最も明瞭に、其の誌面に反映するものにて、例へば「少年世界」が、往年の「小國民」及び「幼年雜誌」等に比して、著しく文學趣味に優り、從來一般少年雜誌の傾向たる學科補習の範圍を超越して、寧ろ高邁なる趣味の涵養を本位とし、力めて情操の陶冶に専念し、偉大なる人物の育成を期



したるは否み難く、特に同誌第五卷以後に於て、一層其の方針を明確ならしむるものあり、而して其の勢の趨くところ、お伽小説、少年小説、冒險探検小説、軍事小説等の盛行を促すに至つたものである。

かゝる情勢なれば、當時漣山人の門葉は著しく榮え、其の教を乞うて、少年讀み物の創作に熱中する者も、亦漸く多く、加ふるに純文學方面の知友等も、逐次傘下に集ひ來り、こゝに嚴然たる一大勢力を築成するに至つた。

併しながら此等の作家の大部分は、未だ數年ならず、中途にして漸々他方面に轉移し去り、眞に其の全生命を捧げて、能く初一念を貫徹したる者は、殆ど皆無といふに等しく、眞に寥々たる有様であつた。而もこれが理由は、其の據るべき地なきのみならず、お伽新なる者の、世間に認識せらるゝこと淺く、全く批評の圏外に置かれて、多く顧みられず、遂に自己の聲名を發揮し難きにも因るであらう。それとも或は自らの天分に缺け、努力足らず、完成の域に達し得ざりしに因るものか其の原由の何れに在りとするも、漣山人の衣鉢を繼ぐに足る者一人もなく、茲に於てか愈々山人の偉大を想はしめるものがある。

そは兎もあれ、「少年世界」以後に於ける、少年雜誌類の大部分は、何故にや期したるが如くに、高名の主筆を置かず、却つて「少年世界」以前に於ける、博文館の方針を踏襲せるものゝ如く、材料の蒐集にのみ其の力を注ぎ、各方面の知名人士、若しくは流行作家に依頼して、各得意の原稿を漁り、只管時代の流風を逐はんとする傾向を生じ來つた。

かゝる形式の雑誌は、一見甚だ華やかなるべきも、雑誌全體を通じて突々たる精神に乏しく、甚だ空漠且朦朧たるものにて、眞の生命を捕捉すべくもなく、即ち此の意味よりして、高邁なる主筆の人格と、非凡なる編輯事務者の手腕に俟てこそ、氣魄あり、精神あり、生命ある、雑誌は生れ來るものと言ふべきなれ。

## 第六節 「初航海」と其の他

冒險小説や、探検實記の類が、進取敢爲の氣象に富める一般少年の間に愛好せられる一事は、時の古今を問はず、國の東西を別つべくもなき不斷の傾向と見なければならぬ。

我國にありては、明治初期に當りて、夙く既にロビンソン漂流記の翻譯が現れ、矢野龍溪の「浮城物語」が出で、更に空想的のものには、「海底旅行」「月世界旅行」等が譯され、かくて明治廿九年森田思軒の「十五少年」の出づるに及びて、一躍冒險小説流行の機運を醸成し、或は「北極探検」「新ロビンソン」等が、次々に少年雜誌面を飾りて、若き讀者の血を湧き立たせた。

惟ふに國運隆昌にして、國民尙武の思想強大なる時代は、即ち冒險探検の壯舉を志す者多く、隨



つてこれが思想を善導すべき優良なる冒險探検小説の出現するは、亦當然の趨勢といふべく、而して此の機運に乗じて先づ出版せられし者は、櫻井鷗村譯の「初航海」であつた。

鷗村櫻井彦一郎は、これより曩英學新報社（東京堂經營）の編輯を主宰し、英學の普及に努力せる人にて、今回新たに世に問へる「初航海」は、文武堂の創業を期して出版したる者である。由來東京堂は、明治廿四五年の頃、「明治豪傑譚」「明治閨秀美譚」其の他、各種の圖書出版に手を染めたが、爾後故あつて久しく中絶の状態に在り、今や新たに文武堂出版部を創立し、其の第一着手として刊行せる者が、此の「初航海」であつた。されば此の一冊は、文武堂にとりても、亦初航海であり、其の成否如何は、同社の將來をトすべき、重要性を有するものと見られた。

さて此の「初航海」は、英國海軍士官エムリードの原著をば、鷗村が洗鍊せる筆致を以て譯述したるもの、必ずしも原文を踏襲することなく、多分に譯者の手心を加へたるところに、却つて妙味の掬すべきものを存し、且少年社會の好評を博し得た理由であらう。

これが内容は、全體二十八章より成り、とりくに趣味ある題目を分つてゐる。即ち、家を出づ。船中の苦。ペンブレース。橋上の亂打。海中に墮つ。水夫の修業。奴隸貿易船。脱船の密議。英國巡洋艦。黑人王様。和蘭の最後。獵に赴く。獅子と戦ふ。荒野に迷ふ。人間の干物。沸々の襲來。奴隸の積込。王の懇望。鰐魚の難。軍艦の來攻。飲水の缺乏。船火事。火藥の在所。奴隸の解散。

四面の大敵。洋中に漂ふ。慘殺の言渡し。危機一髪といふ如く、題目を見たるだけにて、如何に興味深きかを想像するに足りよう。さればこそ此の「初航海」は、かの「十五少年」に次いで、少年愛讀の中心となつたのである。

かくて「初航海」の高評により、勇氣と自信とを得たる文武堂は、引續き同じ譯者の「世界冒險譚」十二冊の刊行を企て、「金掘少年」をはじめ、「遠征奇談」、「二勇少年」、「續遠征奇談」、「決死少年」、「漂流少年」、「植民少年」、「航海少年」、「不撓少年」、「朽木の舟」、「俠勇少年」、「絶島奇談」を、連續發行したが、これは冊數の多き爲めか、或は題名の變化乏しき故か、其の原因不明なるも事實「初航海」ほどの成績は收め難かつた。

殊に前者は、菊半截クロース製の手頃の美本なるに反し、後者は四六判並製の多色刷石版表紙を附し、著しく幼稚の感を懷かせたる點も、或は「初航海」に追隨し難かつた原因の一つであつたと思はれる。

此の當時（明治三十二年頃）の出版物を見るに、殆ど申合せたる如くに、其の大部分が、菊半截クロース製のぶつこ抜にて、價も廿五錢より三十錢程度を出なかつた。曾て「少年世界」に連載して、一般の好評を博したる、尾上新兵衛の「戦塵」、多賀中尉の「家庭軍事談」、川田河山人の「乞食王子」、及び廿四名家の「東西廿四傑」などは、すべて此の菊半截型によつて、文武堂より出版せ



られ、共に相當の成果を収めてゐる。

曩に博文館が、「少年世界」に連載の諸篇を再訂集輯して、「少年叢書」を發行したる時は、さして世間の歡迎を受け得ず、僅かに十冊にして中絶するに至つたが、同じ舊稿とはいへ、少年小説、史傳、軍事方面の記事を集めて、而も一定の叢書式に據ることなく、堅牢の美本として、隨時これを發行し、何れも豫期以上の効果を収めたる理由は、「少年叢書」に比して、文武堂の此の計畫が、趣味の方面に重點を置きし結果と見るべきである。

また、押川春浪が、「海底軍艦」と題する新作冒險小説を提げて、これを文武堂より出版したる一事は、正しく少年讀み物の世界に、一大炬火を點したる者として大に刮目に値すべきである。

「海底軍艦」は、白面の一書生押川春浪の處女作であつた。而も從來冒險小説といへば、大部分外國書の翻譯か、さなくば極めて空想的の物語にて、眞に少年の趣味に適し、其の精神を鼓舞せしめる程の、日本的冒險小説の好著は、不幸にして未だ一も現はれなかつた。此の時に當りて、突如として此の「海底軍艦」の出版せられしことは、最も有意義といふべく、即ち此の一書に依りて、純日本的の雄大にして勇壯なる冒險小説は、少年讀者の机邊に提供せられし次第である。

作者春浪（方存）は、牧師押川方義の息にて、漣山人門下の一員に列してゐた。而して其の新作「海底軍艦」は、漣山人の斡旋によつて、文武堂に交渉せられた。然るに文武堂は、既に「初航海」

「世界冒險譚」等の類書を有し、爲めに冒險小説の出版に關しては、相當の希望を懸け、且自信を有することゝて、無名作家春浪の此の一篇は、何の故障もなく世に現はるゝに至つた。

併し當時の春浪は、未だ少年間に知られざる一無名作家とて、發行者としても、此の點にや、不安を感じたものか、別に一篇の新作を求め、これを「少年世界」に寄せて、新作者の手腕を、天下に認識させた程である。猶ほ此の「海底軍艦」は、伊東海軍大將、肝付少將、吉井、小笠原兩少佐の題序、並に上村（經吉）少佐と巖谷小波との校閲といふ、頗る賑かなる手段に依つて出版せられ、次の如き宣傳文を各雜誌面に掲げて大に注目を牽いた。

全世界を舞臺とせる奇々怪々なる大冒險譚は現れたり。本編の主人公は、雄風凛々たる日本海軍士官、其部下には、慄悍決死の水兵あり、鰐魚は印度洋に眠り、獅子は大陸の巖を噛み、海賊劍を舞はす處、美人跳梁する處、神州快男子の鐵拳飛ぶ、紅顔の勇少年あり、變幻の輕艇に乗じて千尋の海底を駛り、洒落の壯士あり、奇異の鐵車を進めて萬峰の頂を踰ゆ。寂寞たる孤島に、不思議の響あり、人外の異境に、大日本帝國の軍艦旗飄る。奇絶！ 怪絶！ 又壯絶！ と、いかにも此の宣傳文に示さるゝ如く、「海底軍艦」の内容は、其の構想雄渾比すべきなく、其の記述の範圍頗る廣汎に、且殆ど世人の夢想だも及ばざる種々の新兵器を巧みに點綴し、これを縦横に利用して鬼策神謀を廻らし、變幻怪奇、送迎に遑なく、讀者をして、其の終局の那邊に在るか



を想像するだに難からしめた。随つて一度此の書を手にする者は、其の快筆妙想に魅了せられて、眠食を忘るに至るといふも、亦敢て溢美の言ではなかつた。

謂ふに作者春浪は、泰西の軍事冒險小説類を讀破し、これを咀嚼し、これを玩味して、巧みに自家樂籠中の物たらしめ、加ふるに春浪独自の超邁高渾なる構想の下に、奇幻無碍の快筆を馳せしものか。

果然、「海底軍艦」の評判は、全國都鄙に遍く、春浪の文名一時に昂揚し、更に讀者の要望に促されて、次々に「新日本島」、「武俠艦隊」、「武俠の日本」等の雄篇大作を公にして益々世評を高からしめ、遂に冒險小説家の第一人者となり、後年「冒險世界」を起してこれが主宰に任じ、また「探險世界」に據りて天下少年の尙武思想を鼓舞したることは、猶ほ世人の記憶に存する所であらう。

### 第七節 「修身童話」の發行

湯本武比古の主宰せる「教育時論」は、我國に於ける數多の教育雜誌の中にて、最も古き歴史を有し、且最も健全なる雜誌として、普通教育に従事する人々に迎へられた。この雜誌の發行元は、神田小川町の開發社（經營者辻太）である。而して此の社から新たに「修身童話」と題する幼年讀み物を發行したるは、實に明治三十二年のことである。

「修身童話」の内容は、我國古來の昔噺を主とし、これに若干のグリム童話を加味したものであるが、流石に教育者を目標としたる「修身童話」だけに、いはゆる「日本昔噺」とは、自ら其の筆法と方針とを異にし、多分に教育的要素を含めるものであつた。

漣山人の「日本昔噺」を距ること、實に約五年、今こゝに其の外見上、殆ど同一の形式を採りて實際的教育に效果あらしむべく、新たに編纂の局に當れる者は、誰あらう高等師範教授の新人樋口勘次郎（蘭林）であつた。而して幼年兒童の讀み物に對し、特に童話の二字を冠したるは、恐らく此の叢書を嚆矢とすべきであらう。勿論童話といふ文字は、相當古くより使用せられしには相違なからむも、兎も角も、それが實際教育上に重要視せられるに至つたのは、確かに此の叢書以來のことである。

同じく昔物語、或は傳説口碑の類も、これを文學的に取扱ふ時は、お伽噺といひ、それが教育的に描かれた場合には、お伽噺といはずして童話と稱する——。かういふ一種の見方も、もはや今日よりすれば、亦大に異論もあらうが、此の當時は、大體かやうに區別を立てたものであつた。

随つて文學のお伽噺は、其の内容にも、亦行文にも何等の拘束なきに反し、教育的童話の内容措辭には、多分に教訓的、若しくは指導的、開發的の分子が含まれ、爲めに彼の興味中心なるに比して、此は教訓中心を以てし、そこに明かなる區別の存するを見た。



さて、此の修身童話は、幼年讀み物とはいひ條、頗る堂々たる陣容を整へて出現した。即ち文部省専門學務局長上田萬年、高等師範學校教授谷本富、開發社々長湯本武比古の校閲を経て、専ら樋口勘次郎が筆を採り、其の中の二三種は、東京盲啞學校長小西信八、及び湯本武比古の編纂名を著してゐる。

「修身童話」各篇の題名は、桃太郎を首とし、花咲爺、猿蟹合戦、松山鏡、舌切雀、勝々山、狐の手柄、癩取り、大江山といふ如く、略「日本昔噺」に其の主眼を置き、第一編「桃太郎」は、水野年方の細密克明なる挿畫數面を加へ、書冊の形式は、「日本昔噺」に倣ひ、定價一冊拾錢を唱へたが、これは當時の物價より見て、必ずしも高價とはいひ難く、且つ單に幼年兒童のみを對照とせず、寧ろ初等教育者の方面に、修身講話の資料を提供する意味からも、「日本昔噺」とは自ら其の政策を異にする事が窺はれる。なほ、此の叢書の發行に際して、開發社は次の如き宣言を、教育時論其の他に發表して、讀者の注意を促した。

本書は本邦有名の昔噺を撰擇し、何れも著者の實驗によりて、教育的に記述せられ、文章は總假名にして、兒童に讀み易く、挿畫は高尚優美、表紙は光彩燦然、また附録には有名なるグリム童話を添へ、且ライ法の教授法を添へたり云々。

と記し、更に「桃太郎」の出づるに及びて、再び前言を繰返し、此の叢書の有益にして、效果妙なからぬを強調する所あつた。

この一編の中にある桃太郎の話は、在來の昔噺を教育的に書き綴りたるもの、狼と小犬との話（附録）は、有名なるグリムの昔噺を翻案したるもの、修身教授の新材料として、小學校教師必携の書、又子供方のなぐさみとして、家庭必須の書、著者多年の經驗により、兒童にわかり易き言語を以て、有益なる智識、善良なる教訓を、たのしみの中に與ふる如く綴られたり。文字はすべて假名を用ゐたれば、兒童自らにも讀み得らるべく、殊に多くの鮮明快活なる挿畫を加へたり。又此の書によりて教授する父母教師の爲に、論理上、理科上の意味を指摘せり云々。と、其の編纂上の用意の尋常ならぬを物語つてゐる。かくの如く此の「修身童話」は、初等科の教材として、教師父兄の伴侶たらしめる目的の下に、次々に出版せられ、漣山人の「日本昔噺」とは、全く別途を辿りつゝ、而も一部社會の歡迎を受けたものである。

また「修身童話」の發表と殆ど其の時を同じうし、同じ樋口勘次郎によりて「理科童話」なるものが、神田の同文館から出版せられ、其の第一編として、先づ「花見の巻」を世に送つた。これは今日より見るも、頗る意義ある兒童書と想はれるが、何故か中途にして挫折し、遂にこれが續刊を見なかつたのである。

元來、樋口勘次郎は、統合主義教授法を標榜して、我國の初等教育界に一新生面を拓き、特異の



存在として認められし人にて、児童讀み物に關しても、亦一家の識見を具し、これに依つて自己の主張を貫かんとした。即ち「修身童話」といひ、また「理科童話」といひ、共に其の顯現に外ならなかつたと想はれる。併しこれ等の書物の頒布區域は、其の特殊性にも因ることであらうが、固より「日本昔噺」に比すべくもなかつたのは事實である。

また此の頃、日本橋の仙鶴堂（小林喜右衛門）より、「花と蟲」「小鳥と花」「蟲の仕事」といつた幾種かの幼年用理科繪本の出版を見たるは、當時として甚だ目新しき企畫なるやに見られた。著者は中洲迂士とのみ署名してゐるが、實はこれ植物學界の新人矢澤米三郎にて、恐らく此の叢書は、中洲迂士の理想を、思ふまゝに完成せんとしたものであらう。

即ち菊判三十餘頁の本文中に、精密なる多色刷石版の比較的正確なる動植物の生態を、巧みに描き現して、これを所々に配置挿入したることとて、見る目にも甚だ美しく、讀んで頗る面白く、確かに異色なるものゝ如く、家庭教育上の好資料と思はれたが、惜しい哉數冊を出版したるのみにて、遂に中絶の状態に陥り、且これが發行者も、亦間もなく廢業したるやに記憶する。

次に前記の開發社が、「修身童話」の好評に拍車をかけ、更に一層規模を大にして、右の「修身童話」をば、少年書類の第一編とし、これが第二編として、やゝ程度を高め、「歴史修身談」なる題下に、第一編「神代のはなし」、第二編「人皇のはじめ」等、博文館の「日本歴史譚」に類する物を

出版し、これが執筆者には、主として高等師範學校訓導遊佐誠甫を以て當らせ、其の教育的見地より記述する點に「修身童話」の方針と全く軌を一にするものであつた。



自然の友の表紙

通俗科學講話」「通俗植物學講話」「自然界の迷信」「小生物の大作用」等を續々出版した。而してこれが執筆者は、理化方面を秋山鐵太郎が、生物方面を高桑良興が受持ち、其の内容は比較的平易の文體を以てして、少年にも解し易く、且多數の木版圖を挿入して、可なり良心的に編纂せられ、

其の價一冊拾六錢であつた。

蓋し開發社發行の少年書類は、流石に湯武居士の創案だけありて、單に趣味一點張に走ることな

「修身童話」の發行



く、何れも學問の修得に重點を置きて、讀者を啓發したる一事は、往年の山縣仙郷學人の少年團に於ける事業と著しく類を同じうせる感があつた。

### 第八節 「幼年讀本」の出版

連山人は、「少年世界」を主宰すること既に五年餘、百數十號の卷頭に、缺かすことなく新作お伽噺を發表する一方、「日本昔噺」「日本お伽噺」合せて四十八冊を完成し、今や「世界お伽噺」の執筆に、懸命の努力を捧げながら、猶ほ且餘力を振つて、新たに「幼年讀本」なる一叢書の編纂に精進することゝなつた。

新企畫の「幼年讀本」は、専ら小學初年級兒童の健全なる讀み物たらしむべく、即ち「日本歴史」「日本地理」「世界歴史」「世界地理」「日本立志談」「世界立志談」の六冊を以て第一期刊行とし、更に次々に、適當の題目を捉へて、續刊する豫定であり、これ亦可なり重要な事業と思はれる。

蓋し著者の志望する所は、幼年兒童に對して、先づ日本及び世界の過去現在と、東西古今の偉人英雄の言行とを物語り、以て常識修養の資料たらしむるに在つた。即ち世界的眼光を具ふる人物を養成すべき、其の基礎を築かんとするにあつた。

されば此の叢書は、曩に出でたる「繪入幼年全書」よりも、更に一層其の程度を低くし、更に一層其の趣味を多からしめ、歡娛笑樂の間に、情操的學科の補助たらしめんと企てしもので、右の六種を第一に挙げたのも、能ふ限りむづかしき理窟を避け、興味多き歴史、人物、及び其の人物の輩



(筆古半) 紙表の本讀年幼

出したる土地の狀況、又は主なる名所古跡、物産等の紹介より、順次他の學科に及ぼし、易より難に、單より複に導くことを眼目とせるものであらう。

然るに歴史、逸話の類は勿論著者の得意とする所であるが、比較的無味乾燥に陥り易き、地理上の記載に對して、如何なる筆法を用ゐたであらうか。凡そ地理とか、理化とかの學問は、幼年兒童の讀み物として、これが記述に非常なる困難を伴ひ、隨つて其の取捨選擇の尋常ならぬは、今更いふまでも



あるまい。

さればこそ第一編「日本歴史」の刊行（三十二年四月）を見てより、約半ケ年餘を経て、漸く第二編「日本地理」を刊行したるは、果して何事を意味するものか、それは單に挿畫の遅延に因るのみではなく、執筆者の苦心が、事のこゝに至れる最大の理由ではあるまいか。

「幼年讀本」の形式を見るに、これは他の「少年讀本」「世界歴史譚」等と同じく、菊判約百二三十頁、多色刷高雅なる石版表紙を用ひ、且本文中には、數十個の大形挿畫を加へ、而も其の價一冊拾五錢といふは、敢て高價と認められぬが、只内容外觀ともに、幼年兒童の讀み物としては、やゝ地味に傾き、さりとして少年の本としては、聊か物足らぬ節もあり、世にいふどつちつかずに墮したるは争ひ難き所であつた。

今茲に、「日本地理」の一冊に就いて、暫くこれが内容を觀察しよう。第一編「日本歴史」出でてより、相當長期に亘りて、讀者の待望したる第二編は、同年十月上旬を以て、漸く其の全貌を現し來つたのである。

むかし、費長房と云ふ仙人は、千里の道を一尺に縮めたとやら、今、漣山人は、日本六十餘州をば、僅かに百五十頁の小冊にまとめて、而も山川の大、都市の多き、一つも漏れた所がない。若し夫れ乳母の膝に抱かれながら、京大阪の夢を見んと思ふお子達、子守の背に負はれ

つゝ、蝦夷臺灣に遊ばんと思ふ坊ちゃんは、宜しく先づ此の書に就いて、日本地理を知り給へと申す。

と、此の様なる宣傳文を、繪入にて掲げてゐる。ところで、これが本文は、如何なる筆致に依つて描かれたるか、先づ第一頁を開くこととする。

私共の産まりましたこの日本といふ國は、亞細亞洲の東の端の、海の中に在る島國で、南は一面太平洋、西の方には支那があり、それから、北は朝鮮と露西亞、又東は、ずつと離れて、遙かに亞米利加とも向ひ合つて居ります。

又日本は、島國と云ひましても、只一つの島ではありません。本州といふのを中央にして、西南には四國、九州、琉球、臺灣、また北には、蝦夷に千島と、島が幾個にも成つて居るので、其幅は狭い代りに、丈は長くのびて居ります。

それですから、日本の形は、龍が珠を取らうとして居るやうだと、よく昔から云つて居ります。此の國に住んで居る者を日本人と云ひまして、其數がざつと五千萬人あります。尤も今では、西洋人や支那人の、此方へ來て居る者も、大勢ありますが、さういふ人達は、みんな顔色が異つたり、風俗が變つたりしてゐますから、直に見別けられます。

其所で、この五千萬人の日本人が、どうして生きて居るかと云ひますと、それはこの上に、天



子様といふ有難いお方がいらつしやいまして、御自分で政治をお執り遊ばし、よく治めて下さいますので、それでこの五千萬人が、寒い感もしなければ、空腹い目にも合はず、樂に生きて居られるのです。

それに又、この日本と云ふ國は、前にも云ふ通り、海の中に在る島國で、支那や露西亞に比べてみますと、その十分一にも足りない位な、小さな國でありますが、其代りに、時候がまことに溫和で、土地がまことに豊饒で、そして景色がまことに佳う御在ますから、餘所の國の人達も、こんな好い國は、世界中に澤山ないと云つて、みんな羨ましがつて居ります。

とある如く、先づ日本國の概念を與へて置いて、それから東京、大阪、京都をはじめ、各地方の名所舊蹟、及び産業の景況に至るまで、ほゞ遺憾なきまでに記述され、就中著名なる古戰場とか、或は英雄、偉人の發祥地とか、若しくは神社佛寺の由來といつた事には特別に興味ある筆を用ゐ、動もすれば、無味乾燥に陥り易い點を補ひ得たるは、蓋し執筆者の苦心の存する所を見るべきであらう。

殊に卷中に挿める圖畫は、水野年方の緻密なる筆に俟ち、中にも東京名所とか、京都名勝とかは一頁中に數面の實景を現はし、また古戰場には、古名将奮戦の場面を描きて、地理と歴史とを、併せ見るの便に供した。即ちこれ等の挿畫は本文の記述を補ひ、これに一段の生彩を帯ばしめる上に

十分の効果を齎らしたのである。

併しながら「幼年讀本」は、其の題材の選擇にも因るであらうが、初等幼稚者にとりては、可なり難解の節もあり、さりとてやゝ高級の讀者には、幾分物足りなさを覺えしめ、随つて其の名は必ずしも其の實に副はず、編纂者の折角の苦心も、當初の計畫通りに、大きな効果を擧げ難く、次第に延刊を重ね、辛うじて第一期六冊の出版を見たのは、翌年の秋期であつた。

而もこれが編纂者漣山人は、此の叢書の完成を俟たずして、外遊の途に上つたので、最後の第六編「世界立志談」は、東京出發の後、約一ヶ月を過ぎて、漸く世に出るといふ始末であつた。

謂ふに「幼年讀本」は、漣山人が最も得意の壇場とは言ひ難く、分けても「日本地理」と「世界地理」とに至つては、編者の最も苦手とする所であり、其の苦心の跡は、歴々として紙面到る所に認め得られる。また此の叢書が、僅かに六冊を出したるのみにて、其の繼續を中止したのは、勿論編者の外遊が、主なる理由ではあれ、六冊の編纂に、約二ヶ年餘を費したる點より察すれば、最初より既に相當の困難の伴へることは、亦想像に難くはないのである。

### 第九節 主なる少年雜誌

茲に再び當時（明治三十二年頃）頻出したる少年雜誌に就いて、總括的に略記してみよう。雨後



の符の如しとは、古き譬ではあるが、少年雑誌の簇出する者は年々夥しく、而もそれ〴〵の特色を備へて、發足の武者ぶり勇しく、多大の希望の下に、第一號を送り出す者も、意外の困難に遭遇して、早くも二三號にて消え失せ、いはゆる幻生幻滅の事實を提示するもあり、或は亦、豫期以上の成果を収めて、一層の擴張を計る者もあり、其の例必ずしも一樣ならぬ中に、一種の類例なき特色を把持して、比較的長期に亘り、廣く讀者を吸収したる者に、「帝國少年議會」があつた。

この雑誌は、神田千代田町の同名の社より新たに發行したる者、而してこれが經營者は、我國新聞廣告の取次業者として、屈指の成功を収めたる博報堂瀨木博尚であつた。蓋し其の搖ぎ無き資力を以て、かゝる小雑誌を經營するは、眞に尋常茶飯事といふべく、「帝國少年議會」が長命を保てる所以も、亦こゝに存するものと見なければならぬ。其の創刊の辭を見るに、

帝國議會は、全國の老成家を集めて、國利民福を計りつゝあり。我少年議會は、全國の少年學生を網羅して、學術を攻究し、智徳を啓發せんとす。其手段として、毎月論題を課して、可否を論議せしめ、これを一冊の議事録として、弘く世間に發表せしむべし。

少年議會の議事録は、美麗なる冊子にして、論題の外に、全國少年の寄稿にかゝれる作文等の掲載をなすべし。又議事録には、每號人物風景等の、鮮明なる口繪を添へ、且諸名家の談話、文章を載すべし。少年諸子來りて此の旗幟の下に集參せよ。

と喚びかけてゐる。かくて此の新雑誌は、創刊以來何の障碍もなく、漸次發達して數年に及び、更に其の題名を更めて、「青年議會附少年衆議院」とし、議長本多副元の上に、二條基弘公を總裁に仰ぎ、苦學生には學資を補助し、實業家の子弟には、立志獎勵の爲め、全員一萬名に對し拾名を當選者とし、一名百五拾圓と定め、向ふ三ヶ年間に分與する方を發表した。即ちこれが概要に徴すれば、

被給與者の資格は、明治三十六年七月より、十二月三十一日までに、會費一時前金九十五錢を拂込みたる者に限る（但雑誌は毎月發送す）、明治三十五年一月十五日の官報を以て報せられるべき全國氣象表に就き、最低氣溫を示したる數字を横に左讀に致したる者を當選者とする。當選者には東京に遊學する者の爲に、監督寄宿舎を設け、本會編輯記者にして教育新聞主幹たる秋廣秋郊氏（著者曰、少年世界第四卷の運動記事を受持したる人、煙波と號した）に、専ら監督の任を囑託すべし。七期三號以下の雑誌を見よ、本會議員にして東京に遊學する者は、親戚又は本會支部の保證書を持參せば便宜を與ふ云々。

と、巧妙に讀者の肺腑を衝き、全く他に類例を見ぬ新機軸を出して、よく數年の壽量を保つたのである。

猶ほ此の頃には、他にも特色ある兩三種の少年雑誌が創刊せられ、中にも神田鎌倉町の東洋社よ



り出でたる「少年の友」は、本邦唯一の教育的少年雑誌を標榜し、前記の「少年議會」に比して、遙かに堅實なる方向を採つた。

東洋社は、石川正作の經營にかゝり、主として教育用圖書の發行に専心し、傍ら教授用標本並に樂器の製造販賣を營み、全國小學校を對照として、相當手廣く着實なる營業を旨とした。社主石川は、高等師範の卒業生にて、頭腦もあり、識見もあり、且此の方面に知人先輩も多く、爲めに東洋社の業務は着々其の地歩を固めて行つた。猶ほ石川は晩年日本製紙の社長に擧げられ、紙業界の重鎮を以て目せられ、功成り名遂げて、數年前病歿した。

さて新雑誌「少年の友」は、其の主宰者の關係にて、専ら高等師範の教諭、訓導等の寄稿を仰ぎ著しく教育的に編纂せられ、隨つて此の方針が、他の少年雑誌と、相違せる特色であつた。

「同名の雑誌他よりも出でたれば、「東洋社」の三字に御注意あれ」と標記し、初號の口繪には、帝國議事堂、高師附屬小學校、少年書家伊藤明瑞の肖像等を掲げ、記事は卷首に、辻(新次)帝國教育會長、小泉(又一)高師附屬小學主事、樋口(勘次郎)同校教諭、多田(房之助)麴町小學校長、今井文海小學校長、下田(歌子)華族女學校學監、遊佐、田邊、石原高師訓導等の祝辭を列載して、豪華壯觀他の追隨を許さず、本文には、まけぬ氣象(石原訓導)、柿の話(棚橋教諭)、法螺ばなし(遊佐訓導)、日清戰爭お伽ばなし(富永訓導)等の外、高師附屬小學、根岸、磯川、文海、錦華、神田、常

盤、有馬、本郷、麴町、神田小學校、及び地方には、群馬、茨城、宮城各縣小學校より、優良兒童の作文を請ひ受け、互に筆華を競はしめた。

これを要するに東洋社の「少年の友」は、高師附屬の教諭訓導を中心として、至極良心的に編輯せられ、世上一般の少年雑誌とは、著しく其の面貌を異にし、飽くまでも教育本位に立脚したる結果、實益満點の效はあれど、趣味娛樂の方面の、やゝ閑却せられし感もあり、隨つて初等教材としては適切なるも、全體としての頒布區域は、さまで廣くはなかつたやうに想はれる。

更にまた、これと相前後して、小石川同心町の向陽會より、「少年」の題下に、一冊四錢の小雑誌が現れ來つた。而して其の編輯方針は、前記「少年の友」と、やゝ行歩を一にする者であつた。これが宣傳文に、

世に少年雑誌の數多くあれど、教員父兄、及び少年子弟は、尙一層高尚有益のものゝ出でんとを望めり、「少年」はその望みを充たさん爲に出で來れるものなり。

「少年」は、知名の大家、及び兒童教育に經驗ある人の寄稿より成り、挿畫は日本畫、洋畫、和洋折衷畫等、いづれも敏腕なる畫伯と、有名なる彫刻家の苦心より成り、每號十數個以上を挿入すべし。

「少年」は、浮華虚飾の記事を避けて、専ら家庭及び學校の教訓と、一致することをつとめ、



且文體は極めて平易にして、而も興味に富む故に、少年の好伴侶として、及び家庭の讀み物として、最も適當なるべし。

「少年」は、最上純白の紙質を用ゐたれば、印刷鮮明にして、殊に挿畫は、毫も肉筆と異なることなし、且表紙は、精巧なる彫刻を加へたるものなる故に、凡ての體裁高尚優雅なる好雜誌なり。

と吹聴してゐる。殊に此の雜誌は、往年「小學教文雜誌」を發行して、初期の少年雜誌界に、一異彩を放ちたる、日本橋の興文社が、一手大賣捌所として、販賣方面を擔當し、兩社の間に何等かの連鎖あるものゝ如く、隨つて其の基礎も鞏固に、未來の大成を期待させたが、果して永續したるか否か、其の消長は知る由もない。

次に一方、本郷元富士町の研玉堂より新たに名乗をあげし「兒童界」は、前二者に比して分量も多く、寫真版口繪の外に、兒童界(論説)、教への園、話の淵、學びの海、智慧の泉、文の林、遊戯の野、競争の原、四方の山(東西逸話)等の欄を別ち、著しく初期の「幼年雜誌」に彷彿たるものあり、更に此の機運に乗じて、久しく鳴りを鎮めつゝあつた少年園も「小文庫」と題する愛らしき小雜誌を起し、京橋の啓文社よりは「幼年文庫」なる者が出づる等で、諸方より殆ど同時に群小少年雜誌の簇出を促し其の選擇に迷ふばかりであつた。

「幼年文庫」は一冊三錢五厘、當時としては、少年園の「小文庫」と共に、いはゆる可憐可愛の形態を有し、口繪には洋木の坂田金時を圖し、記事には、蛙の滑稽話、歴史の話、虎の話、臺灣軍記、西洋と日本の消防、鴛の話、蟻の探検談、活動寫真、座敷にて出来る輕便幻燈など、其の着眼點に、可なりの新鮮味を横溢せしめたが、これも亦三號雜誌の例に漏れず、時を経ずして敢なくも消え去つた。

かうした小雜誌の群立せるが中に、同じ小雜誌の部類に屬しながら、比較的長壽を保ち、且一家の見識を持ち、居然として指導的地位に在りしものは、小栗栖香平の經營せる「兒童新聞」であつた。(後に改題して兒童教育といふ)、而して此の小雜誌の編輯主任は、誰あらう、今日の平凡社々長下中彌三郎(芳岳)であつた。

猶ほ、兒童新聞の經營者小栗栖香平に關しては、恰も當時同社に勤務したる村木綠葉の追想記の一節に、次の如く記される。

アドバルーンが、澄みきつた大空に、悠々と浮いてゐるのを見るのは、何とも云はれぬすがすがしいものである。其の空高く揚げられるのは、必ず好天氣の日に限られてゐるから、其の好適な氣象的影響もあつて、それを見るのが、愈々快く感ぜられるものと思はれる。それは私人の感じではあるまい。そして其の姿を見る毎に、一抹の哀愁が腦裏を掠めてゆく。これは又



私一人の感傷であらう、それは何故の感慨であるか。

話は日露戦争以前の昔に飛ぶ、其の頃は未だ飛行機の如きは、夢想到に近いものであり、大空に



(刷色三) 紙表の聞新童兒

上昇して、地上を俯瞰するには、氣球を利用する以外全く其の方法が無かつた。日露戦争時には、敵状を偵察する唯一のものとして、盛に此の氣球を使用した。其の功勞によつて、當時芝區に在つた高輪氣球製造所長山田猪三郎氏は、戦後勲何等かに叙せられてゐる。

その頃の氣球は、目的を異にしてゐる故もあらうが、現今のものゝ如く、清楚な形ではなく、頗る野暮な無恰好のものであつた。此の氣球製造所では、明治三十六年既に氣球廣告といふ事業を開始して居り、香雅堂——私の語らんとするのは、その主人公の事である——で、其の

廣告取次の一手引受をしてゐるのである。

當時發行の兒童教育に、氣球廣告一手取次の廣告が掲げられ、其の一節に「氣球廣告の方法。輕氣球に廣告を應用するには、先づ飛揚せしめんとする輕氣球の下腹部、最も衆目に觸れ易き部分に、廣告文又は廣告意匠畫を附着し、之を全國各都會に於て、それ〴〵最も適當の地を選びて興行するものにして、敏捷と熟練とを以て、自由自在、高く低く緩く速く、中空に昇騰せしむるものなれば、傍觀者の注意するは、蓋し想像に難からざるべし」と記してゐる。之によつても明かなる如く、當時の廣告文字は、直接氣球に書いてあるので、現今のものゝやうに、何所からでも望見せられるものではなく、又上昇したまゝ、長時間放置することも難しく、衆目の集つたところで飛揚せしむる興行であつて、上昇することが、既に興味ある見ものであつたやうである。

此の氣球廣告に着目して、一手取次を買つて出たのは、香雅堂主人小栗栖香平氏である。氏は熊本の人（記者曰く、小栗栖は本姓加藤、元僧家に生れ、後に本願寺派の小栗栖香頂の家を繼ぐ）、學生時代には、尾崎行雄氏と席次を争つた程の秀才である。

氏の事業好き發明好きは有名なもので、逡信省の高等官を辭して後は、雑多の事業に手を出し種々の發明品もあるが、一二の物を除く外は、暗から暗の形である。當時店舗は外神田の大通



に在り、私の厄介になつた頃には、兒童新聞社の名で、月二回発行の兒童雜誌を出してゐた。併し一冊三四錢の雜誌を、一萬部足らず出したのでは、素より經營の成立つ筈なく、店には諸種の兼業があつて、四五名の人が働いてゐた。當時其の雜誌の編輯をしてゐたのは、今の平凡社長下中彌三郎氏である。(下略)

と、かやうに小栗栖の一面を語つてゐる。此の人の業績中には、猶ほ多くの記述を要するものあらうが、特に忘れ難きは「理科訓導」の著述であらう。此の書は博文館の發行に係り全部八冊、和装畫入の教科書にて、小學校に於ける理科教授に一新面目を齎らせるものと見るべく、平易なる筆致を以て、教師と兒童との問答體に倣ひ、而も兒童の觀察力、及び思考力を導入する所に、其の重點を置き、一般讀み物としても甚だ妙味を感じしめた者である。

兎もあれ、兒童新聞(四六四倍判、四頁乃至六頁、毎月三回發行)が、一ヶ年後に兒童教育(菊判三十二頁、表紙石版三度刷)となり、更に「兒童世界」と改題しながら、前後約十ヶ年を経過し、明治四十五年其の形影を没するまで、相當の讀者を擁しつゝ、嚴然として一方に雄視したるは、一に小栗栖、下中兩者の努力と見るべく、殊に「帝國少年議會」といひ、「兒童世界」といひ、共に廣告業者の手に經營せられしことは、亦一奇とすべきである。

### 第十節 「幼年世界」の誕生

「少年世界」は、其の第六卷を迎ふると同時に、從來の毎月二回發行を改めて、一回發行とし、別に「幼年世界」なる新雜誌を創刊して、こゝに幼年と少年との區別を明かならしめた。即ち毎月一日發行の分を「幼年世界」とし、十五日發行の分を「少年世界」とし、兩誌共に、漣山人の主宰に俟つたのである。

これに關して、「少年世界」第五卷の終刊號豫告を見るに、「明治三十三年一月一日は、わか少年世界第六回の誕辰にして、實に滿五歳の齡に達せり。滿五歳の少年世界は、茲に幼年世界なる一人の弟を得たり。然り、少年世界は當年より漸く兄さんとして、以て一生面を開かざるを得ず。何をか一生面といふ、請ふその語る所を聞け」と冒頭して、少年小説、少女談、史傳地理、陸軍海軍、理科博物、參觀記、名家經歷談、少年寄書、少年通信、一筆啓上等の各種目に就いて、其の編輯上の用意を細叙したが、中にも參觀記の新計畫と、寄書欄の復活とは、讀者の刮目すべきものであつたと想はれる。

これに關して、少年世界の記者は曰く、「其幼年世界と異なる所は、常に學校、運動會等に止まらず、進んで軍艦、兵營、工場、病院、育兒院、博物館、乃至家塾、寄宿舎の如きも、隨つて見、隨



つて記す、若し夫れ海陸軍の演習に際しては、特にこれに臨んで通信すべし」と宣言したるは、一大英断の舉と見るべく、編輯記者が徒に机に倚るを以て能事とせず、敢然局外に出でて、弘く社會



幼年世界の表紙

の事物施設を觀察見學し、以てこれを讀者に報道せんとするものにて、正しくこれ革新の烽火ともいふべきである。

次に寄書欄の復活については、殊更筆を費して、「これ滿天下の少年諸君が勸告を容れて、彼の少年詞藻を再設するものなり。寄せよ

寄せよ少年諸君！ 論說記事、詩歌、俳句、其何たるを擇ばざるなり。而して此卷よりは別に又、少年通信の新欄を設く、請ふ滿天下の少年諸君、就中地方の少年諸君、出でては學校、入つては家庭、事の少年に關する以上は、細大共に通信せられよ、本誌は其順序によつて、一々これを掲載す

べし、尙記者の方面よりは、一筆啓上の欄を以て、常に消息を怠らざるべし、斯くして本誌と少年諸君、及び學校家庭との間に、一の聯鎖を結ぶを得ば、記者の本懐何ぞ之に過ぎん」と強調力説してゐる。

事實、第四、五卷の「少年世界」は、あまりにも讀者との聯絡を無視し、随つて讀者は單に與へられたる記事を読むのみに止まり、自己の思想を發表し、其の文才を研磨すべき何等の機關をも恵まれなかつたが、今や少年詞藻欄の復活と、通信欄の新設とに依りて、此の不合理なる缺陷は全く補填せられ、舊時に倍する希望の光に接することを得たのである。

さて一方、「少年世界」より分岐したる、新生の「幼年世界」とは、如何なる形式の雜誌であつたか、これは本文菊判四十八頁、其の内巻頭の十六頁は、特に四號活字を用ひ、平易明快なる小波お伽噺を以て充たし、他は組方體裁共に略々「少年世界」に準じ、只彼に挿畫の數を少くして此に多くしたると、彼に大部分長篇、若しくは連載記事の多きに反し、これには比較的短篇を採用したる程度にて、且挿畫には洋木を用ゐることなく、桂舟、葦舟二者の外、片山春帆（桂舟門下）の執筆せる者も多かつた。

またこれが表紙は、初號に限りて例の柿色紙を使用したか、二號以下に於ては、白紙赤色刷に改めて、幾分品格を向上せしめ、口繪には、「桃園に義を結ぶ」「蘭相如璧を碎かんとす」「ワシント

「幼年世界」の誕生



ン幼時櫻樹を伐る」「吉田松陰外艦に投ず」「魏の曹操月下に詩を賦す」「ネルソン提督の戦死」「北條時宗元使を斬る」といふ如く、古今東西の歴史に材を求めて、それ／＼筆者を異にせる二枚大寫眞版を掲げ、他に人物風景等二葉を用いたが、これ等は寧ろ「少年世界」に入るべき者なるやに想はれる。即ち幼年と題するからは、少くも多色刷石版畫の一葉位は加ふべきが當然なるに、其の茲に出でんとはせず、意外にも高尚なる題材を採りて、著しく幼年の眞意を没却したるは、正しく經營者の認識不足と見る外なく、折角生れたる此の新雜誌の前途に、早くも一抹の暗影の認められしは、何としても否み難いところであつた。

併しながら、其の巻頭を飾れる小波お伽斬(お伽十二支)は、さすがに幼年兒童愛好の中心となり爲めに此の新雜誌面に大いなる潤ひを添へた。就中第一號に掲げられたる「子持大黒」は、桂舟の挿畫と相俟ちて、稀に見る異彩を發揮した。

今、桂舟の筆意を觀察するに、兩三年前のそれに比べて、幾分か描線粗大に至り、且添景等も省略せる感はあれど、主客活躍の状態は、寫して巧致の域に達してゐる。殊に如何なる場合にも、頭巾を脱したる例なき大黒神が、桂舟の手にかかりて、已むなく其の頭巾を取除き、全裸體となりて入浴せる光景は、いかにも大黒神らしく、其の意匠の非凡にして、構想の奇抜なる、實に幼年兒童を喜悅せしめしのみならず、父兄も亦今更の如くに、此の畫家の巧思に敬服せざるを得なかつた。

次に、「子持大黒」の文と畫とを併せ掲げて、茲にこれを再現してみよう。

子持大黒(お伽十二支の一)

まづある所に、鼠が三匹居りました。一匹の鼠は齒が丈夫、一匹の鼠は鼻が達者、それからもう一匹の鼠は、大層尻尾が強う御在ました。

丁度お正月の元日のこと、三匹は連れ立つて、阿父さんの大黒様のところへ、御年始に参りました。

(一番鼠)へい、お父様お目出度う存じます。

(二番鼠)お目出度う御座す。

(三番鼠)おめでたう。

大黒様は喜んで、

(大黒)お、三匹共よく來たのう、今日は元日のことだから、何か御馳走をしてあげような。

(鼠一同)有り難う御在ます。

(大黒)丁度今恵比須さんの所から、大きな鯛を買つたから、あれを今にお料理してあげよう。

(一番鼠)それがほんとお目出たいで御在ます。

(二番鼠)それより私共が、ありがたいで御在ます。



(三番鼠) 何しろ早く食べたいもので御在ます。

(大黒) は、ア、みんなよく洒落るな、それでは私もはやくやりたいが、何しろまだ早いから、これから一つお風呂へ入つて、後でゆつくり食べるとうしよう。

(鼠一回) それがよろしう御在ませう。

これから大黒様は、三匹の鼠を連れて、お風呂へ入ることになりました。三匹の鼠も今に御馳走にならうといふのですから、お湯を汲んだり背を流したり、また火を焚きつけたりして、みんな一生懸命に手傳ひしましたが、やがてすつかり洗ひましたので、やれ快い心地になつたと、それから上つて來ま



して、  
さアお料理を  
しようと思ひます  
と、先刻の鯛が見えませんと、  
はてな、誰が持つて行つたらうと、急にみんなが大騒をして、家中をさがしてみましたが、如何して  
もありません。

(大黒) これは變だぞ、それちやア今お風呂に入つてる間に、誰か盗んで行つたんだな、はて困



つた、折角御馳走をしようと思つたのに。

と、大黒様も困つてしまひましたが、思ひ出して二番鼠を呼び、

(大黒) おゝ、お前は鼻が達者だから、御苦勞だが一つ嗅いで見てくれ、さうしたら解るだらう。  
と云ひますと、二番鼠は

(二番鼠) よろしう御在ます、一つ嗅いで行つて見ませう。

と、今まで鯛のあつた所から、クツシク云ひながら、段々外の方へ嗅いで行きましたが、暫くして歸つて来て、

(二番鼠) ヘイ、行つて参りました。

(大黒) いや、御苦勞々々々、どうだ解つたか。

(二番鼠) 解りました、解りました、あの彼方のお池の側の、大きな樫の木の上にあります。

(大黒) ナニ、お池の側の樫の木の上……全體誰がそんな所へ持つてつたらう。

(二番鼠) 何でも足跡の臭ちやア、野良猫に相違御在ません。

(大黒) さうか、憎い奴だ、如何してやらう。

と、大黒様も悔しがつて居りますと、一番鼠と三番鼠は、阿父さんの前へ出まして、

(一番鼠) それちやアこれから私共が、直に行つて捕へて参りませう。

(大黒) おゝ、お前は齒が丈夫だし、三番鼠は尾が強いから、二匹で行きやア敗けはしまい、さア早く行つてくれ!

(二匹) 畏まりました。

云ふ中に一番鼠と三番鼠は、二番鼠に案内をさせて、お池の側へ行つて見ますと、成る程大きな樫の木がありました。

よし、これだなど、いきなり一番鼠は、その樫の木の根本へ行つて、丈夫な牙に力を入れて、

ガリ／＼ガリ／＼嚙り初めました。すると又三番鼠は、その樫の木の幹へ、強い尻尾を巻きつ

けて、ウン／＼ウン／＼引張りました。

かういふ平易巧妙な筆致に依つて、次々に「牛モウ／＼」「虎の飴坂」「兎山」「龍の鏡」と、子から亥までの新作物語を發表して、此の雑誌唯一の呼び物とした。

猶ほ「幼年世界」は、「少年世界」の例に倣つて、五月五日に「五月幟」、十一月三日に「天長節」と、それ／＼倍大の臨時増刊を發行したが、これには漣山人の執筆なく、全部「少年世界」の爲めに蓄積せられた原稿の中から、適當と思はるゝものを選抜して、雑然と編輯したに過ぎず、随つて特に銘記する程の傑作も見られなかつた、中にたゞ珍しく感ぜられるのは、清國人羅蘇山人なる者が、支那のお伽噺を寄せてゐることである。此の人は、豫て小波門下の一異彩として、將來を期待



されたが、惜しくも病の爲めに夭折し、あたら天分を没却し去つた。

何は兎もあれ「幼年世界」は、既に其の出発點に於て、やゝ針路を誤れるものゝ如く、随つてこれを迎ふる讀者も少く、著しく伸張性に乏しかつたが、かてゝ加へて、漣山人外遊の後は、適當の主宰者を得難く、且強ひてこれを存続するだけの價値をも認められず、創刊後僅か一年にして、遂に廢刊の運命に會し、多く世に行はれずして、空しく湮滅したのである。

### 第十一節 「少年世界」第六卷

明治三十三年度「少年世界」第六卷は、前年度同様、表紙面に全部の目次を掲示する關係上、畫面著しく狭少となり、随つて其の意匠の見るべきものなく、加ふるに本年度も亦前年に引續きて、獨特の柿色紙を使用したる爲め、華麗とか、清楚とかの感じは毫も受け難かつた。

併し新年附録として、前々年の例に倣ひ、それと同大の「日本お伽双六」を添加せることは、表紙の不美を償ふに足ると云へよう。即ちこれを前年度の「少年四季」に比すれば、相當の見榮あるものにて、記者も亦これを吹聴して、「お伽噺は小波が專賣、此種の繪畫は桂舟が特長、彼と是と相俟ちて、新案の双六成れり、其用法の新奇にして、而も興味の津々たる、尋常一様世間有りふれの双六は、桃太郎に會ひたる鬼の如く、兎にかゝりし狸に似て、忽ち顔色無からんなり」と言つて

居る。

さりながら、其の取材より考察すれば、此の「お伽双六」は、寧ろ「幼年世界」の附録として恰當せるものにはあらぬか。彼には、其の新年附録に、頗る高尚なる圖様を採り、梶田半古筆の「日



少年世界第六卷表紙

吉丸誕生の圖」を加へ、此には幼稚なる「お伽双六」を添へたるは、やゝ長幼顛倒の感なきを得なかつた。

次に、昨年度の「少年世界」は、本文百四頁を以て其の價六錢なりしが、本年度に入るや、可なり紙質を低下せしめ、本文百二十頁口繪八頁立にて、一躍八錢

に昂上し、讀者の負擔は漸く加重せる如きも、實は「幼年世界」の新生によりて、從來の毎月兩度發行を改めて、一回(十五日)發行となり、假に「幼年世界」と併せ讀むも、一ヶ月の誌代十三錢な



れば、一般讀者にとりては、さしたる影響を來さなかつたであらう。

本年度の記事中、讀者の注意を牽けるは、前年來續載中のキツプリング原作の「動物冒險譚」と依田學海の「楠木四世記」、及び多賀中尉、尾上新兵衛等の「軍事談」を其の尤なる者として推すべきか。キツプリングの物語は、土肥春曙と黒田湖山の共譯にして、小島沖舟の奔放なる挿畫は、亦一段の光彩の加はるあるを思はしめた。即ち「狼少年」といひ、「虎退治」といひ、或は「庭園大戦争」と云ひ、巧みに諸動物の性癖を捉へて、縦横にこれを活躍せしむる所、妙は甚だ妙に、奇は頗る奇なれど、併し我國少年の要求せる冒險物語は、かゝる動物社會の出來事にはあらで、今少し實際に近く、且感激に充てる勇壯快活なる讀み物に外ならぬ。されば折角の此の物語も、期待せられし程の、大なる反響を見なかつたやに想はれる。

惟ふに、世界的に有名なる傑作と雖も、これを其のまゝに我國に移植したればとて、果して幾許の効果を收め得べきか、殊にそれ等の動物に親炙すること少き我國の少年に於ては、恐らく興味を感ずる者甚だ稀なりしやに思はれる。

一方、挿畫の方面に見るに、本年度の「少年世界」は、新たに山中古洞(舟)を迎へて、其の一部分を擔當させることゝなつた。古洞は、もと住吉派の在原古玩の門に學び、次で月岡芳年に師事し桂舟とは同門の誼あることゝて、芳年の歿後には、桂舟の客分として、専ら挿畫の方面に精進しつ

つあつた。古洞の筆致には、一種奇妙の癖はあれど、かの葦舟春帆など純粹の桂社の人々とは、稍其の方途を異にし、隨つて誌面に一脈の新味を湛へしは否み難い所であらう。

さて第一卷以來、昨五年度まで、前後百餘冊に亘り、不斷に創作お伽噺を發表し、更に餘力を驅つて、「新イソップ物語」「諸國お伽噺」等に執筆したる漣山人は、本年度に入るや「幼年世界」には、平易なる幼年向のお伽噺を發表し、一方「少年世界」には、やゝ高尚なる立志小説を以てし、高低二方面に及びて努力することゝなつた。即ち此の立志小説は、多く實在の人物の少年時代に標範を取り、往年の「當世少年氣質」及び「暑中休暇」の再現を想はせるものがあつた。

例へば「空氣銃」といひ、「メタルの借物」といひ、又は「怪我兄弟」といひ、或は「言葉の餞別」といひ、總て作者の記憶に存する見聞の記録とも見られ、力めて少年の心性に適合せんことに工夫を凝らした。殊にこれを叢の「少年氣質」に較ぶれば、其の措辭並に内容に就いても、一段の進境を認め得られる。試みに次の一節と、暑中休暇の復習(前篇一六二頁参照)とを相對比せば、何人もこれを領き得るであらう。

言葉の餞別。玉磨かざれば光らずとは、むかしからよく云ふ譬で、しかも眞の道理に相違ないのだ。

いかに天賦の豪傑でも、また地來の英才でも、これに修業と練磨とを缺いたら、折角のその玉



も、つひに光を放つことが出来まい。

隣村の岡田さんは、十四の年から東京へ出て、中學から大學と、正則に勉強して行つた揚句、たうとう獨逸の留學を命ぜられて、先月やつと歸朝したのだが、此間六年ぶりで歸省した時は村中の有志家が、わざ／＼旗を立てて迎ひに出た位、今年六十になる阿父さん——平生は役場の使書をしてゐるのだが、あの時ばかりは羽織袴で、村長さんより先に立つて、その嬉しさうな顔と云つたら、只さへ大きくない目が、何所へか消えて無くなつてゐた。

また停車場の勝造の息子——、親父の手傳で荷揚をしてゐたのだが、尾見大佐のお供をして、東京へ五六年行つてゐるうちに、もう陸軍の少尉になつて、此間の天津の戦の時、名譽の負傷をしたといふ事が、方々の新聞に出た位だから、今に屹度金鷄勳章貰つて、大威張で歸つて來るに相違ない。

それから元宋寺の隆貫さん、あの人も此間までは、味噌摺小僧だと思つてゐたのに、今では本山の學寮を卒業して、これも印度へ留學を命ぜられたといふし、又萬屋の新太郎さんも、小學校に居る時分は、僕と級が二つしか違はなかつたのも、東京の商業學校の學生で、金鈕のついた制服を着て、此間一寸歸つて來た時なんぞ、同窓會でも一番立派だつた。

こんな風で、ちよつと氣のきいた者は、みんな東京へ修業にいつて、そしてみんな豪くなつて

しまふのに、この風間虎一はどうだ！

よし家が貧乏で、親父は老人で、たつた一人の兄さんは、勿體ないが意氣地なしで、高が警察の小使、日に二十錢の日當では、活計の足しにならないといへ、今年やつと十六の、勉強盛りのこの體を、高等二年から學校を廢して、郵便局の雇夫の端くれ、日に五六遍の便毎に、方々の信書をより分けて、それにスタンプを押すばかりの役目、目も働けば口も利け、血も通へば腦漿もある。この人間一匹を、器械同様に使はれて、それで月給がたつた十圓、辛抱人の、勉強家の、やれ親孝行だの感心だのと、褒められる所で何の名譽だ！

以上が漣山人の言葉の餞別の一節である。これには全く特別の讀み癖ある文字も使はれず、而も頗るなだらかに、巧みに貧家少年の心理を描き盡して餘さず、惻々として讀者の胸臆に觸れしむる所、稍年長の少年にとりては、無上の好讀み物なるやに感ぜしめた。

また、本年度の第一臨時増刊は、「祝砲」と題して、二月上旬に發行したが、これには其の題名に因みて、捕獲軍艦鎮遠の祝砲、常備艦隊の祝砲發射の外、約十四頁に亘りて、敷島初瀬の進水式、建造中の出雲、同じく其の進水式（以上英國アームストロング會社）、吾妻進水式（佛國サンナセル造船所）、八雲進水式其の一より其の五に至る、同じく進水の光景及び進水終了の状態、並に當夜の祝宴會場（以上獨逸フルガン會社）、艦裝完成後の八雲航海圖（豫定畫）を網羅して、海國少年の意を強



うする所あつた。

「祝砲」の記事は、少年新聞記者（江見水蔭）、雲井龍雄（福田琴月）、義氣の義三（山田美妙）、莊内

故老談（中島竹窩）、禿頭

少年（江口岳東）、なでし

こ（太田玉若）、梅田の姫

（竹林巖）、自轉車競争（磯

萍水）、仇討出世鏡（山岸

荷葉）、新敷島（木村小舟）、

探偵少年（大澤天仙）、生

命の水（尾上新兵衛）、大

炊殿橋（奥山木翁）等、長

短錯落、約十三篇を、二

九八

少年新聞 第六卷 第六期 祝砲 増刊

# 祝砲



博文館發行

祝砲の表紙（桂舟筆）

百四十頁中に収め、これが價十六錢、名こそ「祝砲」なれ、陸海軍に關する記事の、寥々として稀なるは、曾ても記せる如く、所謂帯に短く褌に長く、其の分量の關係にて、平常號に登載し難きものを、一舉に排除せる結果である。

又、同じく夏期の増刊は「滿艦飾」と題して、八月五日に發行した。當時は恰も北清事變の最中として、普通號にも相當の頁を割いて、其の戦況を如實に報道したのであるが、特に此の「滿艦飾」には、口繪の大部分を擧げて、帝國軍艦及び海陸軍出征將校の寫眞を以て填め、大に少年讀者の志氣を鼓舞するに努めた。即ち、これが豫告に徴すれば、

出征軍艦帖。清國義和團の事起りしより、世界各國の艦艇太沽に集るもの百を以て數ふ。我軍艦また舳艫相衝んで北清に向ひぬ。此帖出征の軍艦を網羅して遺憾あらしめず、其如何に威风堂々たるかを見よ。

出征陸海軍將校。これ亦出征の陸海軍將校を紹介す。櫻花國の面目、一に此人を俟つて、始めて萬國に誇り得るなり。

と、特記してゐる。なほ「滿艦飾」の收載記事は、南洋島廻り（江見水蔭）、三少年探檢物語（小松蘭雪）、咸臨丸（川上鈴舟）、少年魯敏遜（石井研堂）、アザラシの冒險（黒田湖山）、俠少年（池田錦水）、大蛇丸（福田琴月）、君士坦丁堡の建設（千葉紫草）、北條時宗（藤本藤陰）、歸省日記（木村小舟）、智慧少年（武田櫻桃）、其他北清戦記の逸話美談等を擧げ得られる。

更に本年度十一月號以下には、江見水蔭の冒險實記「日原鐘乳洞」の探險記事を掲げて、大に讀者の興味を唆つた。これに關しては、別に項を改めて詳説しよう。當時水蔭は、巖谷小波に代つ



て、「少年世界」並に「幼年世界」の編輯主筆として、新たに其の任に就いたのである。

## 第十二節 童謡に就て

お伽歌ありてお伽歌の無きは、これ如何といへば、恰も一休の禪問答に似てゐるが、このお伽歌——即ち童謡の創作に關心を有つ必要は、亦少年文學に精進する者として、閑却し難いものと云はなければならぬ。

由來童謡なる者は、學校用の唱歌とは自ら其の往く路を異にし、殊更曲譜を附することなく、幼年兒童をして、任意に吟誦せしめるを旨としたから、随つてこれが口調は、最もなだらかに、且最も面白く、最も謡ひ易きことを主眼とすべきである。

惟ふに在來の子守歌、秣歌、若しくは大人用の流行歌の類は、何れも其の歌詞甚だ卑俗にして、無垢純真なる兒童の心性に、憂ふべき弊害を及ぼすこと少なからぬは、識者の齊しく認むるところにて、これが改善の急務は、亦何人も痛感せざるを得なかつたものである。

こゝに於て漣山人は、お伽歌以外に、いはゆるお伽歌の創作に對しても深く意を留め、其の作品を「少年世界」及び「幼年世界」の誌隅に發表して、一種清新の氣分を横溢させた。尤も此の當時（明治廿二三年頃）は、未だ經營者の認識淺く、爲めに半頁程度の餘白を利用して、而も多くは六號

活字の埋草として取扱はれる有様にて、有るか無きかの存在であつた。

既に漣山人は、其の創作お伽歌中にも、前に掲げた「天井合戦」といひ、或は「でんく蟲」といひ、これが全部を、韻文に依つて編めるものあり、其の他の作品中に見るも、極めて諧調なる童謡式歌詞を加へて、一層興味を深くするに努め來つたが、而もそれ等に比して、短篇のお伽歌中には、頗る妙味掬すべく、其の輕快なる口調の、幼年兒童ならずも、微笑を禁じ得ぬ者の多かつたことは、亦疑ひなき所である。試みに其の作例の二三を次に摘録して見よう。

**猫の子。** 猫の子の名はお鈴。お鈴やお鈴。鈴のついた首輪やろ。猫の子の名はお花。お花やお花。はなの先が黒いな。猫の子の名はお静。お静やお静。静かに行つて鼠とれ。

鶯。裏の藪には鶯が。朝な／＼にホーホケキヨ。その聲聞けば鶯が。家の中にもホーホケキヨ。藪の鶯親ならば。窓まで來よやホーホケキヨ。子ならば家の鶯も。籠からのぞけホーホケキヨ。窓へ出て來た親鳥に。摺餌やり度やこの甘さ。籠からのぞく飼鳥に。藪を見せ度やこの廣さ！

**お池の鯉。** お池の鯉！ 餌をやる來い！ お手々の鳴る方へ來い來い來い！

**お池の鯉！** 餌に寄るこひ！ 緋鯉も眞鯉もみんな來い！

**お池の鯉！** 皆して來い！ 急ぐな騒ぐな仲よく來い！

**お池の鯉！** これ見て來い！ この鯉は丸いぞよく見て來い！



お池の鯉！ そりや來た鯉！ 大きな口してもう食た鯉！

雨の日。 あゝいやだ、この天氣！ 朝から晩までじめくくと。

あゝいやだ、この雨の、昨日も今日も降りつゞけ。

困つたな、この天氣！ 學校へいくにも傘がある。

困つたな、この雨に、お家へ歸るにや下駄がいる。

つまらない、この天氣！ お庭で鬼ごと出来はせぬ。

つまらない、この雨に、お山の戦争も出来はせぬ。

その代り、この雨に、お庭の芝生が青々と。

その代り、この雨に、お山の木が生々と。

雨が降るとて、つぶやく人に、雨が降るとて喜ぶ草木。

銀杏と柳。 うらのお山の銀杏の木。 冬になつたら葉が落ちて。 箒のやうに突立つた。 あんな大

きな高箒。 雲の煤でもはたくのか。

前の河原の柳の木。 春になつたら芽を吹いて。 はたきのやうに下アがつた。 あんな大きなさい

はらひ。 富士の山でもはたくのか。(以上三十七八年前後)

これ等はすべて幼児の爲に作られしものであるが、稍年長の少年の爲にも、かの朱文公の少年易

老、學難成」の詩句を繙して、次の如きお伽歌と成せるもある。

隙行く駒は、追はねど走る。 これをば繋ぐ綱をぞ欲しき。 學びの業は、引かねど止まる。 これ

をば打たん、鞭をぞ欲しき。 よしその綱の、わが手になきも。 その鞭とりて、自らうてや！

撓ますゆかば、學びの道も。 隙ゆく駒に、など後れめや。 池には酒の、泉を湛へ。 林に肉の、

花をば咲かす。 唐土人の、榮華の夢は。 破滅を招く、基となりぬ。 時これ金、貴め！ 惜し

め。 惜しまであだに、費すものは。 驕奢に長けし、唐土人と。 鞭を共に、その身や失せむ。

以上は、只其の一例を擧げしに過ぎぬも、これが全部を集むれば、恐らく數百篇の多きに達する

であらう。 而も又これ以外に、唱歌風に作られたるお伽歌のみを採りて、これに東儀鐵笛(季治)の

作曲を附加し、「お伽唱歌」上下二巻として發行すべく、一切の準備を整へしに拘らず、何故か世間

に現はれず、空しく暗中に葬られ去つた。

かくて後、「幼年畫報」の發行と共に、同雑誌の主筆小波は、例の年四回の定期増刊に用ひ、其の全冊を擧げて、四句一節三十六節より成る長篇のお伽歌、「森の小母さん」「木舟石舟」「くりく坊主」「うかれ木兎」等をはじめ、爾後數年の久しきに亘りて、次々に數十篇の新作を發表、専ら幼児の讀誦に供したが、これ等は後年「お伽唱畫」と題し、大判の幼年繪本數冊にまとめられ、神田の中西屋より出版して、再び世間の評判を高めた。



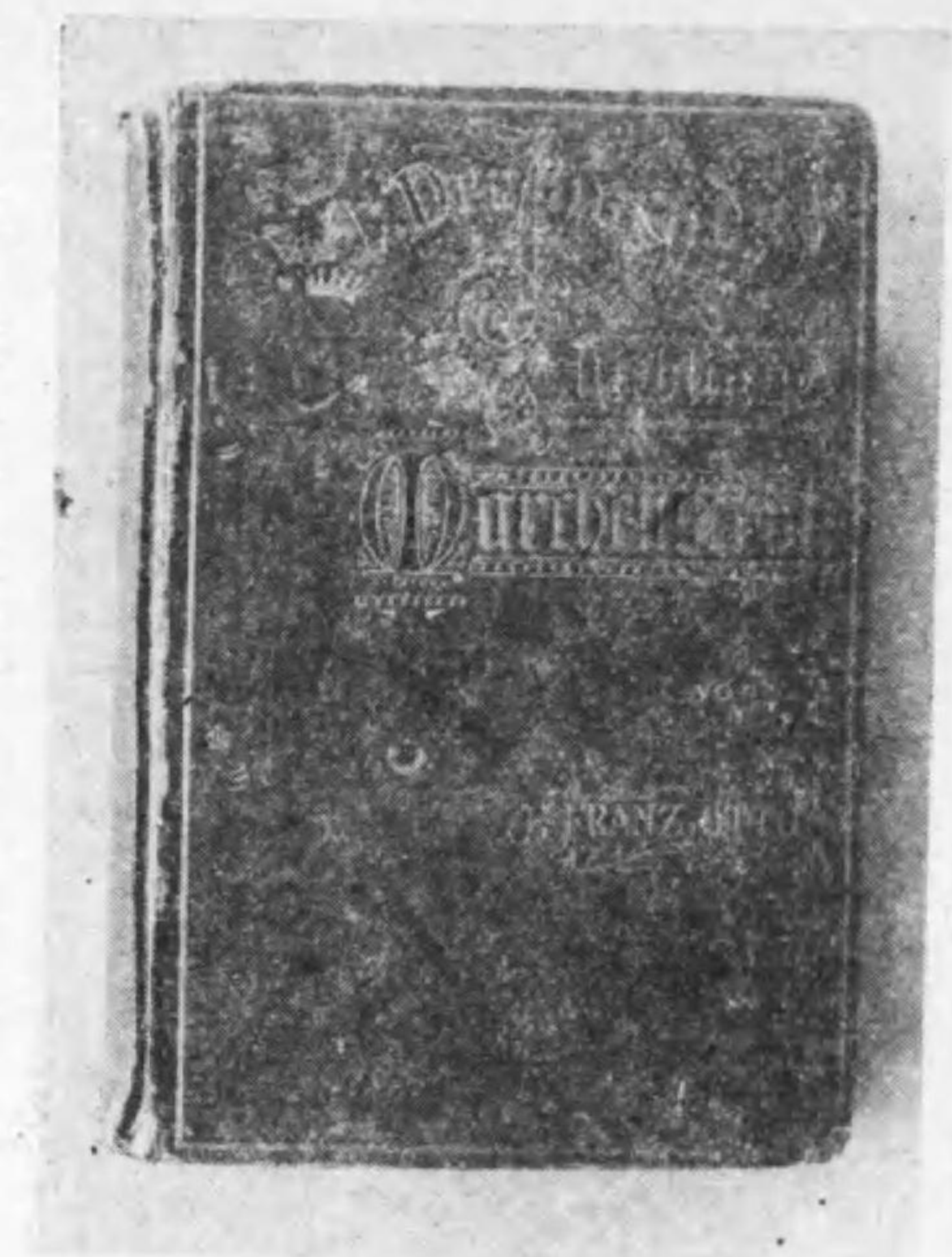
なほ當時の童謡作家は、ひとり小波に限らず、他にもこれに精進する者二三指に數へられたが、何れも雑誌面には厚遇せられず、さりとて他に發表の機關もなく、隨つて未だ進歩の見るべきものが無かつた。要するに貴重なる誌面を、かゝる閑文字に依つて填むるは、其の經營上必ずしも當を得ないと云ふのが、一般業者の意志なりしものゝ如く、今日、童謡——即ち幼年詩の異常なる發展に見て、其の初期時代の状態を想ふ時、亦多少の感なきを得ないのである。

### 第十三節 漣山人の外遊

明治三十三年九月、巖谷小波は、其の年來の希望を達して、いよいよ獨逸に向けて出發することとなつた。獨逸といへば、かのグリーンム兄弟の努力に依りて、お伽噺の大集成が遂げられ、此の方面の本場とも認められる。日本のお伽噺作家が、本場の獨逸に、多大の憧憬を寄せることは、素より其の所であり、殊に小波は、少年時代に入手したる、かのオットーのメルヘン集に依つて、多くの示唆と教養とを享けてゐる。獨逸に對する憧憬は、何人よりも強烈であつたに相違ない。

さればこそ往年京都日出新聞社に在るや、當時既に獨逸留學の志望を立て、かの「幼年雜誌」等より受ける零細の稿料を貯へて、他日洋行の基礎を作るべく努力せるところ、偶々銀行の破綻に依つて、いはゆる元も子も無くしてしまひ、遂に貯蓄を斷念したといふ挿話さへ殘されてゐる。

然るに今、茲に機運漸く熟し、伯林大學附屬東洋語學院に、日本語教師として招聘せられることとなつた。これは實に願つたり叶つたりである。尤も事のこゝまで運ぶのには、外務省の都築馨六男の斡旋と慫慂とが少くなかつたといふ、何は兎もあれ小波其人にとりては、近來唯一の大快事に違ひない。



集ンヘルメのートツオ

全體この東洋語學院の教師には曾て井上哲次郎、織田萬など、彼の地に留學せる日本の學生が、勉學の片手間に、これを擔當したのであるが、今度特別に、態々日本から教授を招聘するといふ事は、全く異例であり、殊に又日本の文學者が、遙々歐羅巴に赴任するといふ事も、前古未曾有の出來事である。

ある。小波の榮譽、満足推して知るべきである。

然るに一方を顧ると、當の小波は現に「少年世界」及び「幼年世界」の主宰者にして、且また



「世界お伽噺」も、「幼年讀本」も、未完成の裡に置かれてゐる。殊に博文館として最も重要な地位を占むることゝして、今此の人をして遠く海外に發向せしめるは、少なからぬ打撃である。されば少くとも、小波の名聲に追隨し得る程の大人物を物色して、これが後釜に据ゑなければ、兩雜誌の勢力を保持し難く、さればとて小波としては、折角の好機を逸し去るのも遺憾であり、萬難を排して西遊すべく臍を固めるに至つたもので、こゝに經營者の大なる惱みの種の存したことは、亦想像外であつたと思はれる。

そこで先づ小波の後任者として、第一に白羽の矢を立てた者は、誰あらう幸田露伴其人であつた。即ち露伴をして、名義上の「少年世界」主筆たらしめ、なほ從來の助筆武田櫻桃の外に、新たに木村小舟を加へ、彼をして「少年世界」を、此をして「幼年世界」の實地編輯に當らしめようとする腹案が成立つた。當時傳聞する所に依れば、更に千秋某といふ華族の若殿が來り加はる筈であつたといふが、これは何かの都合で沙汰止みになつた。

ところで露伴は、「少年世界」主筆就任の交渉を受くるや、其の器にあらずとして、一考に及ばず體よく謝絶せる爲め、折角の第一案は實現せず、仍て第二案として、小波とは年來の親交あり、且少年の讀み物には相當の理解も經驗もあり、殊に創刊以來の寄稿家として、少年間に知己多き江見水蔭を起用して、兩誌の實際上の主筆たらしめ、在外の小波を監督の地位に据ゑて、其の陣容の強

化を圖ることゝした。恰も此の當時水蔭は、「太平洋」と題する週刊新聞を主宰し、連日博文館に出社してゐたから、單に机の位置を移動させるだけで、兎も角も此の問題はすらくと解決した。

かくして小波は、何等の心置なく、九月廿二日東京を出發し、横濱より獨逸汽船ハンプルヒ號に搭乘し、多大の希望を胸に描いて、日本の山川に別れ、向ふ二ケ年を期して、雄々しくも歐行の程に上つた。例のオットーのメルヘン集も、亦其の旅鞆の底に秘められたことであらう。なほ「世界お伽噺」の百篇、延長刊行を決定したるも、博文館が小波の功に酬いる一手段であり、これが稿料の大部分は、洋行の費用に充てられたものである。

#### さゞなみ日記（ハンプルヒ號にて）

日數をいへば四十日、里數をいへば四千里、兎も角も初旅にしては、あまり小さくはない此の航海に、ならば大波ともつきたいのであるが、それをわざとさゞなみとは、畢竟自分の名に因んだのと、一つは又後日の記憶——否、少年諸君が後日のお爲にもと、航海中の出來事は、些細なことまで、なるべく漏らさずにお知らせ申し度い下心、諸君幸ひにこれに依つて、一面記者が消息を解し、一面に後日の参考ともしたまはゞ、記者は本懐に存するのである。

九月廿二日。（土曜日）、曇晴、時々雨。昨夜は流石に寢心地が悪かつたが、それでも四五日以來の疲勞で、四時ばかりは前後も知らず、三一（出發前十日にはじめて産まれた男の子）が、乳を



求める聲に夢を破られて、目が覺めたのは午前四時半、直ぐに起きて手水を使ひ、それから新聞を見てゐるうちに、石橋思案君も二階から起きて來た。君は吾を送る爲に、昨夜から泊まり込んだのである。

朝飯を済まして、身支度に取りかゝる所へ、近所に居る兩親、兄弟、姉妹、甥姪などが、打連れて告別に來たから、それに一々暇を告げ、例の思案君、親友の加藤晴比古君（加藤文學大博士の二男で、獨逸留學の経験のある人）、武内桂舟君、生田葵山人、及び二人の弟等に擁せられて、新橋停車場へと向つた。

停車場には早や見送の諸君が、中等室に溢れて居る。それも其筈、今度は外國語學校の山口教授、高田商會の志保井君が、同じ船に乗込むので、而も兩君とも、同じ時間に新橋を出るのであるから、只さへ廣くないプラットホームは、三方面の見送人の爲に、忽ち黒山を築いて、誰が誰やら殆んど解らぬ位、殊に胸は一種の感に打たれて、視覺もどうやら定まり兼ねる折から定めし祿々挨拶もしなかつたのがあらう、さういふ方々には、改めてこゝにお詫び申します。六時五十分に新橋を出て、八時前にもう横濱の波止場へ來た。全體ならば今度の船は、此所の棧橋に着く筈であるが、水が浅いのに船が大きいので、生憎横付けといふ譯にゆかないで、やはり小蒸汽に送られて、十分ばかりで本船へ來た。その前丁度棧橋の處で、櫻井鷗村君の祝電

を受取つた。初航海の首途に、初航海の著者からの祝電、これも何かの因縁であらう。

船は、獨逸のロイド會社のハンブルヒ號といふので、長さが五百五十呎に、幅が六十呎、噸數一萬といふ大船、これならどんな波が來ても大丈夫だとは、見送に來てくれた人々が、何れも舌を巻きながら、吾が前途を祝してくれる。

乗組んだのは八時過ぎで、出帆が九時といふのだから、折角こゝまで見送つてくれた人々と、ゆる／＼別杯を擧げる間もなく、甲板で一々手を握つて、やがて袂を別つたのである。

吾は甲板に、人々は船に、上と下とで舞はず帽子、振る手巾——、次第に間は隔たるのである。

おさらばや、霧に隔たる帽の數。

名残はなか／＼盡きぬけれど、さて長くは見て居られない。吾は急いで取敢えず室に入つた。室は四〇一號といふので、中等では先づ好い所、同室は例の山口小太郎、日本の語學校の獨逸語の教授と、獨逸の語學校の日本語の教師が、同船同室に落合ふのも、何と不思議な縁ではな

いか。  
手廻りの荷物を整理して、再び甲板に上つて見ると、恰も此方の梯子を離れて、今歸らうとする船がある。不圖見れば其中に、高山文學士と岡田法學士とがある。高山君はわざ／＼平塚か



ら、病を推して見送に來られ、また岡田君はつい一月程前に、外國から歸朝されたので、船中及び途中の注意を、覺書にして持つて來られたのであるが、其時間が遅れたので、吾と船中に逢ふことが出來ず、空しく引返さうとする所を、運よく吾の見つけたので、もう聲は通じなかつたが、それでも互に顔だけは、見もし見られもすることが出來た。この時岡田君の覺書は、船長に托して行かれたのを、後にて受取ることが出來た。

午前九時、汽笛一聲、暫時の離別と見渡す神奈川臺は、靜かに其位置を轉じた。否、船は進行を始めたのである。

以上の記述は、洋行首途に於ける、感想の一節である。而も此の「さゞなみ日記」は、例の桂舟の挿畫を加へて、十一月號の少年世界から連載せられ、次々に「伯林當座日記」となり、「伯林百談」となり、「白佛來日記」となり、向ふ約二ケ年に亘つて、伯林及び其の附近はいふまでもなく、英、佛、白、蘭等の諸國にまで、其の足跡は及ぼされ、行くところ々々の名勝古跡、都市古戰場、其他文化施設など、實地見聞のまゝを、極めて率直に、且詳細に報道して、海外事情の認識を深からしめし一事は、亦没却し難い點である。

猶ほこれ等の見聞記録は、大小長短悉く網羅して、歸朝早々「洋行土産」上下二卷として出版された。而も此の書の型式は、彼の地最新流行の眞四角本を採用して、名實共に異彩を放ち、世間評

判の中心となつた。

一方小波は、「さゞなみ日記」とは別に、「幼年世界」の巻頭を飾るべく、「世界玩具づくし」を、又「少年世界」には、「お伽噺獨逸種」を、遙々船中から郵寄したが、これ等は共に従來の諸作に比して、全く其の面目を異にせる者であつた。尤も「幼年世界」は、小波出發の後幾許もなく、其の廢刊が決定したので、「世界玩具づくし」も亦「少年世界」の一部に連載することゝなつた。

さて、小波外遊中の留守居として、新たに「少年世界」の主筆となれる江見水蔭は、流石に多年冒險小説に想を凝らし、且それを得意とするだけに、舉止頗る武斷に富み、冷熱はげしき感情家として、一度選ばれて其の任に就くや、率先して編輯の局に當り、或は武州日原の鐘乳洞探検を企て、又は内部の方針にも、相當思ひ切つたる改革を斷行し、著しく色調を更むるに至つた。何れにせよ春風習々たる小波を送り、秋霜嚴烈なる水蔭を迎へし「少年世界」は、向後如何なる道を歩み、いかなる面貌を現し來たるか、其の將來は甚だ見ものである。

#### 第十四節 文祿堂の出版物

日本橋區東中通の紅屋といへば、この界隈きつての名高い老舗である。紅屋の當主堀野與七なる者は、江戸氣質の通人として知られ、殊に生來文章の嗜好淺からず、隨つて當代著名の文人と交り



京の薬兵衛として一部に其の存在を認められ、「少年世界」には既に第一巻の時代より、「川柳點幼講釋」を連載したり、又は堀野三華と號して、或はお伽噺に、又は少年少女小説の幾篇かを寄せて其の文名を識られてゐた。



版圖告廣の噺大五

出し、遂には文祿式の評判をさへ贏ち得て、其の装幀の清新華麗を謳はれ、他の老大書肆をすら瞠目させる程の勢であつた。

この當時の東中通、正しくは樽正町一帯は、古美術の老舗が櫛比して、蒼古の氣分を漂せてゐたが、其の間に介在せる文祿堂は、三尺ほどの出窓を硝子張にして、自家の出版物を適宜に配置し、

いはゆる絢爛の美をかゞやかせて、通途の人の足を停めさせた。蓋しかゝる新意匠も、根が凝り性の薬兵衛の氣持を、遺憾なく現はしたものである。

然るに文祿堂は、また少年書類の出版にも乗出し、其の第一着手として、先づ福田琴月の「いろは短歌お伽噺」を發售した。琴月は大阪屈指のさる薬種商の倅にて、夙に文學志望を以て上京し、諸先輩の門に出入して教へを乞うた。随つて「少年世界」には、早くより時々筆を執つて、相當に文名を知られてゐる。大阪の老舗の若主人の著作を、東京の老舗の若主人が出版するのも、亦面白い取合せではあるまいか。——なほ琴月は、後年金港堂に入つて手腕を揮ひ、晩年には番衆浪人と號して、大衆向の歴史小説などを描いた。

この琴月の「いろは短歌お伽噺」は、古來流布せる文句を其のまゝに採入れて、それ〴〵適宜に短篇のお伽噺を作爲し、全部四十八種を四六判の美本數冊に分けて出版したものである。勿論これにも、文祿堂獨特の意匠が凝らされ、博文館物とは別の意味に於て光彩を放つた。

次で薬兵衛は、自ら筆を執つて、「日本五大噺」なるものを出版した。これは例の馬琴の原作を演述したもので、敢て斬新とは言ひ得ないが、尾崎紅葉題字、巖谷小波序文、江見水蔭評語、後藤芳景挿畫といふやうに、頗る業々しい觸れ出しを以て善美の極致を發揮し、少年書類中稀有のものとせられしだけに、幾度か版を重ねて、相當多く世上に流布した。



その廣告文に、「このほんは、みなさま、ごぞんじの、ももたらう、したきりすゞめ、はなさかち  
ちい、かち／＼やま、さるかにかつせんの、五つを、おもしろくとり合はせて、小説にかきなほし  
た、こどもしゆ方の、教育になる、それはそれは、日本ひらけて、これほど、おもしろい本は、ま  
アづごさいますまいと、ぞんじます」と薬兵衛一流の趣味性を縦横ならしめた。

されば若し此の文祿堂が、時流を直視し、兒童の趣味に適合せる優良の書籍に其の全力を捧げし  
ならば、或は此の方面に雄視し得たかも知れぬが、惜しいかな、あまりにも自己陶醉に趨りて、世  
間の大勢を無視せる點多く、其の爲す所漸く陳腐に墮し、折角の意匠も愈々時流に遠ざかり、日露  
戦争頃を境として、早くも没落の運命に會し、博正町の硝子戸の飾棚も、次第に色の褪せるに委せ  
られた。

併しかゝる例は、敢て獨り文祿堂のみではない。當時、少年書類の出版に志して、歩武堂々、勇  
敢に發足せる者の、必ずしも二三に止まらなかつたが、而も短きは半歳、長きも兩三年を出でずし  
て、其の影の漸次薄れ去る者、比々皆然りと云つてもよい程である。

これ等の経過に依つて考ふるも、如何に少年書類出版業の、經營の困難なるかを想像し得られよ  
う。勿論これには、種々の事情の伏在せること亦言ふまでもあるまい。例へば此の當時の一般書籍  
販賣店は、其の店頭陳列様式にも、買客の目を牽くに足るだけの、用意々匠に缺け、且新聞雑誌

の批評、紹介、廣告等も、多く恃むに足らず、一方これが出版費用は、挿畫に口繪に表紙に、相當  
の多額を要することゝて、他の大人用の書籍に較ぶれば、遙かに高率なるに拘らず、其の賣價は出  
來得る限り低廉を旨としなければならぬ。

故に少年書類の經營者は、自家發行の少年雑誌を機關として、これが宣傳に力むる者、乃至は全  
國的に販賣網の完備せる者、更に長期に亘りてこれが決濟を爲し得るだけの餘裕ある者、最も著名  
の作家、畫家を擁する者等々が、はじめて勝者の地位を保つことを得るも、其のこれに缺けたる者  
は、多く敗亡者に墮つるの外なく、其の經營の多難なることは、亦想像の外といふべきである。

かゝる有様なれば、少年書類の出版者は、これを以て専門の業務となさず、他の賣足迅く、利率  
多き一般書籍の發行に依りて、資力の圓滑なる運用を圖り、其の餘剰を活用して、以て少年書の刊  
行を推進し、徐ろに功を後日に收めんとするにあつた。而して此の當時の出版界に、未だ専門的少  
年書類の發行者を見なかつたのは、如上の理由を主とせるものではあるまいか、偶々文祿堂の消長  
を記すに當りて、此の感を強うせざるを得ない。

## 第十五節 研堂の理科書類

三年鳴かず蜚ばすといふ諺がある。曾て「小國民」の哺育に畢生の努力を傾盡し、次で「近世少



年」の編輯を主宰し、他の模倣追隨を許さざる獨特の技倆を用ひて、最も有益なる雑誌を提供したる石井研堂は、今茲に新たなる構想の下に、「理科十二ヶ月」なる一叢書を編纂して、これを博文



(筆洞古) 紙表月ヶ二十科理

館より出版せしめることゝなつた。

蓋し研堂の名聲の、全国的に著聞するや、既に久しいものがある。即ち健全なる其の筆致と、平易なる解説とは、共に此の人の最も得意とする所にして、これを以て廣く讀者に利益を分たんとするのが、著者の希

望であり目的である。その意味に於て、「理科十二ヶ月」は、研堂獨特の壇場であらねばならぬ。

「理科十二ヶ月」は、其の題名の如く、全部十二卷より成り、これを毎月に配當して其の月々に相應せる題目を捉へ、讀者をして容易に實地の觀察を行はしめるを主眼とし、明治三十四年一月より

同年十二月に亘り、次の十二冊を豫定通りに刊行した。

- |          |          |
|----------|----------|
| 一月。新風船。  | 二月。雪達磨。  |
| 三月。花の錦。  | 四月。沙干狩。  |
| 五月。植物園。  | 六月。蜻蛉祭。  |
| 七月。游泳臺。  | 八月。富士詣。  |
| 九月。暴風雨。  | 十月。銃獵者。  |
| 十一月。幻燈會。 | 十二月。歸省錄。 |

以上、何れも巧みに少年の心理を會得し、其の趣味嗜好を覺り、最も親しみ多き題名を選びたるは、流石に多年斯道に苦勞したる此の著者なればこそと頷かれもすれ、恐らくは亦何人も追従し得ない新境地であらう。

由來、少年用の理科書の編纂は、其の記述最も困難視せられる。たゞ往年の「理科仙郷」は、其の文章の瑰麗なるに因りて、上級少年の評判を得、また「理科春秋」は、構想の新規なるを以て、世間の好評を博せるもの、爾來十餘年、史傳、冒險、探檢小説の類は、各専門の作家に俟ちて、相當多くの良書の作られしに拘らず、ひとり理科の好著に至りては、不幸にして一も少年の机邊に齎らざるゝ者なく、甚だしく寂寞を覺えしめた。



かゝる時、三年鳴かず蛭ばず、徐ろに思念に耽りし研堂が、此の必須の好著を提げ、少年に對して理科觀察の指針を授けしことは、亦大なる收穫といはねばならぬ。殊に此の叢書の記述表現は、著者が多年の經驗によりて、科學愛好の四人の少年を主客とし、或は問答體を用ひ、又は説明體を採り、間々滑稽をすら混へ、一卷約二十章、全章悉く變化あらしめ、飽かずこれに親しむと共に、實地の研究を主とする手際に至りては、少年の指導に認識深く、經驗多き老手ならではの、遂に到り難き所であらう。

今試みに、「植物園」中の一節を引いて、其の記述の妙味を再現しよう。

第一回、鯉躍つて水に紋あり。

五月の始めでしたが、春川さんが朝早く起きて、泉水の廻りに遊んでをりました。風がありませんでしたから、水の上は、平な鏡のやうで、其岸に生えてる紅葉、柳の若葉、つゝじの花などが、水の上へ倒に映つて、ほんとに油繪にでも書きさうなよい景色でした。此泉水には、中島もあり、石橋もあり、深い處も浅い處もあつて、鯉、金魚、それから鮒なんどを飼つて置きますが、鯉は、なれて居りますから、常に手を叩くと、駄でも貰はれると思つて、あつぷく、大きな口をあけて、岸の近くへ泳いで参ります。それに今日は、どうしたのですか、手を叩きもしないに、鯉が、岸の方へ集つてゐて、脊中を半分水の上に出して、ガバ



ガバ／＼と、藻の間に狂ひ廻り、中には、水の上へ飛び上つて、ダボンと、音させるもあり、其度毎に、水の面に圓い紋を起して、其紋が、だん／＼遠くへ廣がり、薄くなつて消

えるかと思ふと、又ガバガバとさわいで、あつちにも、こつちにも、渦の紋を起します。

何でも氣をつけて見る春川さんのことですから、この鯉のさわぎを見ましても、能く見つけて居りました。すると三疋も五疋も、くるくる廻つたりはねたりするのがよく見えます。

餘り不審に思ひましたから、おとうさんに聞きました。すると珍しいことが分りました。父「もう八十八夜が来たので、鯉が卵を蒔くのよ」



春「どこへ蒔くのですか」

父「藻でも葎でも、蒲でも、浅い處の物へ蒔くよ」

春「僕等がそれを見られませうか」

父「見えるとも、藻を四五本上げてごらん、粟粒のやうな黄色の卵が、どツさり着いてるから誰でも分るだらう、鯉でも金魚でも、今日のやうに天氣のよい朝、卵をなすのだが、又馬鹿なもので、その卵を自分がたべて仕舞うのだ、それで金魚屋でも鯉屋でも、其卵の着いてる藻を別の浅い池に移して、卵を孵し、そしていろ／＼食物をくれて育てるのだ、さうさないから清も一ツヤツてごらん、卵の着いてる藻を引き上げて、それを水盤に入れ、日當りのよい所へ置くと、二三日で小さい鯉子になるだらうよ」

第二回。卵孵りて藻に痕なし。

春川さんは、鯉の卵をかへすことを、おとうさんに、すつかりきゝましたから、先づ、金魚など入れる鉢に水をどツさり入れ、泉水の水を寒暖計で計ツて見て、水鉢の水も、それと同じい温みにして、そしてその中へ、鯉が卵を着けた藻を取ツて入れました。なるべく暖い處へ置きまして、毎日々々見て居りましたが、七日ばかり過ぎると残らず小さい鯉子になりました。

「さア面白い、鯉子が生まれた、秋山君も冬田君も来て見給へ」

といふてつれて来て、其赤ん坊を見せて楽しみましたが、一番初の日は、藻の中にかくれてゐて、動きません、かへツて二日目からは、泳いでゐて、餌を拾ふやうに見えます、藻をすツかり取り上げて捨て、雞の卵の黄味を少しづつ入れてくれますと、その小さい鯉が、うれしがツてたべました、それから毎日々々黄味をくれました、少し育ツてから、ミヂンコといふぼろふらのやうな小蟲を捕つて来てくれ、よく手入をしましたので、やうやく育ちましたさうです。

鯉は一疋で、三十萬粒から、七十萬粒ほどの卵をなします。その七十萬の卵を、一粒並びに行列させて、一粒の長さ二厘づつに勘定すると、三町五十三間——四あし一間づつにして、九百三十歩ほどになります、えらい卵ではありませんか。

鯉が瀧上りするなんといふことは、うそでございます、が、勢のよい魚ですから、五月節句の飾り物にも用ひ、出世する目でたい魚としておきます。

かくの如く、研堂一流のなだらかな筆致を用ひて、すらくと書き下し、讀者をして毫も倦まじめず、且これが記述には、一も想像や臆説を混へず、悉く著者が苦心實驗の結果に俟てるだけであつて、單なる机上の産物とは異なり、一章一句至大の效益を與ふるものであつた。

殊に、實驗觀察の志厚き著者は、此の機會に、六尾の鮒に就いて、其の身長、體重、及び卵重、



卵数を綿密に調査し、其の平均率を得て、身長六寸五分の鮒は、體重三十七匁を有し、其の抱擁する卵の重量は、七匁八分四厘にして、これが卵數二萬四千三百三十といふ正確なる一覽表を掲げて讀者の参考に供したる如き、如何に此の書が良心的に、又如何に著者が努力を捧げしものかは、只此の一事に徴するも明かである。

また本文の振假名に、俗にいふ棒假名を併用したるは、恰も此の當時、文部省の假名遣が、新たに棒假名に改められ、小學校の教科書類も、すべて此の方式に一定したる爲め、特にそれに準據したるにて、亦以て著者の用意を窺ふに足るであらう。

かくして「理科十二月」は、順調に其の發行を繼續して、豫定通り首尾大成するに至つたが、著者は更にこれに飽き足らず、一層の努力を重ねて、やゝ上級生を目標に定め、「少年工藝文庫」全二十四冊の編纂を企て、非常なる意氣の下に、三十四年二月を期して、これが第一編「鐵道の巻」を先づ刊行した。

而も其の編纂上の主義方針は、前著「理科十二月」に異なる所なきも、其の内容は著しく豊富となり——「理科十二月」は菊判約八十餘頁(定價十錢)にして、「少年工藝文庫」は菊判約百二十餘頁(定價拾五錢)であつた。——隨つて執筆の勞苦は、數倍せるものと想像せられる。

されば著者は、これが巻頭に、「此の書を読む人に告ぐ」と題して、次の如くに述べてゐる。

工業上のことは、何にても、數學の力にて説明せらるゝ場合が多いのですから、其の書物は、どうしても無味平板に陥り易く、少年の讀本に之を擇びましたのは、著者の不利益に相違ありません、併し今の世の中



少年工藝文庫の表紙

は、日一日増しに、工業の進むこと著しく、人間生活上の一切萬事、工業に頼りて動き、國の貧富も、兵の強弱も、皆これに支配さるゝ様な時勢になつて参りましたのですから、こゝは、文筆に従事する者の、一つ奮發す

べき所と考へ、終にこの工藝文庫十二冊の著作を敢てすることに決心をしました。されば若し幸にして、此の杜撰の書が、世の少年の一顧を得ば、著者の苦心の空しくないばかりではなく國の爲にも喜ぶべき現象と存じます。



此の書記載の事柄は、成るべく實物に就きて、予の乗れる汽車は何故に動くや、予の室を照らす電燈は何故に光るや、予の家の臺所に送る水道の水は、如何なる仕掛を受けてこゝまで來つるにやと、日日眼の前に起る問題を解くに足る智識を與へ、理工工業の實效を示すを主として居ります。故に少年が此の書を読みし後は、文明の利器についての觀察の、一入精細ならんことを祈ります。否、自ら精細になるであります。

此の書は、他の歴史傳記などの書とは違ひ、只々一度すら／＼と讀み下しただけでは、了解さるゝ筈が無いのですから、是非とも再三くり返して讀んで貰ひたうぞんじます。

此の書、鐵道といへば、鐵道の職に在りて、最も鐵道のことにも明なる人、水道といへば、亦水道専門の學者、當事者につき、不審の點を質問し、妙からぬ助けを得て、完成するつもりであります。其間接なり直接なり、此の書の編輯に盡力を與へられし諸君子の姓名は、一々書き記しません、讀者は、著者石井研堂の外に、更に有力の援助者の在ることを、確に認めらるゝやうに願ひます云々。

洵にこれは至言であり、同時に著者の先見の明に推服せざるを得ないものがある。謂ふに、事に工藝方面に携はる人々は、各専門の技術にこそ精通すれ、其のこれを少年の腦裡に移植せしめる手段を知らず、又世の文筆業に従ふ者は、巧妙の辭句を用ひて、巧みに少年を娛ましむることは知れることは争ひ難き所である。

然るに少年教育に熱意ある石井研堂は、深く此の一點に憂を懷き、想を凝らして曩に「理科十二ヶ月」を編み、以て世上の缺を補ひ、渴を醫し、更により至難なる「少年工藝文庫」十二冊の完成を目ざし、或は自ら各現場を訪うて、實地操作の情況と、深奥なる學理の應用とを見聞し、或は専門學者及び技術家に面接して、飽かず不明を質し、不審を問ひ、東奔西走、苦心經營の末に、良心的要素を盛りて編纂したるものにて、いかにも著者のいふ如く、文筆に従事する者として、最も不利益の役割には相違なきも、併し國家の進運を念頭に置き、これが助長を期し、敢然として此の困難なる方面を辿り、完く前人未到の境地を開拓したる功績は、我少年文化史上に、正しく特筆大書せらるべきものであらう。

なほ「少年工藝文庫」は、最初十二冊を以て完結すべき豫定のところ、豫期以上に讀者の反響を喚び、爲めに更に新しく十二冊を追補し、全部二十四冊を以てこれが大成を告げたのである。次に同叢書の總目次を掲げ、改めて著者の勞苦に敬意を捧げよう。

第一編 鐵道の卷。 第二編 水道の卷。



- |             |             |
|-------------|-------------|
| 第三編 瓦斯の巻。   | 第四編 寫眞の巻。   |
| 第五編 電話の巻。   | 第六編 硝子の巻。   |
| 第七編 紡績の巻。   | 第八編 活版の巻。   |
| 第九編 汽船の巻。   | 第十編 製紙の巻。   |
| 第十一編 銅山の巻。  | 第十二編 電燈の巻。  |
| 第十三編 陶器の巻。  | 第十四編 漆器の巻。  |
| 第十五編 時計の巻。  | 第十六編 燐寸の巻。  |
| 第十七編 織物の巻。  | 第十八編 染色の巻。  |
| 第十九編 煙草の巻。  | 第二十編 砂糖の巻。  |
| 第二十一編 醸造の巻。 | 第二十二編 石油の巻。 |
| 第二十三編 機械の巻。 | 第二十四編 建築の巻。 |

### 第十六節 「少年商業文庫」其他

既に「少年工藝文庫」の出づる以上、當然これと並行すべき、「少年商業文庫」の必須なるは、何人にも異論無き所であらう。

由來我國にては、士農工商の階級を立て、商業に従事する者を、最下位に置くの弊風を馴致し、随つて此の種に屬する少年讀み物の類は、寥々として一抹の寂しさを感じるのであつた。

而して少年教育に熱意深き石井研堂が、萬難を排して、挺身率先「少年工藝文庫」を著したるは最も時機を得しものとすべく、更に博文館が、これと並立して、「少年商業文庫」の刊行を企て、工商兩道を進む少年の爲めに、一閃の光明を投與せることは、蓋し甚だ賢明の策といはねばならぬ。

「少年商業文庫」は、斯道に最も経験多き米海天城安政の手裡に編纂せられ、各冊菊判百五十頁、本文のところ／＼には、小峰大羽の筆に成る多數の密畫を加へ、其の形式も價格も、總て「少年工藝文庫」に準じ、双々姉妹篇を成せる者である、これが發刊の宣傳文に見れば、

天城米海君、夙に實驗と識見と學才とを以て、商業書類の著述に従事せらるゝもの已に十年、其書の一たび出づるや、毎に江湖の歡迎する所となり、類似の群書をして、殆ど顔色なからしむるの觀あるは、君が一種の妙技、之をして然らしむるとはいへ、又實に實際の必要を満たすの價値あるが爲めにして、其教育上、實業上に貢献したるの功績は、識者の既に公認する所なり。

然れども君が從來の著、多くは學校教本の目的に成れるを以て、自から文部省の法令に拘束せられ、爲めに幾多の趣味を殺がれ、却つて實益を擧ぐる能はざるの憾あるのみならず、亦教育



界實業界の共に遺憾とする所なり。是に於てか今や君は、更に「少年商業文庫」の編纂を企て文部省の法令以外に立ち、輕妙多趣の筆を以て、多年の懷抱を擅に吐露し、商業教育に關する百般の知識を、少年の頭腦に注入し、以て國家が商業教育を獎勵する所以の本旨に副はしめんとす。

文庫收むる所、每編談話體の文を以て、高尚の學理を、極めて平易に解説し、讀者をして學理に接するの感無くして、直ちに學理の要旨を會得せしめ、一篇のお伽草として誦讀し、知らず識らず商業上の知能と性格とを具備せしむるの益あり、商業子弟が家庭の讀み物として此上のものなかるべく、又實業補習學校、實業夜學校等の課外讀本として、好適の文庫なるべし云々。と述べて、著者の地位と、信用と、其の抱負とを明かにした。これは恐らく米海其の人の筆に成る者かと想はれる。

「少年商業文庫」は、如上の意味によつて、出來得る限り、平易簡明にして、趣味を多からしめ、著者のいはゆるお伽草として記述したるだけに、これが題目の如きも、高尚の學理を避けて、實地教養に重きを置けるが如く、即ち第一編「勤儉貯蓄」に於て、商業家第一の秘訣、開運、成功の手段を説き、第二編「商業の栞」には、商業思想の涵養と、商業の大意とを記し、多種多様の材料を配列して、商業の全般に通曉せしめ、更に第三編を、「世界金傑譚」として古今の富豪三十餘家を一冊に收め、肖像と繪畫とを加へて、成功致富の道程を詳かならしめた。

其他、「簿記の栞」、「商業算の話」にて、實地學習の要に應ぜしめ、「商人修身訓」を以て、最も必須なる商業道德の大意を説示し、全部六冊を以て、商家少年の心得べき全般の事項を盡したものである。勿論この叢書は、かの「少年工藝文庫」程には、弘く世に行はれなかつたもの、從來かかる種目の類書が、殆ど絶無の状態なりし爲め、將來志を商業に懷く少年にとりては、眞に理想的の手引草であつたと思はれる。

然るに恰もこれと前後して、村井弦齋が、「繪入小僧讀本」と、「繪入下女讀本」とを著して、當時に於ける商家の丁稚と、良家の下女との爲めに、其の心得となるべき幾多の事項を網羅し提供したる事は、嘗に新しい試みといふばかりでなく、最も時機を得たる良著と見なければならぬ。

弦齋は曾て少年の讀み物として、例の「少年文學」に、「近江聖人」と、「紀文大盡」とを受持ち、其の玲瓏珠玉の如き才筆は、強く讀者の肺腑を衝くものあり、隨つて此の二著作は、「少年文學」中にも、最も出色の佳篇と認められ、天下の少年をして、弦齋の名を謳歌せしめた。而も今や斯人は自ら案を立て、明治の紀文大盡を養ひ育てんとして、特に小僧讀本を著し、次で下女讀本を著して姉妹完備の實を示し、殊更に繪入と冠せる理由も、低級なる此の種讀者を啓發せんとする心づくしに外ならなかつた。



「村井弦齋君、近頃小僧讀本一篇九章を綴りて鉛槧に付せらる、書中小僧の行儀作法を正し、貯蓄心を奨励し、徳義の觀念を養成する事の如き、不規律なる今日の社會は、往々にして實行に難きものあらん、只今日のいはゆる丁稚小僧が、異日我國の實業界を組織する大責任ありと知らば、其無邪氣無心なる少年時代に於て、人間の軌道を行ふべき良習慣を養ふの急務なるを見る。今の世は徳教の人間を正すべきもの無し、商家の子弟小僧の如き、茫として自ら依倚する處を知らず、其父兄主人は、業務の繁劇に追はれて、一々訓誨するの暇なけん、師友なかるべからず、本書の如きは寔に人心を戒飭する近來の好著なり」と自讃せるも、亦理由あることと思はれる。

小僧讀本の内容を見るに、一、悪い小僧。二、小僧の禁物。三、小僧の心掛。四、小僧の行儀。五、小僧の貯蓄。六、小僧の風儀。七、小僧の勉學。八、主人の撰擇。九、小僧の辛抱、以上九科目に分ち、努めて平易の筆致によつて、具さに其の心得を教示せるものである。

次で世に出でたる下女讀本を見るに、これ亦前書に倣ひ、臺所の心得、料理の心得、拭掃除の心得、洗濯の心得、衛生の心得、行儀の心得、子守の心得、平生の心得、證明書の九項目に分ち、下女の負ふべき任務、秩序、心得より、進んで經濟、衛生、禮儀、道德のことにまで及ぼして、懇切丁寧に説示し、獨り下女の本分を知らしむるのみならず、家庭の主婦にとりても、條々服膺すべき好個の資料を提供せるものと見られた。蓋しこれ弦齋の如き老巧博識の苦勞人にして、初めてよく成し得たものと信ぜられる。

猶ほ此の兩書は、名題の示せる如く、小僧と下女とに其の讀者を求めたる關係にて、出來得る限り安價にして弘く一般に行はるゝやう、共に一冊貳拾錢といふ、當時としては最低に近き定價を附したるは、著者の意見か、但は出版者の用意か、其の何れにありしとするも、亦努めたりと云はねばならぬ。

以上、天城安政の「少年商業文庫」と、村井弦齋の小僧下女兩讀本の如きは、聊か少年文學の範圍に遠ざかる者とも思はれるが、此の時代に、早くこれ等の著作によりて、商務と家事とに携はる特殊少年少女の爲めに、一定の方針を授け、正道を踏ましめたる一事は、普通少年文學の、空疎なる作物に比して、其の實用的效果の著しく大なるを認むべきであらう。

果して日露戦後兩三年にして、大いに實業教育の振興を來たし、専門學校の増設に伴ひて、かの實業之日本社は、斯業に進進せんとする商家少年を對照として、率先して「實業講習録」を發行し、次で博文館も亦、石井研堂を招聘して、「實業少年」なる新雜誌を起し、實地の學問と、立志成功の要道とを説破して、共に天下の趨勢に即應せしめたるは、亦出版者の當然往くべき方途であつたと見られる。



## 第十七節 「少年世界」七・八卷

「少年世界」は、其の第六卷の終刊に近く、主筆の交迭を行ひ、早くも翌年度の大飛躍を豫想せしめた。而も新たに主筆に任じたる江見水蔭は、直ちに新面目を發揮すべく、行動を開始し、これが第一着手として、武州に名高き日原鐘乳洞の探検を企つるに至つた。實に破天荒の計畫なると同時に、正に電光石火の迅業とも見られた。

時は三十三年十月、水蔭は先づ自己の周囲より隊員を物色し、自らこれが隊長となつた。其の得意や想ふべしである。即ち學術部員に寺崎七草（留吉、稱好幾々友にして水蔭と密接の關係ある理學者）、測量掛に竹貫佳水（東京瓦斯會社々員）、寫眞掛に齋藤紫白（博文館寫眞部員）、繪畫部員に山中古洞（博文館繪畫部員）等の外、隊員として大澤天仙、磯萍水、谷活東、増田某など江水社一派の猛者を擧り、總ての準備を整へて、同月十日飯田町驛を發し、一路奥多摩の目的地に向つた。

勿論こは往復兩三日の探検旅行に過ぎなかつたが、水蔭獨特の誇大なる筆法を以て、十一月の「少年世界」より始め、翌年四月まで、實に半ヶ年の長きに亘りて、卷頭の十六頁を填め盡し、毎號數面の挿畫と、寫眞口繪とに依つて、堂々全卷を壓するの觀を呈した。されば從來卷首を飾りたる小波の少年小説は、十月號を限として、一旦其の影を隠すことゝなつたのも、亦已むを得ぬ趨向

である。次に鐘乳洞探検實記の發端の一部を掲げ、水蔭の潑刺たる意氣を窺ひ見よう。

## 少年世界特派の探検隊

奇怪限りなき洞!! 危険極りなき窟!! それは武藏の多摩川の水源に合してゐる日原川の上流に在るので、本邦の石灰洞としては、其大きくして廣く、其高くして深く、而して奇にして怪なる、先づ他には無いといつてもよいのである。

土人の口碑には、出羽の湯殿山まで、其穴の奥が続いてゐると傳つて居る位で、それは固より信じられぬが、兎に角穴の深い形容として聞くべしで、何にしても實に恐しい魔所である。未だその穴の奥を窮めた者が無いのみならず、それを突き止めようとした者は、皆失敗に終つて居るので、其失敗の小なる者は、途を失して三十餘時間暗中に留り、其失敗の大なる者は、永久闇から闇に入つて、終に生きて穴を出なかつたといふ、かういふ歴史のある怪洞である。

今、自分の聞き知つて居る探検者で、重なる人々は、一人の行者と、山梨縣師範學校の生徒百餘名の一行と、佛國の宣教師なりと稱する一外人と、城北學校の生徒二人と、早稻田の某校の生徒一名と、某校の學生にして、三ノン菩薩と自稱する三人と、片岡侍従の一行と、田山花袋、片山春帆の二子と、それだけである。

此他、無論多數の入洞者が有つたのみならず、今も猶入りつゝあるのであらう、元祿時代には



最も多くの迷信者の入洞があつて、一時期に一萬人を下らなかつたといひ傳へてある程だが、それ等は皆弘法大師のいましめで、是から先へは行くべからずと定めてある。其所の場處から奥へは、一步も進めぬので、土地の者などは、別して恐るべき魔界として、一人も進入した者が無いとの事、それを押して進入を試みたのが、前に並べた諸氏で、未だ此外に有つたか知らぬが、誰一人探検に成功した者の無いのは事實である（中略）。

かう列挙してみると、すべて失敗に終つて居る日原鐘乳洞の探検で、それを完全なる方法を以て洽く踏査し、それを世間に向つて發表するのは、まことに壯舉ではあるまいか。少年世界特派探検隊の第一着手として、此奇怪限りなき大魔洞を紹介するのは、實に愉快絶ではあるまいか。

米國ケンタッキー州エドモンド郡にあるマンモスの大洞窟、それに劣らぬといふ日原の鐘乳洞、中には川もあり沼もあり、山もあり原もあり、高さ五六十間の大洞あり、低さ二三尺の小穴あり、而して其奥の奥は、何處まで抜けてゐるか知ることを得ぬといふ、かういふ大奇穴を寫眞に畫に文章に、種々の方面から寫出して、以て少年諸君に紹介しようとする江見水蔭は、甚だ大きな言葉ではあるけれど、責任を以て何所までも立つ者で、場合によつては、一命を輕んずる者である。否一命よりも、責任を重んずる者である。強ひて奇を行ひ、險を冒す、其嘲

笑もさる事ながら、出来るだけの準備をして、これならば大丈夫といふ處まで手を届かして置きながら、其上で失敗して大怪我をするとか、或は變死でもしたならば、どうも自分が悪いので、死んでも決して口惜くないのである。かういふ覺悟を以て、自ら進んで少年世界探検隊の隊長となつた云々。

と、明白に其の意見を縷述してゐる。懷ふに當時一般少年の傾向は、著しく尙武の意氣に燃え、延いて冒險、探検の趣味を感ずること深く、此の新計畫は、確かに時好に適應せるものと見るべく「さゝなみ日記」と双々一聯を成して、「少年世界」の聲價を一段と高からしめたことは、亦疑ふべくもあるまい。——なほ水蔭は、廣く全國に對つて、第二回の候補地を募り、信州戸隠山の探検を續行して、再び少年の血を湧かさせた。

それは兎も角も、三十四年度の「少年世界」は、果して著しく其の面目を更め、讀者の喝采聲裡に、新貌を露呈し來つた。併したゞ表紙の柿色のみは、猶ほ殘紙夥しき關係にて、依然其のまゝ改むるに至らず、本文の印刷は、從來の博進社工場（共同印刷の前身）より、秀英舎（後の大日本印刷）に移すと共に、これが用紙を極度に精良ならしめ、更に其の口繪には、從來の赤門紙八丁の外に、光澤紙一丁を加へて兩面刷とし、寫眞銅版固有の特色を發揮することゝなつた。

元來光澤紙なる者は、近年輸入せる極美の洋紙にて、これまで偶々二三の特殊印刷物に試用せら



れたる例はあるも、これを少年用の雑誌面に加ふるに至れるは、實に此の時を以て最初とする。されば「少年世界」は、特にこれを貴重視し、筆を盡して光澤紙の效能を吹聴し、且本文の紙數をも百三十六頁とし、同時に定價を改めて拾錢に高め、少年雑誌中第一の貫祿を備ふるに至つた。

また第四卷以來、一時中止したる欄別をも再興し、幼年談、唱歌、冒險談、小波通信、史傳、地理、軍事、科學、遊戲、雜俎、文壇、時事等の各種目とし、每號必ず其の欄毎に二三の記事を收めしことゝて、表紙面に掲ぐる目次の體様は、甚だ賑かなる觀を呈し、加ふるに新年附録には、水蔭案桂舟畫を以て、例の北清事變の場面を扱へる「支那戰爭双六」を添加した。蓋し此の雑誌の新春景物に双六を採用することは、今や全く確定的の慣例となつたのである。

却説「少年世界」の呼び物として、第三卷以來、毎年兩期に發行せる倍大の臨時増刊は、本年度に入つてこれを改め、新たに定期増刊として、普通號と同大なるを、年四回に亘つて刊行することとし、其の第一回は、一月十日の「春遊び」を以て始め、大要次の如き短篇を收容した。

春遊び（江見水蔭）、春興戲戲（志岐守治）、算術遊び（竹貫直人）、正吉物語（石橋思案）、新勇戲（木村小舟）、母の説諭（生田泰山）、西洋物の始（篠田胡蝶）、學校の恥（上田菊子）、炭の鋸（泉鏡花）、猛獸の愛（徳田秋聲）、雙討少年（大澤天仙）、白薔薇館（福田琴月）、斑と熊（谷活東）、くらべ弓（泉斜汀）、出世大黒（猪波曉花）、蜘蛛角力（黒田湖山）、椎の木（藤井紫明）、ナポレオン（武田蒼塘）、戰

争（吉野左衛門）、日章旗（矢崎鯉峨の屋）等を數へしも、其の大部分は、買溜原稿の中にて、例月號に掲載の餘地なき小説、雜錄の類を、適宜排除するにあつたことは、これ等の目次に依つて、明かに認め得られよう。

次で四月十日には、隅田川ボートレースの時期を目ざして、「競漕會」なる増刊を出し、これには怒濤の乗切（江見水蔭）、海軍士官（堀田中尉）、競漕會を見て（石橋思案）、ボートレース（西川寒月）、海酸漿の話（今井金牛）、冒險海軍談（駒田旭江）、海軍雜話（山室茜畫）、少年畫工（木村小舟）、捕鯨の二時間（磯井水）、四十湮の大競漕（篠田胡蝶）、死湖の一夜（武田櫻桃）、短艇行（竹貫直人）、水族世界（澤田晚嶺）、海の島（黒田湖山）等にて、其の顔ぶれは、殆ど常連に依つて占められ、格段なる名篇傑作も見られなかつた。

此の他七月十日の「探涼軍」、十月十日の「園遊會」も、共に當時流行の世間行事を捉へて題目に充てしのみ、其の内容は、既刊の者と大同小異にて、只「探涼軍」に、「名家涼感」と、「讀者涼感」といふ短文を列載したのは、稍目新しさを感じさせた。

創刊以來今日まで、四季に亘つて特別附録を添加したる「少年世界」は本年も亦、春秋二回を期して、桂舟筆の「大鱗」と「猩々」とを額面用寫眞版に附し、共に怪奇の圖柄を現出したが、もはや此の種の繪附録も、聊か陳腐に歸したものと、如く、さして讀者の感興を牽くに至らなかつた。併



し何れにしても、本年度の「少年世界」は、其の記事の全般に亘りて、漸く高尚の域に進み、随つて餘裕と情味とを缺くやに想はれるのは、一に主宰者の氣持の反映と見るべきであらう。即ち前任

者は仲春の如く、現任者の嚴冬の如きことは既に述べし所である。

次で第八巻に入るに及び表紙を白色とし、赤藍二色刷に現して、こゝに三年越の不愉快なる柿色紙を拂拭し去れる一事は、此の雜誌の品位を保つ上に、最も慶賀すべき改良であつた。然



少年世界第八卷表紙

るに前年度使用の光澤紙は、採算上高價に失する爲にや、早くもこれを廢止し、猶ほ本文の用紙も幾分か低下する等、すべての點にやゝ遜色を見るに至り、加ふるに冷熱の度激しき水蔭は、亦其の意氣前年に劣るものあり、漸く情氣を帯び來りしは掩ひ難い事實である。

恰も此の年の春、教科書々肆として知らるゝ金港堂より、突如として新しき少年少女雑誌を發行し、大に宣傳に努める所あつた。而も其の表紙には、豪華なる石版多色刷を應用し、紙數定價等も「少年世界」と同形式に出で來り、從來獨占的地位を確保したる「少年世界」は、俄然一大衝動を感ぜざるを得なかつた。

仍てこれに對抗すべく、同年夏期より、先づ表紙意匠を更め、明星輝く初秋の原野の柵に倚りて少年少女の談笑せる場面を洋木二色に現して、漸く新面目を保持したるも、如何せむ主筆水蔭は、情氣愈々募り、殆ど熱意の見るべきものなく、其の内容に關しても、何等の新計畫を樹てんとはせず、寧ろ傍觀の態度に出でしやに思はれ、一方小波は、既に獨逸語學院の任期充ち、多大の希望を胸に秘めて、歸朝の船中に在り、「少年世界」の前途の洋々たる、眞に期して待つべきものがあらう。併しながら此の間、外に強敵を控へ、内に主筆を鞭撻して、孤軍奮闘せる武田櫻桃の勞苦と焦慮とは、亦尋常一様ならぬものがあつた。

### 第十八節 當時の投書家

「少年世界」は、第四巻より、投書欄の改革を行ひて、これが廢止を斷行し、代ふるに「少年演壇」を以てせるが、更に第五巻に入りては、單に「少年通信」又は「少年氣焰」に、兩三頁を割くに過



ぎず、心ある投書家をして轉々寂寥を感じしめた。

かくて第六卷を迎ふるに當り、復び往年の「少年詞藻」欄を起し、冷く讀者の詩歌文章を掲げることとした。即ちこれを兩三年前の趨勢に比すれば、投書家の顔ぶれ殆ど一變し、且其の文章の形式も、著しき相違を認むるに至つた。

今、此の當時——第六卷より九卷までの投書欄に就いて、主なる二三の投書家を拾集し、其の投書家が、今日如何なる地位に在るか、換言せば現社會の第一線に活躍せる名士が、少時如何なる文章を作り、如何なる思想を懷きしかを回想するも、亦多少の感興を覺ゆるであらう。

先づ「少年世界」第六卷には、其の文章欄に、尾張の鈴木敏也（文學博士廣島文理大教授）と、京都の江馬務（文學士時代風俗研究家）とが、斷然抽んでゐる。次に此の二人の作品を紹介しよう。

〇〇〇内津紀行。（鈴木敏也）

草の籬に鳴き出づる松蟲の聲も、げにいと悲しくおぼゆる秋もいつしが過ぎて、今ははや師走となりぬ。

今日は雪かくらして風いと凄まし、親しき友ふたり三人つれだちて、内津妙見宮に詣でんと出で立つ。曉の風肌を透し、木々の梢は花か見え、池の鏡も氷に閉され、田舎の景色も兎角して、小富士山下に到り、山頂なる淺間神社を遙拜し、進みて道を櫻街道にとりぬ。かたへなる

枯蘆の果敢なく萎れふしたる、或はたえぐに岩にもるゝ水の音ばかり物さみしく覺ゆる程に池野村に着きぬ。こゝは前もうしろも田面にて、林の軒ちかくむら竹めぐり、民の家所々にありて、かしこなる家に憩んとて走りつきぬ、そのみ社は何社ぞと問ふに、白山社とて此地の氏社なりと、いざ詣でんとて鳥居のうちまで参りて拜するに、古松老檜の年を経たる、森々として物淋しく、渴仰の涙とめ難し。松くらくして百枝の梢はいづくともわきまへ難く、ぬかづき奉るも畏きまで麗しく、尊きみづがきの内、眞珠の瓦を葺き、瑠璃の壁を白くぬり、種々の雜寶をも莊嚴のかざりせり。社に敬禮せしは正午、雪は小降となりたる頃なりき。

此處を立ち出でて里許、入鹿湖畔に達しぬ。向岸は遠く中央に峰つき出でてその巖を洗ひ、山影の水に映じ、泉はこゝかしこの岩間より湧出で、かたへなる水にのぞみて、かたの如き吾妻屋をいとなめり。そこに入りて景色を眺めつゝ晝飯を喫し、終りて東に入り、奥入鹿を過ぎて山路にかゝりぬ。雪の山路は一入の興ありて、苔ふかき岩根づたひの路をのき千重山とりよるひ、人の行き通ふべき所もあらず、渡せる棧は行くにだに眼くらみ、魂きゆる計りなり、兎角辛じて鐵ヶ峰に着しぬ。南方を見渡せば様ことなる山の姿の、紺青をぬりたる様に雪のつもりたれば、色こき衣しろき相きたらんやうに、遙か伊良湖の半島は淡く知多の師崎と相對し、衣が浦は青疊を敷きたる如く、篠島の突出であるは實に述べ難かりし有様なり。



歩を鼓し漸々にして、内津の町に入りしは午後四時、雪は全く已みし頃なり。妙見堂に至るに一の丘上において、庭の砂子は水精のやうに閃き、池の水清う澄み、蓮の花も今や見るかげもなく、六の花代りて咲き染めたり。堂のみぎりきら／＼しく、心靜に念誦し、木像の佛おわす御前に參るに、眉間の光毫右にめぐりて宛轉せること五須彌のごとし。青蓮花の御眼は四大海をたいへ、體相威儀いづくしく、紫磨金の尊容は秋の月のくもりなく、無數の光明あらたにして、世界あまねくあきらけし。

香の煙風にさそはれて打芳鬘伽の花の露も鮮に見ゆ、磴を下りて里人に「外に名所はなきか」と尋ぬるに、此處より十丁計りの處に御堂ありしが今は御幣のある計りと云ふ、さらばとて歸路につきぬ。山に入るに先き來し道とは違ひて、遂ひに進むにつれて谷間に陥りぬ。こは道なしとて、ひた登りに登るに、何條となく路ありて、只山がつの、街路を穿てるのみにてありける。最早や夕暮の事なれば、木こりだにあらず、嶺の松風あらましく吹き下し、よろづに淺猿しく、一番年下の達磨様さへも如何にと涙ありし、かゝる夕暮に、かくも深山路に迷ひつゝ、兎の道さへ知らぬ藪の中を、辿り／＼て頭峰には着きぬ。時に日は虞淵に沈みければ、松明など造り、火を點して雪を照して走り、深山木のこだかき蔭に流るゝ水音心ほそく、木立ものありて淋し、山路を出で入鹿湖の畔に達しぬ。尙も松明の力にかりて進む程に、富士の峰もいつ

か後にありて、田面の道を行けども／＼盡きず、餘りの事に只茫然たりしが、軍歌の聲に送られて、知らず／＼犬山街道に出でぬ。此の時の心は鬼の首とりし心地して、つかれし脚に鞭ち勞れし腹をなだめつゝ、草の菴に歸りしは夜も早や三更の頃なりし。

評。文章超凡些の澁晦を見ず能手と云ふべし。

、○春日桃山に遊ぶの記（京都。江馬務）

春日郊外に遊ぶは甚だ面白く、且博物の研究、地理歴史の探検、昆蟲の採集等は又一入面白く樂しくして、人心を慰むる一端となりぬべし。去年のことなりき、春の長閑けき日に友達三人我家におとづれ來て、頻りに野邊に散歩せんことを促したり。余乃ち辭する能はず、相共に伏見街道より竹田街道に出づれば、見渡す限り青菜の色に心を奪はれしが、恰も西方より來る汽車の響轟々と、音高らかに走るさま又得もいはれぬ心地せり。されどかくさまよへるも興少なければ、序に桃山に梅花を觀ばやとて、下駄のまゝ道を急ぎ山に向ひぬ。

當日は幸ひに空隈なく打晴れて、さながら塵雲なし。折々そよ／＼と吹く風は身に温く感じ、只門を出でてだに野邊に遊ばん心起るに、まして桃山の觀梅に郊外を散歩すれば、其爽快筆紙に盡し難し。

さて余等は、伏見の町より桃山に向へば、山頂に三階の建物見ゆ、さては早や望みし桃山に來



りしかと踴躍しつゝ、山上にひた登りに登りて瞰下すれば、梅花方に爛漫として層疊眼の届く限り左右遠近皆花ならざるはなく一望雲の如し。春風駘蕩、香氣紛々として鼻を撲ち、遊客雜沓して觀笑遊樂す。余等飄然として梅林を眺めて激賞時を移し、又烟波洪渺たる巨椋池及びかの佐々木梶原兩チャンピオンが、馬上にて先陣を競ひたる宇治川を瞰しては懐古の情に堪えず、更を眼を轉せば遙かに葛城老ノ坂山脈等、巍然として歴々手に取るが如く、十里の郊原楢牙に接して悉く双眸に歸す。かゝる地形の宏壯なる處なれば、豊太閤が城を山上に構へしことこそげに宜なれなどと、心に史乘をたどり、良久しくして歸路に就き、坂路屈曲花間を穿ちて下る。一同かゝる絶景を見棄て、去るに忍びざれども、日も西天に傾かむとすれば、せん方なく遺憾ながらも、後を顧みつゝ、桃山停車場に到り待つこと數分、汽笛劉啞汽車に投ず、汽車徐ろに運轉を始めつ、一人の友先づ余等に向ひて謂ひけらく、今日吾等がかく滿腔の快樂を取りしかど、たゞ鶯の一聲だに聞き得ざりしはくちをしくてなんなどと、文人めきたることをいひて笑ふうち、汽車は伏見驛もいつしか打ち過ぎて、京都停車場に着し各暇を告げて歸宅す、時に暮色蒼然たりき。余坐して其日の事を考ふれば、桃山の風景再び目前に現れて止まず、乃ち折取り歸りし梅の一枝を花瓶にさし、以て後日の思ひ出とはなしぬ。

これに對しては、記者の評語を缺いてゐるが、更に第八卷に入るや、俄然谷崎潤一郎が目立ち活躍してゐる。また入澤宗壽（文學博士、東大教授）の名も見えて、甚だ賑かである。先づ谷崎の文を紹介しよう。

時代と聖人（三等賞。日本橋、谷崎潤一郎）

基督は神として、釋迦は佛として、教を立てたり、マホメット、ルートル、亦神を信じ、支那の古聖堯舜の如き者、亦天帝の命を信ず、彼等の自信は極めて鞏固也、彼等は神を信ずるが故に能く大膽也、マホメットの英斷、ルートルの勇猛、一に之より出づ。

才子強者が超凡の力を有するは、彼等に於ける獨特の天稟也、他人得て之を學ばむとするも、到底彼等に及ぶべくも非ず、至誠の淵源は人情に在り、既に人情といふ、人誰かこれなからむや。故に至誠の人たるは、如何なる人に向つても希望し得べき也。

聖人とは多く明毅朴訥にして涙脆き田舎人種が、其の誠情の激しく一方に迸出したるに過ぎざる者也。マホメットを見ずや、彼が至誠の心を起すに至れる以前は、平凡の人物と毫も異なることなきを見るなり。而も一旦物に感じて世界成徳の人類を救濟せむとするの至誠を起すや、奮然として劍を按じて起ち、無道の惡人を誅して教を廣む、何故に彼は教に従順ならざる徒に加ふるに劍を以てせし乎、之を不仁殘酷也といふ者は、俱に語るに足らず、之を威嚇手段なりとなす者は、俱に議すべからず。蓋、彼の自信は鞏固也、彼の至誠や激烈也、故に彼は自己の



教を以て、當に人生の大路也と確信し、之に逆ぶ者は人類の敵と認めて誅戮したる也、不仁殘酷、威嚇手段、言何ぞ容易なるや。

マルチンルーテルを見よ、彼は始め、頗怯懦にして正直なる人物なりき、其人の戶外に立ちて樂を奏する時、内より錢を惠與する者あれば、忽赤面して逃げ去りぬ。而も至誠の心中に燃ゆるや、猛然として百難を排して奮起し、如何なる者に遭遇するも、彼が不動の精神は磐石の如くにして一步も退く事なかりき。

釋迦も亦其始めは頗多情多恨の人なりしが如し、知るべし。時代は能く此の種の人物をして聖人化せしむることを、舊教跋扈してルーテル出で、婆羅門蔓延して悉達現れ、春秋徳亂れて仲尼生ず、若し彼等をして古今時をかへ、東西所を異にせしめば、必ずや其人物も同じかららむ。若し夫れ更に一步を進めて、今より幾百年の後、完全無缺なる社會が成れるの時に、彼等をして生出せしめば、ルーテルは遂にルーテルならず、悉達も遂に悉達ならず、仲尼は遂に仲尼ならずして終らむのみ。予輩をして更に以上を概括せる一語を發せしめよ、曰く、聖人は時代の産物也。

當時「少年世界」の寄書欄は、武田篤塘の主管に屬したが、これに對して、次の如き評語を下してゐる。「聖人は時代の産物なりと論じて此篇に及ぶ、而も時代の産物は是獨り聖人のみならむや

英雄も豪傑も凡て是時代の産物にして、痴愚狂盜も亦時代の産物なり、只其人の精神及其人の意氣に依つて賢と不肖とを別つ、聖人は時代の産物に相違なきも、聖人は亦時代の産物に非ずして、時代の精神を代表せるものなり、いつの世に生れても聖者たらずんば聖人の實即ち空し、作者の再考を要す」と。

而も、谷崎は、文章のみならず、新體詩にも長じ、次の如き一篇が賞外として掲載せられた。こは「海」といふ課題に應じて選に入れるものである。

塵の浮世を通り來て。人の涙やはるあきの。恨をのせていさゝ川。流れ集るわだつみよ。行きかふ船を破りては。いくその人を屠りけむ。いくさの艦を沈めては。ものゝふ多く呑みにけむ。水はにどれり長へに。あらなみ怒る印度洋。魂は迷へりとはに。風腥きサンチアゴ。水底深くひそむらむ。もゝちの恨罪業の。心はもえて海の面は。暗き嵐を起しけり。狂へよ狂へ海よ海。有情の波の聲あげて。天地をとさすねばたまの。夜の黒幕たるゝ間に。

東の空のむらさきの。雲より遠きはるかにて。聖き光のもえ初めつ。渾沌眠りさむる時。海よ無想の波湛へ。水底深くひそむなる。恨の魂をなぐさめて。嵐をとほに静めよや。

あら恐しのわだつみよ。荒磯すぎき夕暮に、さわめく波の間より。魔神の影を君見ずや。あら心地よの海原よ。波蒼渺の朝なぎに。遠くのどけく聲あげて。よせ來る潮の琴をきかずや。



次に伯耆の入澤宗壽は、流石に教育學を修めし人だけに、既に少年の頃より、此の方面に關心を有てるもの、如く、普通文欄に菅公の一篇を寄せて、其の生涯の浮沈を細叙して居る。

菅公（伯耆。入澤宗壽）

一榮一落是春秋、まこと浮世の毀譽褒貶は如何ともすべからず、獨り國事のために赤心を捧げ、忠誠を竭せし菅公も、一朝佞者の讒する所となりては、空しく西州の睡に一身を落すに至れるが如き、誠に學生の一大恨事なり。

國亂れて顯れし忠臣は、古今これを少しとせず。そのよく無事太平の世に出でて身を起し、大事を成せし者に至りては如何。これを以て見れば、菅公は誠に理想の大人物也、歴史上の大偉人也、阿衡事件は公の出身をして早からしめき。公の基經に書を贈りて利害を論ぜしは、これ公の用ふべき人たることを宇多帝に知られし始めなりき。

かくて前後九年、累進遂に右大臣となり、明斷果決、政を決すること圓球を峻坂に轉するが如く、而して諄々政を勤め、克く輔弼の賢相たるの任を盡しぬ。然るに儒家門戸の軋轢、官途の競進は、遂に公をして流離轉軻の止む能はざらしめぬ。而して蜜よりも甘く、劍よりも鋭き讒者の舌は、うたてや公をして貶竄の憂に陥らしめぬ。公は遂に「流れ行く」の一歌を残して、遠く筑紫の庵室に閉ぢ籠られぬ。

凡物壯なれば衰へ、月満つれば忽ち虧く、公曷ぞ此邊の消息を知らざらんや。然れども公の赤誠背て一身の安を謀るに迫なく、唯鋭意挺身、天恩の優渥に答へんと欲せし也。

然るに、人生は何所までも無常にして、浮世は果敢なき事水泡の如し。月さやかにして影うすき所、御衣を拜して君恩に咽びし絶世の忠臣をして、天は果敢なく邊陲の土と化せしめぬ。然れども其の忠誠と潔白とは、多くの人をして追慕措く能はざらしめ、其の功績は後人のたゞふる所也。

宜なる哉、朝廷よりは正一位を贈られ、天満天神は到る處にこれを祀らざるなし。

「海ならず、たゞへる水の底までも、清き心は月ぞ照らさむ」、宜なり、千歳の今日、公の懿徳を表彰し、公の威靈を慰めんとして、一千年祭の行はれたるや。

あゝ、天満社頭の梅花は、公の偉名と共に永久に盡きじ。その色の清きは、以て公の潔白に譬ふべく、その香の芳しきは、以て公の芳名に比すべし。あゝ偉なる哉。

まことに堂々たる史論といふべきである。これには選者の評語を缺けど、一點の瑕疵なき妙文章といふに憚らない。然るに翌第九卷に入ると共に、「少年世界」は斷然其の程度を引下げ、随つて少年文の如きも、従来と其の趣を異にし、主として言文一致を採用した。次に示すは、大澤章（九州帝大教授、法學博士）と、谷崎精二（前出潤一郎の弟にて、早大教授、作家）の二篇を取つて、其の一斑



を示すこととする。

散歩（二等賞。下谷、大澤章）

一時頃家を出た、小川に沿つた道を西に、上野の森を左に見ながら、程なく春の野の青布を敷きつめたやうな處に來た。此所は田端村に近い野である。後には東の森が高く屹立して天は高く、實に氣の晴々した日和である。田端の停車場の見える小川の傍の芝原に座を占め、持つて來た春若丸を出して読み始めた。

丁度妙然道人庵の場の處まで読んで來た時、何だか傍でワア／＼泣く聲がするので、振向いてみると、八歳ばかりの男子が、片手に下駄を持ち、ぬれ鼠のやうな着物を着て、四十位の親らしい女に小言をいはれながら、此方へ歩いて來る。僕は本を置いて、ちつと見て居ると、女は荒々しく其子を打つて、泣くのも構はない様子、彼の子は屹度小川に落ちて叱られてるのだから、馬鹿な親も有れば有るものだと、又本を取つて右の方を見ると、青々した菜の畑の間から、黄色をした菜の花が、處々に見え、又雑木の間から薄い烟が立つてゐて、何ともいはれない景色だ、併し今日の散歩は妙な散歩だつたと後で思つた。

少年談話會（三等賞。神田、谷崎精二）

少年談話會!! それは僕の發起で、明治卅四年に創立したので、今では會員が十名許り、會長

は不肯僕である。時は四月五日、僕等は本會創立滿三周年の祝として、會員山口君の家で、午後一時から談話會を開く事にした。僕は會長だけに、流石に忙がしかつたが、十一時頃までに残らず準備が整つた。

やがて一時になると、聴衆はぞろ／＼やつて來たが、大概是同窓の友で、只一人石川先生の來られたのは、僕等の非常に名譽とするところである。さて各座に着くと、僕が第一に登壇し、本會の沿革を大略述べて後、「博愛」といふ題で、動物の虐待禁止を述べた。次で今度は橋本君が壇に現れ、「東洋の風雲」と云ふ題で、得意の快辯を振つた。後に井上君の「印度の今昔」だの、有村君の「偉人の逸話」だの、加藤君の「蒸汽の力」だの、原君の「日蓮の人物」だの種あつたが、何れも大喝采であつた。

尙餘興には、山口君の劍舞と、井上君の手風琴があつたが、やがて番組も盡きた頃、石川先生は起立して、僕等の成績を述べられた。終つて僕等は少年談話會萬歳を三呼しつゝ、目出度く散會した。會場を出ると日は已に西に傾いてゐた。

以上列記せる數篇に就いて見るに、最後の二篇に至つて、初めて言文一致體の用ゐられしことが知られ、こゝに從來の漢文體、國文體、若しくは雅俗折衷體等が、殆ど何れも其の跡を斷つことゝなつた。而もこれは少年文の一大進歩と見なければならぬ。



### 第十九節 「少年界」其他

小學校用の教科書出版を以て、全国的に知られる金港堂は、其の店舗が、本町通を距て、博文館と相對し、各々出版方針を異にして、何等の競争をも見なかつたが、已にして明治三十五年の新春を期し、金港堂は突如として方向を一變し、各種の大衆向雜誌と、一般圖書の大量出版に、過半の力を傾けることゝなつた。

即ち雜誌には、文藝界、青年界、軍事界、教育界、婦人界をはじめ、「少年界」「少女界」等あらゆる階層を目標とし、すべて界の一字を標榜して、新銳の意氣高く名乗を揚げ、正に雜誌界に於ける一大偉觀を露呈させた。

この中にて、「少年界」の目ざす所は、「少年世界」を對照とし、これと同一の軌道を辿るらしく思はれ、「少女界」は主として小學校、及び女學校初級の讀者を迎へんとするものゝ如く、而も少女専門の雜誌の新たに起り來つたのは、實にこの「少女界」を以て嚆矢とすべく、此の意味に於て「少女界」の創刊は、亦閑却し難いものがあつた。

茲に先づ「少年界」が、如何なる形容を具備したるかを検討しなければなるまい。従來我國の一般少年雜誌の外装は、かの臨時増刊の類は別として、未だ其の平常號に 多色刷石



(卷二第) 紙表の界年少

大の多色刷口繪と、六丁の寫眞版口繪とを以て外觀の美を發揮し、本文の紙數亦百二十八頁を算し、數十版の木版挿畫を點綴させ、新銳の意氣物凄く同種雜誌を凌駕し壓倒せんと試み、就中「少年世界」にとりては、眞に一大敵國の出現を想はせるものがあつた。

當時金港堂の少年少女編輯部には、森桂園、福田琴月、神谷鶴伴、三島霜川、笠間醉雨、米光關月等が、轡を並べて筆陣を張つてゐた。桂園は本名孫一郎、夙に高等師範を出でて金港堂の編輯に

「少年界」其他



携り、小學教科書の編纂に特殊の技能を發揮せる人にて、また鶴伴、醉雨、關月、霜川等は、何れも幸田露伴門下の錚々たる人々、更に又挿畫の方面を見れば、殆ど梶田半古の社中によつて獨占せられしやの感があつた。

さて「少年界」は、其の欄を分ちて、少年界（調話）、譚海、學問、雜錄、なぐさみ、時事、通信、文林等とせるも、大體より見て、學問的記述を輕視し、主力を文學、娛樂の方面に於けるものゝ如く、何れの頁を繰るも、やゝ散漫の觀あるは争ひ難き所であつた。また文林（少年投書）は、陸軍教授友田宜剛が選評に當り、俳句は大羽世外が選者となつてゐる。この大羽世外は誰あらう。永洗社中の小峰大羽（舊名若谷）に外ならぬ。大羽は後年全く畫道より遠ざかり、専ら俳諧師として其の名を知られた。

これを惟ふに、「少年界」も、また「少女界」も、一流名家の寄稿を仰ぐといふよりも、寧ろ一般世間より、隠れたる文藝家を物色し、若しくはこれが發見に努めたるやに思はれる。勿論見方によつては、これも一種の手段、且特色と云ひ得ぬこともあるまい。されば亦時に隨つて、次の如き募集文を掲げて、一般讀者の注意を促したものである。

少年界及び少女界に登載すべき爲に、左の各欄に寄稿を求む。少年界（少年少女修養談の類三頁以下）、譚海（少年少女お伽談の類八頁以下）、學問（理科、地理、歴史の類五頁以下）、雜錄（上記以

外の短篇雜文、新體詩等五頁以下）、なぐさみ（落語、一口噺、なぞ）、畫さがし、ボンチ畫、其他少年遊戯の畫）。右各原稿は、審査の上、雜誌に登載せるもの限り、一頁につき二圓以下の範圍内にて贈金をなす。寄送にかゝる原稿はすべて返却せず、原稿一枚の文字數は二十行二十字詰、即ち一枚四百字として認むべし。原稿はすべて明瞭に認め、總振り假名とすべし。名所古跡風俗等の寫眞を寄贈あり度し。寄稿者は原稿の始めに住所姓名、及び原稿の出所（何本に依る何々より改作、又は自作等）を記し、金港堂編輯部少年界係に宛て、送られ度し。

と呼びかけて居る。此の宣傳文に依つて見れば、全誌の各欄に亘りて、廣く一般より、原稿を募集したことが知られ、延いては其の各欄の記載事項にも、いはゆる無名作家のものが現れ、著しく新面目を發揮したるに庶幾きも、退いて考ふる時は、果して其の審査の嚴密なりしや否や、就中學問上の記事に就いては、甚だ疑はしきものあり、爲めに間々杜撰にして無責任なる説明さへ散見せられ、其の外形の比較的美麗なるに反して、内容のこれに伴はざる恨みありしは、掩ひ難き事實であつた。

殊に少年投書中、最も重要な位置を占むる「少年通信」を見るに、約十餘頁を六號活字に填めながら、其の取捨選擇には、甚だしき不用意の點が指摘せられる。これ恐らくは何等甄別を下すことなく、只得るに委せて採録せるものゝ如く、或はヤイ記者の大馬鹿者とか、又は記者よよく承れと



か等、罵詈雑言を事として甚だ不快なる言辭を弄し、濫に記者の人格を侮蔑し、又は長幼の序を紊し、時には記事の内容にすら立到つて嘲笑せしめたる等、寛宏大度と言はんよりも、寧ろ其の方針を誤れるものと云ふべく、而も事の茲に至れる所以は、只豫定の紙数を満たして、發行の期日に遅れんとする一念は、通信文の善惡正邪を識別せず、手に委せてこれを収録せるに因るものと想はれ、編輯事務者の怠慢と放心知るべしである。

然るに斯る一種厭ふべき弊風は、後年勢力相齊しき諸雑誌の、亂立混淆したる時代には、往々にして見受けたる所にて、一にも二にも、讀者の機嫌氣味をとりて、偏に賣らん哉の一事にのみ専念し、却つて純眞無垢の少年を驅つてこれに倣はしめ、遂に上下の序を紊亂せしめたる如きは、最も苦々しき現象といはざるを得ない。

そは兎もあれ、「少年界」も、「少女界」も、共に指導的、若しくは啓發的精神氣魄に缺け、只雜誌としての外形を保つに過ぎぬものあり、即ちこれを一定の方針下に立脚せる「少年世界」に比すれば、甚だしき高下の別あり、かくして其の最初一敵國の出現を豫想せしめたる「少年界」も、時を経るまゝに漸く凋落の色濃く、已にして三十六年秋季に至り、突如として卷き起されたる教科書疑獄事件により、更には數月を出でずして日露の開戦となり、いよ／＼其の存在の影薄きを覺えしめたのである。

なほ金港堂にては、「少年界」「少女界」を宣傳機關として、各種各様の幼少年書類出版に進出し非常なる超速力を以て、毎月十數冊づつ矢繼早に大量發行を續け、殆ど送迎に遑なき觀を呈した。而もこれ等の書籍は、大部分菊半截の袖珍型を以て本位とし、一冊の分量約三十餘頁、一部の價三錢を標準とした。

又これが作家は、有名無名とり／＼にて、中には一般より募集したる原稿も、亦相當多量に含まれ、隨つて其の種類の多きに拘らず、取り立て、評すべき價値あるものは、極めて稀なるやに見られた。只この中にて、森桂園、福田琴月合著の、「お伽斬十二月」は、群鷄中の一鶴に比すべきであらうか、試みに其の目次を掲ぐれば、

- 一月。 兎 と 鏡餅 (琴月作、半古畫)
- 二月。 鶯 と 鷹 (桂園作、國峰畫)
- 三月。 人形天王 (琴月作、年峰畫)
- 四月。 お釋迦様 (桂園作、永洗畫)
- 五月。 五月 鯉 (琴月作、大羽畫)
- 六月。 菖蒲 と 蛙 (桂園作、秋香畫)
- 七月。 螢 合 戦 (琴月作、清方畫)

「少年界」其の他



- 八月。 とんぼ太郎 (桂園作、年方畫)
- 九月。 柿栗三郎 (琴月作、洗耳畫)
- 十月。 大菊小菊 (桂園作、輝方畫)
- 十一月。 紅葉と鬼 (琴月作、古唄畫)
- 十二月。 雪達磨 (桂園作、春汀畫)

以上の各篇を一瞥するに、いはゆる月並のお伽噺にして、さして奇想も妙案も新味も揃し得ないのであるが、只各冊其の執筆の畫家を異にし、多色刷華麗なる石版表紙もて美々しく飾り、且一部十二冊を帙入として、而も定價金四拾錢(分冊三錢)にて賣出したるは、家庭用の好著として推奨するに足るものと想はれた。

## 第六編 一新時代

### 第一節 「少年世界」第九卷

明治三十五年十一月、豫て外遊中の巖谷小波は、二ヶ年の任期満了して、恙なく獨逸より歸朝し直ちに博文館編輯部に復歸すると共に、銳意「少年世界」の改善進歩を企てた。されば博文館も亦小波が在外中に取得したる新智識を活用して、大いに其の手腕を發揮せしめ、こゝに「少年世界」は、劃期的の新局面を露呈することゝなつた。

即ち、明治卅六年は、恰も「少年世界」第九卷に相當し、何等かの形式に依つて、これが改良の必要を認めらるゝ時期であつた。其の二色刷表紙と、寫真版口繪數葉との舊態に甘んじ、表紙と口繪とに美觀を縦横ならしむる「少年界」に對抗しつゝ、密かに時節の到來を待てりしもの、正にこれ蟄龍の雲霧に會したりと云はんか、茲に猛然たる反撥力を發揮し、創刊後はじめに石版多色刷の表紙と、石版二頁大極彩色口繪(共に京橋泰錦堂の製版印刷)とを加へて、著しく其の面目を一新したのである。



然るに此の表紙畫は、當時最新流行のアー・ル・ヌーヴ・オー・式に摸して、自由なる曲線を驅使し、恰も卵の年に因みて、兎に扮せる少年の半身を主とし、極めて華麗且可憐の上品なる圖柄を用ゐ、また彩色口繪は、宮中月次御歌會の御題に材を求め、一ケ年に亘りて、専ら武内桂舟の手腕に俟つたのである。



少年世界第九卷表紙(多色刷)

曩に「小國民」の第三年度に行はれしことあるも、こは主として西洋木版の印刷上、其の固有の性能を完全ならしめ、より以上精美を期せんとする爲であつた。

更に本文を見れば、先づ卷頭の十六頁を別刷二色とし、これに小波の新作お伽噺を掲載すると共に、桂舟の挿畫をも又其の數を多くすると共に、筆法にも注意を加へ、以て清新華麗の趣を湛へたのである。蓋し卷頭に上等紙を使用せる例は

これに反して、「少年世界」の卷頭は、挿畫と文字と、各其の色調を異にし、以て表紙口繪以外に特殊の光彩を放たしめんとするにあり、隨つて其の効果の大なることは、亦想像に餘るものあるを認めしめ、後年に至りて、多くの幼少年雜誌はいふまでもなく、低級なる大衆雜誌さへ相率ひて此の形式を採り、卷頭の十六頁、若しくは三十二頁に、二色刷漫畫、小話の類を掲げて、讀者の歡心を求めしことは、世人の熟知する所である。

なほ、九年度の「少年世界」は、これを一兩年前の、水蔭時代のそれに比して、極度に程度を引下げ、且編輯上の分擔に於ても、小波主宰の下に、幼年部(木村小舟)、少女部(武田雪華)、少年部(兩者協力)とし、一糸亂れぬ統轄に依りて、事務の推進に力め、且従前の欄別を廢して自由採録に還元し、趣味の助長に力を注いだ。而も當時の「少年世界」は、一方に於て著しく高踏的態度を以て臨み、苟くも野卑に流れ、低劣に墮する惡弊を避けると共に、別に「學事顧問」の一欄を設けて芳賀文學士(矢一)、西理學士(芳菲山人)、竹貫(登代多)斐文等に依囑し、讀者の諮問に應じ、學事上の疑義に解釋を與ふる機關とし、「少年通信」の如きも、出來得る限り明答を與へ、以て兩者の融和渾一を圖ることを旨とし、飽くまで指導的地位を堅守すると同時に、品位の向上を以て主眼としたのである。

今方面を轉じて、試みに其の考へ物解答欄に於ける、讀者の人名を検するに、赤坂黒田長禮(侯



醫學博士)、京橋岡田道一(醫學博士)、本郷丸尾彰三郎(文部省國寶鑑査官)、下谷大澤章(九大教授法學博士)等が先づ挙げられる。即ちこれを仔細に點檢せんか、更に大人物の伏在するものを見るに相違なく、當時の「少年世界」がいかなる階層の少年に親しまれしかは、これ等二三の人名に依つても、略想像し得られるであらう。



(筆帆春) 紙表の王大陸海

少年傳」を以てし、各篇共に相當の好評を博した。

右のうち、小波の「春若丸」は、これが表紙口繪(寫眞版八葉)共、久保田米齋(米徳の長子)の筆

また、本年度の定期増刊は、従來の形式とは全く別の趣向に依り、四六判の單行書籍に摸して、一冊讀切の小冊子たらしめ、小波の「春若丸」、記者合作の「海陸大王」、江見水蔭の「暑中大探檢」、大町桂月の「日本

に成り、頗る斬新の意匠を凝らせるもの、蓋し米齋は特異の服飾研究家にて、曩に佛國に留學し、偶々小波と歸朝の船を同うしたる人、されば「春若丸」の表紙も、かのヌーヴォー式に依り、又其の標題の文字も、殊更に勘亭流を以て現すなど、絶対に類型を見難きものであつた。尤も普通雜誌の増刊に、殊更其の型式を異にする一事が、果して一般讀者の嗜好に投するや否や、此の點多少の疑惧なきを得ぬが、たゞ四五年前少國民の増刊「富士山奇觀」に此の形態を用ゐたるやに記憶する——兎も角も本年度の増刊企畫は、目新しき試みとして、相當の注意を牽けることは、亦疑ふの餘地あるまじ。

恰も今春、記者と一部讀者との懇親を増進すべき目的の下に、誌上に「少年博物學會」を設け、日を期して郊外に遠足を試み、草花昆蟲石器等の採集會を催せることも、亦かなりの效果ありしやに想はれる。即ち第一回大崎蛇窪方面、第二回王子飛鳥山方面、第三回大森川崎方面と、主として近郊に出遊して、記者と讀者との親和を圖り、直接に意見を聞き、希望を語り合ふこと、かの霞城山人の「理科春秋」の理想を實地に顯現せるものであつた。

次に「川崎紀行」の一節を掲げ、當時の參加者の純真なる行動を追懷しよう。

第三回採集會川崎方面(六月十四日)

上略、やがて第一中學の小島君、第三中學の中村君が來た。二人共今度初めであるから、予は



今日の豫定を傳へてみると、其所へ學習院の岡田(忠一)、大澤(章)、二君が、相馬(猛嵐)、野村、織田(信恒)の諸君と共に來り會し、第三中學の龜井君は、碓、柿沼、石川、久保田(萬太郎)の諸子を率ゐて來り會し、芝正則の岩見(鐵作)君は、園師(尙武)君を伴ひ來り、東京博物學會の早川(龍介)君もやつて來た、こゝでいよいよ八時發の横濱行列車を利用し、大森までの切符を求めることゝした。

日曜日の好晴に恵まれて、城南の郊野に赴く學生多く、三脚、胴亂、畫板など、思ひ／＼に、半日を新緑の蔭に消さんとする人々である。

横濱行列車は、聯結せる客車の數少く、吾々一行は座席を占め難く、多くは甲板の鐵柵に身を託して、芝浦の風光を満喫した。かくて品川にては、下車客も大分あつたから、漸く腰を下すことを得たが、何を思ふ間もなく、列車は既に八景園の傍に着いた。

停車場附近の柵には、枳殻の垣が、程よく芽を出して、風蝶の亂舞するのを見たが、其多くは先頭の學習院隊の手に歸した。この學習院部隊は、いつも先頭に立ち、三中隊は中堅となり、其他の者は殿軍となつて、相當の間隔を置いて進んだから、其爲に獲物は却つて多く、各自の採集箱には、可なりの標本が集つたらしい。

八景園西南の丘では、ひかけ蝶、棲黑黃蝶、緋緘蝶など、相當の成果が擧がり、何れもこゝを

先途と活躍した後、更に道を異にしつゝ、本門寺の境内を集合地點として、一旦分散したものの、此の附近の地理に不案内とて、道なき道を歩き廻り、辛うじて集合地點に到着したのは、却つて殿軍の部隊であつた。(中略)

かくて學習院隊は、再び先頭に立ち、方面を換へて雜木林を漁り、他は本街道を進んだが、其先頭がごまだら蝶を追撃して他の道に入込み、後者も亦尾して其道に従つたから、矢口方面とは正反對に、約十五六町を進み、漸くそれと氣づいて、農婦に問へば、新田様の御社は半里といはれ、流石に一同疲労を感じたが、岩見君が小紫蝶を捕つた爲、皆々これに勵まされて、更に勇氣を奮ひ起した。

石川君は第二回の時も、赤蛙を毒瓶に入れ、酒精漬にすると云つて得意がつてゐた。今度も又草原から蜥蜴を追出して、荐りに網に収めようとしたが、遂に其影を逸してしまつた。

こゝで學習院隊の相馬、岡田、野村、織田の諸君も來集し、何れも例の雜木林での緋緘蝶の多獲を誇示してゐた。

路傍に年古る石地藏が立つてゐる。かねて考古宗に歸依する岡田君は、しきりに涎を流し、せめて首だけでもと、野村、相馬の二子と共に、力を協せて大石を亂投したが、うんともかんとも碎けなかつた云々。(下略)



## 第二節 「お伽芝居」に就て

明治二十三年の交、少年教育に熱心なる中川霞城山人は、豫てより演劇改良の必要を痛感し、特に少年の観覽に供すべき、純真にして興味深き脚本の出現を希望するのあまり、遂に進んで自ら「自由の一箭」を試作し、これを「少年文武」の誌上に掲げて、天下識者の一顧を促せしことは前卷既にこれを略叙したが、而もこれより後霞城山人は、更に其の方面を轉じて、専ら滑稽を主とせる「少年狂言」の著作に没頭し、張弛館より「飢舞と狂言」を、又學齡館より「太郎冠者」(少年狂言廿五番)を出だせる外、「少年園」「小國民」等にも、絶えず新作を發表して、斯道の發達に貢獻するところあつた。

一方、漣山人も亦これに關心を寄せ、かの幼年玉手箱の第一編に、「新年狂言春駒」を草して、いはゆる狂言の流行を將來すべく目ざしたのであるが、芝居といひ狂言といひ、これ等は實演に依つて初めて効果を奏するものにて、單に讀み物として取扱はるべき場合には、語句其の他の關係にてお伽噺の如き妙趣を味ひ難く、恰もかの童謡が、流暢なる曲譜を俟らて、初めて其の妙諦を發揮すると同様に、分けても狂言の措辭は、一種獨特のものではあり、多數讀者の共感を求め難く、隨つて此の類の作品は、雜誌の記事としても、又は單行の書籍としても、其の成功を收むるに至らなかつたものと思はれる。

然るに小波は思ふ所ありて、「少年世界」第九卷の第一定期増刊の一冊を盡し、「お伽芝居春若丸」に填め、大いに天下識者の注意を促し、いはゆる「お伽芝居」なるものゝ認識を深からしめた。

さて、新作「春若丸」は、小波の數多き芝居作品中、最も苦心せる長篇にて、且其の構想の雄大にして局面の廣汎なると、變化の至妙なるとは、未だ會て他に例を求め得ぬ者であつた。而もこれは獨逸ハルツ地方の口碑傳説に材を取りしものと聞けど、些の外國臭味も認められず、渾然たる純日本風の上品なる芝居にして、時代を足利期に求め、場所を京都に取り、登場人物には、上流貴族の幼兒を中心として、兩親、家族、婢女、道人、兇賊、狂女等を集め、其の地域をば、宇治三室戸牛尾山等、主として南山城方面の廣範圍に亘つてゐる。

謂ふに作者は、曩に京都日出社に在りし頃(明治二十六年夏)、連日専ら宇治、久世郡地方の名勝、古跡、古社寺等を探り、或は土地の古老に質し、古記録に徴しなどして、「都の巽」なる長篇の探勝記を草し、これを日出新聞の呼び物として多大の好評を博した。即ち此の地域に詳しき作者は、縦横に風土の自然と人爲とを織り交せて、巧みに「春若丸」の場面に活用したのである。

併しながら「春若丸」は、これを實際に演出すべく、あまりにも雄大、且複雑にして、當代の劇壇人の手腕にては、到底消化し得べくもなく、爲めに同年秋期に至り、川上晋次郎一派の希望に依



りて、小波は別に世界お伽噺の中、最も適當と思はれる「狐の裁判」と、「浮かれ胡弓」との二篇を擇び、新たにこれを脚色して、初めて本郷座に上演せしめ、満都の子女の喝采を博した。これ即ち我國に於ける「お伽芝居」實演の嚆矢である。

はじめ川上晋次郎は、歐洲巡遊中、屢々各地にお伽芝居を見物し、これを我國にも移植して、少年用演劇に一生面を拓かんと希望を懷き、歸朝の後小波の教示を乞うて、遂によく成功を收むるに至つた。なほ本郷座に於ける第一回の公演は川上の獅子王、貞奴の狐、藤澤淺二郎の羊など、何れも堂に入り、お伽芝居の前途は亦頗る洋々たるものあるを感ぜしめた。

然るに翌三十七年には、日露戦争に依つて社會情勢も亦忽ち一變し、多くは戦争關係の映畫等——映畫とはいへ、極めて幼稚なるものにて、例へば、碇泊中の汽船の煙突より煤煙の立騰る光景とか、或は又軍隊輸送列車の進行等、何れも二三分を出でざる短卷のみであつた——に壓倒せられ、平和色に充てるお伽芝居は、漸く凋落の色を示し來つた。而もたゞ此の間、市川崑升一派が、小波の新作「櫻太郎」を上演して、清純の氣分を漂はせたる一事は、亦忘るべきであるまい。

これに就いて、「少年世界」十一卷四號には、「崑升の櫻太郎」と題して、寫眞版を挿み、左の如くに紹介した。

此所に掲げたのは、本年一月（三十八年）、東京の明治座に於て演ぜられた、櫻太郎下篇の中、

市川崑升の演じた櫻太郎の寫眞であります。（寫眞省略）

崑升と云ふのは、去年病死した名優左團次の子息で、まだ二十歳を餘り越して居ない青年俳優であります。この櫻太郎を演ずるには、却つて頗る適當でありました。

此の圖は、序幕刀鍛冶の場で、軍神から授かつた鐵塊を、櫻太郎が自分で打つて、蜻蛉丸と云ふ、立派な日本刀を拵へる所です。

只見る、一段高い鍛冶壇に、櫻太郎は座を構へて、眞赤に熱した鐵塊に、カーンと一打ち槌を當てますと、途端に舞臺が眞暗に成り、恐しい雷の音を合圖に、忽然として軍神が現はれ、トントンカン、トントンカんと、合槌を打つ度に、この鐵塊からのみ、ピカリ／＼と御光のさした所は、満場大喝采でありました。

序ながら此の寫眞は、芝居の事に明るい、川尻清潭と云ふ人が、態々撮影して本誌に寄せられたものであります云々。

と報じ、其の記事の餘白に、「人は武士、お伽は櫻太郎かな」の一句を掲げてゐる。勿論この記事は、小波自らの執筆に依るものであつた。

其の後、明治四十一年六月、「世界お伽噺」百篇完成の祝賀を記念として、神田東京座に大會の催されし時、市川糸八母子、石川木舟、天野雉彦、田村西男其の他の有志によりて、「鬼だまし」「朝

「お伽芝居」に就て



「星夕星」——共に世界お伽噺中に取材せるもの——の實演せられしは、蓋しお伽芝居の掉尾を飾れる者と云ふべきであらう。尤も有樂座にては、其の後も時々これを演じ、一方川上貞奴は、音次郎の歿後、自ら川上兒童劇壇なる者を組織して、永く此の方面に雄視した。

由來お伽芝居は、他の一般觀覽物と異なり、大掛りの設備を要し、隨つてこれが入場料も、映畫、パノラマ、曲馬團等に較べて著しく不廉の傾きありし爲めか、次第に實演の見るべきもの寥寥稀なるに至つたが、獨り小波は、依然として其の創作を怠らず、和洋古今に材を求めて、幾多の佳篇傑作を貽したる一事は、よし其の大部分が上演を見ざりしにせよ、其の功績は、永く没却すべきものではあるまい。

### 第三節 「明治お伽噺」の出版

小波山人が、過去十年間に亘つて、「少年世界」の巻頭に掲げ來りし創作お伽噺のうち、其の主な短篇は、既に「日本昔噺」、及び「日本お伽噺」の附録として、それ／＼各冊に配當、再掲載せられたが、猶ほ長篇のすべてと、短篇の一部分とは、其のまゝに残されあるので、これを集めて新たに一叢書を編み、纏めて一聯の珠玉たらしめんが爲めに企畫を樹てたのが、即ち「明治お伽噺」であつた。されば著者は、この叢書の發行に當りて、次の如く其の巻首に序してゐる。

速いもので、日本昔噺の第一編の出たのわ、やがて十年前になりました。それから日本お伽噺、世界お伽噺と、内外の子供の讀物わ、隨分精出して御紹介しました。



(桂舟) 紙表の噺お伽明

其間また「少年世界」にわ、いつも自分で作つたものを、必ず巻頭に載せることにして、それも今年で足掛け九年目、その數も亦隨分あります。尤もその中にわ、昔噺やお伽噺の附録として已に出したのものもありますが、まだ其他に澤山ありますのを、あのまゝにして置くのわ、何となく不本意でありますから、此度新たに校訂を加え、

別に小冊子として、順々に發行する事と成つたのであります。翻つて今日の文學界を見ますに、以前わまるで別物の様にされて、誰も相手にしてくれなかつ



たこのお伽噺なるものが、この二年程前から、大分世間の目を引く様になり、随つて此種の出版物も、亦大分見える様になりました。是れ私の最も愉快に思う所、否、我日本の少年諸君の爲めに、大いに賀すべき事と思ひます。

此明治お伽噺の發行も、實は此機に乗じたと云われても、決して差支わないので、即ち私の希望を云えば、今此の世間の目が、大分此方へ向つて來た所で、更に今一度見直して貰つて、然るべき批評を乞い度いのであります。發行の順序わ、「少年世界」に掲載した順序——即ち私の書いた順序に依つて、これを出すことにしました。

若し世間に好事の人があつて、私のお伽噺に就いての筆法や、趣向の變遷をば、一つ調べて見ようと云うならば、先ずそのつもりで讀んで貰いましょう。で、御遠慮なくお小言を頂いたら實に私わ嬉しいので、私わ又それによつて、大いに學ぶ所のある事を信じ、更に此の道を究め度いと思うのです。

以上、至極平易の筆法を用ゐて、率直に理想と希望とを陳べてゐる。猶ほ此の叢書をはじめ、三十六年一月以降に於ける小波の作品には、必ず一種特異のわ假名を使用したか、これに關して小波は、其の自傳の中にも、次の如くに所思を開陳してゐる。

かうして子供相手の讀み物に、専ら筆をとつて居ると、第一に氣のつくのは、在來の字音假名遣の、頗る煩はしい事である。

それにまた二年の間、外國で外人に教へたりしたので、一層改良の必要を感じたので、遂に自分で思ひきつて、子供に對する讀み物には、一切在來の規則を顧みず、専ら發音通りの假名遣を用ひ、これを自らお伽假名と稱してゐた。

すると又一方、上田、芳賀、大槻などいふ先覺の學者達があつて、はやく文部省の一角を占め、國語改良を高調してゐたので、遂には國語讀本の改修にまで及ぼし、芳賀博士の推薦で、私も圖書課の囑託となり、教科書編纂の事に與つた。

それは私の使つてゐる通りの假名で、新たに讀本を書き直せといふのだ。それは明治四十年頃丁度西園寺公の總理の下に、牧野子が文部大臣、澤柳君が次官だつた時である。

當時の圖書課には、吉岡郷甫君や、高野辰之君が居て、共にお伽噺にも諒解のあつた人、また保科孝一君は當初からの改良論者、大いに氣がそろつて、仕事を進めたものだ。

ところが約二年間に、殆ど八分以上出來上つた所で、急轉直下、内閣更迭といふ打撃の下に、折角の事業も逆轉して、今まで書いた新假名遣の讀本は、忽ち反古にまるめられ、やはり舊式の規則の下に、別に書き上げることになつたので、私はそのまま引退つてしまつた云々。

かう云ふ次第で、所謂「わ假名」は遂に採用せられずして終つたものゝ、小波は堅く心に決する



所あり最後までこれを踏襲して變ることなく、以て假名遣の確立に精進したのである。

そは兎もあれ、「明治お伽噺」は、一部十二冊、一冊の紙數約百三十頁内外、全部四號活字を用ゐ左の如き目次に依つて編成せられた。

第一編。お伽十番（お年玉等十種の短篇を收む）

第二編。お伽三幅對（命の間屋、附木船紀行、風船玉旅行を收む）

第三編。第四編。新八犬傳（全部二冊に收載）

第五編。第六編。お伽四天王（猪熊入道、金鶏太郎、榮螺三郎、木蘭太夫）

第七編。新伊蘇普物語（短篇寓話五十八篇を收載）

第八編。第九編。お伽十二支（子持大黒以下全部十二章）

第十編。第十一編。お伽洋行船（お伽丸其他十二種）

第十二編。お伽立志噺（空氣銃其他十篇の少年小説を集む）

元來此の叢書は、全部舊作の輯録とて、矢繼早に發行を續け、翌年八月を以て滞りなく結了を告げるに至つた。

左に掲ぐるは、「明治お伽噺」第二編に收載せる、附木船紀行の大團圓とも見るべき「お池懇親會通信」の全文にて、はじめ第三卷臨時増刊「暑中休暇」の卷頭に收められたるもの、書簡文體に描

けるお伽噺としては、天にも地にも、只此の一篇のみなれば、桂舟の最得意とせる挿畫と共に、ここにこれを再現して文畫一致の妙趣を示す。

一筆啓上仕り候。暑中休暇に相成り候てから、毎日毎日好い天氣のみ相續き、誠に嬉敷事に存じ候。さて先日わ、附木舟にてお池中を見物致し、まことにあんな面白き事わ御座なく、思い出しても何だか體がムズ／＼致し候。其お話わ先日紀行に致し、御覽に入れ候えども、其のち又面白いこと御座候間、今日わ手紙を以て御通信申上候。

丁度昨日の事に御座候。私の處え蜻蛉参り、坊ちゃん！ 今日わお池の懇親會がありまして、是非坊ちゃんに来て頂き度いと申しますから、これから御一所に参りましょうと申候。只お池の事を聞いても、私は何だか好きに候處、お池の懇親會と聞き候えば、屹度面白かろうと存じ候間、急いで支度をして行つて見申候。

扱てお池え参り候えば、其所に水馬洋の水馬も居り候。蛙が淵の蛙も居り候。尻火浦の螢も居り候。甲良島の龜の子も居り候。緋鯉の瀬戸の緋鯉も居り候。鉄が崎の蟹も居り候。一同私の知つてる者ばかりに候間、お池の岸までお出迎に來て、一々お辭儀を致し候。

私わ蜻蛉と一所に、側にある椅子に腰をかけ候處、直ぐ御馳走が出て参り、それより餘興が始まり申候。



第一番は水馬のツイ〜踊に御座候。これは水の上を、大勢の水馬が、ツイ〜ツイ〜と飛びながら踊る踊りに御座候。次は蛙の布ざらしに御座候。これは自分の腹綿を、まだ出る〜と云ひながら、口から段々に引張り出して、仕舞にこれにて布ざらしの眞似を致すのに御座候。

三番目わ、蟹がお握飯の曲喰ひを致し、其次にわ龜の子が甲良で力持を致し、緋鯉わお職の輕業を致し候。何れも大喝采に御座候處、一番仕舞にわ、何處からか一匹の鷲鳥を連れて参り、其首を輪の様に致し、それを順々に飛び抜け候藝當に御座候。尤も蟹と龜の子とは、體が重くて飛べないもんだから、只此方で囃して居る計りに御座候。又螢わ、彼方の藤の蔓え、大勢列んでお尻



を光らせ候間、まるでほうすき提灯の様に相成りまことに見事に御座候。

其中に餘興が濟み候處、今度私に何かしると申候。しかし私わ、何も藝が無く候間、只大きな聲にて君が代を誦し、

お池懇親會萬歳!

と申候處、皆々大喜びにて、今度は私の爲に坊ちやん萬歳! 暑中休暇萬歳!

と申しながら、一同にて私を胴上げに致し、ワイ〜ワイ〜申候處、あんまり體を動かされて、目が廻り候程に相成候間、もう御免だ〜と申候えば、急に誰だか、坊わ何を云つてるんだよと申候間、吃驚して目を明き候えば、お池懇親會はお中止に成り

私わお庭のお山の柏の木の下で、兄様に頂いた釣床に乗つて居り、側にわ姉様が、もう御飯だ





からお起きよと仰有り候。よく考えて見候えば、矢張り只今のわ夢にて、先刻來た蜻蛉は居ず、只うしろの松の木で、蟬がミン／＼鳴いて居り候。早々頓首

八月十日

坊より

おち様え。

#### 第四節 「教訓繪噺」の出版

「明治お伽噺」の創刊と、殆ど其の時期を同じうして、「教訓繪ばなし」と題する愛らしい叢書が、新たに陣容を整へて、呱呱の聲を揚げ來つた。これは全部二十四冊、毎月二回發行といふ觸れ出しであつた。

然るに、此の叢書の出版動機は、聊か他の類書と異なるものあり、即ち廢物(舊版)を利用して、これを活用するにあつた。當時、博文館の紙型倉庫には、多年に亘りて刊行したる、圖書雜誌用の大小の圖版(主として電氣銅版)が、隙間なく積込まれ、驚くべき重量の爲めに、床板さへ低下し、徒らに塵埃の堆積する儘に委されであつた。

而もこれ等の電氣銅版は、何れも紙型となり、若しくは一旦雜誌面に刷出されしものゝみにて、今は悉く不用に歸し、いはゞ無用の長物に等しきものであつた。されば假に、これを屑屋に拂ひ下

げるにしても、辛うじて鉛の地金代にも當るまい。さりとて此のまゝに堆積して行けば、年月を経るに従つて、いよ／＼其の量も加はり、遂には倉庫の改造を餘儀なくするに至るであらう。



(刷版木) 紙表のしなば繪圖教

らば、嘗に紙型倉庫の負擔を軽減するばかりでなく、或は世にいふ一石二鳥を獲られるかとも想はれる。はた又其の叢書が萬一世間の需要に投じなかつたとしても、元々廢物の處分を主とするのであるから、營業上に何等の苦痛も與ふること無か

らうといふのが、即ち「教訓繪ばなし」發行の動機であつた。

かくて、これが編纂の事務一切を、少年部に於て引受けることとなり、菊判三十二頁に圖版約三